

---

# 欲望の王と無限の空

間上 通

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

欲望の王と無限の空

### 【著者名】

ZZコード

間上 通

### 【あらすじ】

グリードとの戦いを終えた少年、火野英治。彼はある日異世界に飛ばされる。その世界は女尊男卑の女性にしか使えない兵器、エスが存在する。英治はその世界で何を見るのだろうか。  
(この小説はISと平成ライダーのクロス物でオリジナル物のです)

## 異世界ヒートアイ（魔晄炉）

頑張つてこの小説にも完結させたい。

「ん…… じじはどこだ？」

いきなりだけど、俺、火野英治は気が付けば知らない場所にいた。全てのグリードを倒し、オーズの力も封印して旅に出たんだ。でも、旅の途中に謎の光に飲まれるとここにいたんだ。

「うーん、じじはどこなんだ？ ん、どうしてこれが！？ それにじじは何だ？！」

ポケットに入っていたのは3枚のメダル。もう皿にすることはないと思っていたもの、コアメダル。タカヒトラとバッタがあった。だが、オーズドライバーはなくて、代わりに見たことのないブレスレットをつけていた。全然心当たりがないんだよな、これに。

「そここの男、じじで何をしている」

不意に後ろから声がした。声の主は黒いスーツを着た美人で、緑色の髪をした中学生くらいと思う人を連れていた。

「えっと、何をしているってゆうか、気がついたらここにいたんですね。それよりじじはどこなんですか？」

「HSはHS学園だ」

怪訝な顔をして答えた。HS学園？ 何だろ？ それは？

「IIS学園って何ですか?」

「何？」  
「ううん、面倒なことにならへんよ、うだ。詳しへ話を聞かせてもらひなつてせ

「織斑先生！！」  
彼が腕につけているのはエスでは…？」

「うつて何？」そのことを聞くと、何を言つているんだつて顔をされた。これでも世界を旅しているから色々と知つてているつもりなんだけどなあ。

『IS』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を目的として開発されたマルチフォーム・スーツ。しかし、本来の目的である宇宙進出は全く進展がなく、ISはその高いスペックを持て余していたそうだ。そのスペックにより、ISは兵器として使われることとなつたんだけど、各国の思惑から、ISはスポーツとして使われるようになつた。結局の所、ISは飛べるパワードスーツに落ち着いたみたい。

しかし、ISは大きな欠点を抱えていたんだ、『ISは女にしか使えない』ということ。そうなると、世界はISを使える女性が偉いという風潮になる。いわゆる、女尊男卑ということになる。

「これがISだ。まさか、異世界の人間と会うことになるとはな」

ISの説明を聞いた後、俺は何度も何度も自分ですら分かっていない現状を説明した。取り調べをした織斑千冬さんはいい人で、俺の目を見て「嘘をついている目ではないな」と言ってくれた。まあ、一番の決めたになったのは俺の免許だった。俺は16歳だけど、すぐバイクの免許を取つたんだ。そこに書かれている日付とこの日の付は違う。この免許が偽物ではないことが照明されたからかな、話を信じてもらえたのは。

「織斑先生！！ やつぱり彼が持つていたのはISです。それも登録されていないコアの」

部屋に飛び込んできたのは最初に織斑さんと一緒にいた山田真耶さん。中学生じゃなくて、こここの教師だつたんですね。ごめんなさい。山田さんは俺が持つていたブレスレットの解析をしていたみたいで……って、それISだつたの！？

「火野。どうしてお前はISを持っていたんだ？」

「わからないです。気が付いたらそれを持っていたんで……」

「あと、このISの名前は『ライドオーズ』で、操縦者には火野君が登録されています」

「えっと、ISって女性しか使えないはずなんじゃ？」

「そう聞くと、織斑さんはため息をついて一言。

「あいにくだが、私の弟もISを起動させてしまつた。例外がないわけではないようだ」

結局、俺はこのヒューリ起動させてみる」となってしまった。どうなるんだろ、俺？

アリーナに連れてこられた俺は、ISの展開のイメージの説明を受けていた。俺がこれを起動させるか、どうかで俺の扱いが変わつてしまつみたい。どっちになつても怖いなあ。

「さて、やつてみますか。ライドオーズ、起動

俺の体に粒子が集まつていいくよ、それが体を包むアーマーを形成していく。何秒かかかっただけ、俺は濃いグレーの装甲を身に纏つていた。装甲が展開されたのは肩、胸、腕、腰、脚に頭。名前にオーズつてあつたからカラフルかと思つたけど、それでもないようだ。

「起動したか。火野、武装を確認してみる」

「武装は…ここか、一覧にあつたのは剣が一本。名前は『オーズカリバー』で、斬撃も飛ばせるみたい。

「武装の展開はできるか？ 最初だから声にだして呼んでみたほうがいいかもしれないな」

「そうですか。来い、オーズカリバー！」

ISが展開されるように光の粒子が集まり、剣の形となる。これがオーズカリバーって、メダジャリバーじゃん。

「ふむ、次は飛んでみる。ああ、こっちのイメージは…」

「大丈夫です。そつちはなんとなくイメージできますから」

イメージするのは赤い翼。炎を纏い、空を舞う不死鳥を。次の瞬間、俺は宙に浮かんでいた。そして自由に飛ぶ。

「火野君は凄いですね。初めてなのにあんなに自由に空を飛べるなんて」

「ああ、だが妙でもあるな。あるで火野は何かで飛んだことがあるようだな」

織斑さん達が話している間も俺は飛ぶのを続けていた。オーズとは違い、直接、肌で風を感じるのは心地よかつたから。

「火野、最後だ。お前のISの適正を見る。山田先生、お願いします」

「えー！ 私ですか…はあ、わかりました。準備してきます」

しばらく待つと、山田さんが緑の装甲を纏つて現れた。データによると、山田先生が使っているのは『ラファール・リヴィアイヴ』といふものらしい。それがどんな機体なのかわからないけど。

「火野君、よろしくお願ひしますね」

山田さんは微笑みをこなして回答していく。「うわ、それは柔らかにお願いします」と返しておいた。

「それでは、始め！」

「こわもす」

織斑さんの掛け声とともに、山田さんは真剣な目付きになつて、アサルトライフルをこちらに向けてくる。それをかわして切りかかるが、よけられる。正直、ズレを感じるつていうか、思考と反応にタイムラグがあるつていうのかな。

だが、そんなものを気にしている余裕はなく、山田先生は攻撃を続けてくる。投擲されたグレネードをよけると、そこにアサルトライフルを構えた山田さんが。

「しまつ

」

「シンシン！」

アサルトライフルの直撃を貰い、バランスを崩して地面上に激突する。

この中のシールドエネルギー、ようするにHPみたいなものは残り少ない。いちかばちか、オーズカリバーの斬撃にかけてみるか。

「はあああああああ

構えるひらりを警戒しながら、一定の距離を保つ山田さん。彼女は銃口を向けてくる。

「セイヤ————！」

俺が剣を振ると、引き金が引かれたのは同時だった。

鳴り響くブザー。結論から言つと、俺の負けだった。俺の最後の一撃は当たつて、大ダメージを与えることに成功したがシールドエネルギーを0にするには至らなかつたということだった。

「火野、お前はIIS学園に入学することになった。お前が何であれ、上は男でIISを使える者のデータが欲しいよつだ」

IIS学園は寮のため、寝る場所はあるし、入学するとある程度の資金援助はあるそうだ。行き場がない俺にとつては断る理由もないため、受け入れることにしたんだ。

ただ、問題は織斑さん改め織斑先生の弟以外は女子だ、ということ。色んな意味で大丈夫かな。不安になつてきた。ちなみに入学式は1週間後で、それまでにIISの基礎知識を叩き込まれることになつて、泣きそうになつたのは別の話だ。

入学式当日。俺はイレギュラーであるため、クラスへの合流は自己紹介の時間からになつた。まあ、下手に混ざれば大変なことになるんだろうな。で、俺は織斑先生と一緒に教室に向かっていた。俺

のクラスは織斑先生が担任で、山田先生が副担任の1年1組。織斑先生の弟、織斑一夏も同じクラスなので正直、ホツとしている。男子1人つていうのは絶対辛いよな。

「私が呼んだら入つてこい」

教室に着くなり、織斑先生はそう言い残して入つていった。織斑先生が入つていくと、「げえつ、関羽！？」と何かを叩いた音が聞こえてきた。関羽つて言つたのは織斑先生の弟だろうけど、その後の叩いた音は何だろう？ 知りたいけど、何か怖いな。

今度は「キヤ————」だの、「お姉さんに憧れて來たんです」とか、「お姉さまのためなら死ねます」とか聞こえてきたから、さらに不安になつてきた。大丈夫、…だよね？

「都合上、入学式にこれなかつたやつが1人いる。火野、入つてこい」

閻魔大王のお呼びがかかつた。怖いよ、マジで。こういつ時は、あれを言えば良いんだったかな。

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げなきやダメだ…って違う…！」

こうして教室の扉開ける。一斉に注目される俺。そして一言。

「……間違えました」

扉を閉じる。ふう、危なかつた、俺は学校に来んだ。動物園に来たんじやないからね……

ガシツ、スパーン！！

あああああああああ、頭が割れる。そして引きずられた俺はもう一度、大量の視線にさらされた。

「いい加減にしろ。お前は普通に自己紹介ができないのか」

「そ、サーイエツサー」

有無を言わさない口調、そして、視線。とどめとばかりに手にする凶器（出席簿）。ダメだ、勝てる気がしない……

「え、と、火野英治です。一応、IRSが使えるということで入学することとなつてしましました。え、と、よろしくお願ひします」

自己紹介が終わると同時に響きわたる黄色い悲鳴。耳が痛い……

「静かにしろ！ 全くはしゃぐのは勝手だが、時と場所を考えろ。火野の席は織斑の隣だ」

俺が席に着くと同時に始まる授業。この学校生活に不安を感じながら、どこか楽しみにしている俺がいるのも事実だった。

## 異世界と学園ヒーロー（後書き）

誤字・脱字、設定上のミス、疑問点、感想お待ちしております。

## ポーテと金ドリと推薦（前書き）

COUNT THE MEDALS  
英治が持つているメダルは……

バツタ ト ラ タカ

「ん~。終わつたあ」

1時間目が終わつて背伸びをしている俺は隣を見て固まつた。

「あー……」

隣の席の織斑一夏がとても深刻な顔をして悩んでいたからだ。これつて話しかけていいのかな？ あ、でも早いうちに仲良くなつておきたいからね。

「えつと、大丈夫？」

「ん、ああ、悪い。えつと火野だつたな。知つてると思つけど織斑一夏だ。よろしくな」

「英治でいいよ。よろしく一夏」

「それにしても英治がいてくれて良かつたよ。男1人つていうのはキツイしな」

早速仲良くなれた一夏と話している最中、周囲の女子は「男の友情：ハアハア」、「織斑君×火野君ね」とか聞こえてきた。色んな意味で大丈夫なのかな、クラスメイトは？

「……ちょっとといいか」

「…… 篇？」

俺達を珍獸のように見ている女子の中、1人話しかけてくる人がいた。ポニー・テールの人だけど、一夏と知り合いみたいだな。あの感じから、久しぶりに会つたって感じだな。

「悪い、俺ちょっと行つてくる」

ポニー・テールの人連れられてどつかに行つた一夏。感動の再開を邪魔するつもりはないけど、俺を1人にしないで。

キーンコーンカーンコーン

2時間目始まりを知らせるチャイムが鳴つた。授業が始まるから、と言つて自分の席、教室に戻つていく女子。勉強は好きじゃないのに、それに助けられたつてのは微妙だ。

パンツー！

何かが叩かれた音がした。この音は織斑先生が出席簿を振り下ろした音だな。

「とつとと席に付け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

案の定、誰か、それも一夏が叩かれていた。さつさと座らないからだよ。

「 であるからにして、EISの基本的な運用は

教壇に立つのは山田先生。周りを見ると1人を除いて、皆はスラスラと板書していく。俺は1週間で叩き込まれたものがあるから、何とかついていくてる状態だ。

「英治、これわかるか?」

「うん、まあ、何とかつてとこかな」

「……マジかよ」

「織斑君、何かわからないところがありますか?」

ソワソワしている一夏に気づいたんだわ。山田先生が一夏に尋ねる。一夏の様子からだと、全くわからないんじゃないかな。

「全くわかりません」

「……え!?」

自信満々に答える一夏に、固まる山田先生。一夏、そこは自信満々に答えると「じやないでしょ。ほら、山田先生が戸惑つてしるし。

「え、えっと、織斑君以外にここまででわからないところがある人はいますか?」

「シーン……。」

誰も手を手を挙げないから、顔が青くなつていく一夏。あの参考

書を読めば何とかなると思つただけだ。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「電話帳と間違えて捨てました」

パンツー！

また降り下ろされる出席簿。というか、あれは必読じゃなかつたの？俺はエラの知識を身につけさせるためのものかなあ、と思つていたんだけど。

「再発行してやるから1週間で覚える」

「い、1週間での厚さはちよつと……」

「やれと言つてこる。それに火野は1週間である程度だが覚えたぞ」

そう言つて俺を指す織斑先生。まあ事実だけだ。

話が進んでいくと、山田先生が放課後、一夏の補修をする「」となつた。

「あ、でも織斑先生がお義姉さんつていつのは……」

えつと、どうやつたら補修からそんな話になるのかな。えつと、頑張つてください。

「あー、んんつー！ 山田先生、授業を」

妄想が暴走していそうな山田先生は正気に戻つたようで、授業が

再開された。山田先生、HISに乗つてゐるときはしつかりしてゐるに……

「ちょっとおもろじへで？」

「ん？ 何か用？」

「へ？」

2時間目終了後、いきなり話しかけてくる人がいた。金髪ロールで、俺達を見下しているような視線だった。これがこの世界の「いまだきの女子」なのかな？

「まあ！ なんていう反応ですの。わたくしに話しかけられるんですの、それ相応の態度があるのではないかしら？」

本当に偉そうにしている人だな。こうこうのはあまり熱しないように軽く対応するのがいいのかな。

「えつと、オルコットさんだよね？ セツキも聞いたけど向の用かな？」

一夏は何故かわからないけど、余計なことを言つやうだから、俺が対処しないと。

「ふん、まあいいですわ。イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしですもの。その位の態度で許してあげますわ」

答えになつてないよ。俺は何の用か聞いたんだけど。

「なあ、質問いいか。代表候補生つて何？ それに俺は君が誰だか知らないし」

「あ、あ、あ、貴方、本気でおっしゃつてますの？」

「一夏！！ 何で余計なことを言つてるの？ といふか、代表候補生なんか文字通りだよ。オルコットさんはショックで何かブツブツ言い始めたし。

「えつと、代表候補生は国のHISの操縦者の候補生のことだよ。文字通りの意味だよ」

「なるほど、エリートみたいなものか」

「そう。エリートなのですわ」

「あ、何か復活した。でもあくまで候補だからね。絶対的に偉いつてわけじゃないと思うな。」

「あ、貴方もわたくしを侮辱しますの？」

何か不機嫌な顔でじつじを見るオルコットさん。まさか、俺の心を読んだ？

「いや、普通に声にでていたけど」

あ、そうなの。

「ふん。本来ならわたくしのような人間とクラスを共にできるのはとても幸運なことですのよ。その現実を理解していくだける?」

「そうか。それはラッキーだ」

うん、さすがに俺も一夏の反応をとるかもな。人を見下しそぎだ。

「……馬鹿にしていますの?」

いや、君が幸運だと言つたなんだけど。

「大体、よくISの知識がないのに入学できましたわね。唯一の、いえ、今は2人の男のIS操縦者だからもう少し知的な人物かと思つていましたけど、期待はずれですわね」

「オルコットさん。1ついいかな。男はISに関わりをもたない人が大多数なんだ。それなのにISの知識がないからってああだ、こうだ言うのはどうかと思うよ。貴族の振る舞いはそういうものじゃないと思うけど」

キーンコーンカーンコーン。

言い切る同時になるチャイム。

「つ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね、よくつて！？」

捨て台詞を残してオルコットさんは席に戻つていった。ああ、完  
全に敵視されたな……

「3時間目を始める前に、クラス代表を決めないとな」

教壇に立つた織斑先生が告げる。クラス代表とは要するにクラス長のようなものらしい。クラス対抗戦に出るとかすることもあるけど。何か嫌な予感がするなあ。

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「俺もそれがいいと思います」

次々とあがる一夏がいって声。俺に来ないよう一夏に誘導しないと。

「え、お、俺？ つて何で英治も推薦してんだよ！ だったら俺は英治を推薦します」

え、？

「確かに火野君でもいいかもね」

「私は火野君の方がいいな～」

一夏の一言をきっかけに俺の名前も言われ始める。なんてことをするんだ。

「では候補者は織斑に火野。他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ。言つておくが2人共、他薦された者に拒否権はないぞ」

うん、この世界に神なんていない。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

音をたてて立ち上がったのはオルゴットさん。「男なんかがとか「屈辱的」とか言つてているけど、まあ、やつてくれるのなら言わせておくかな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まことに料理で何年覇者だよ」

日本の侮辱まではじめたオルゴットさんに一夏は怒つた。俺もさすがに不愉快だな違う世界とはいえ、自分の生まれた国を馬鹿にされて。

「なつ……私の国を侮辱しますの？ 極東の猿のくせに」

もう我慢できないや。自分のことなら我慢できるけど、友達を馬

鹿にそれで黙つていられるほどできた人間じゃないから。

「何でオルコットさんはここに来たの？ わざわざ苦痛な日本に。それに国にはその国のこところがあるんだ。一夏がイギリスを馬鹿にしたようなことを言つたのは謝るよ。でも、君だつて日本を侮辱している。それで自分が被害者面するのがイギリスの礼儀なの？」

「も、もうこことですわ。決闘ですわ」

「おひ、ここゼ。四の五の言つよりわかりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けましたらわたくしの奴隸にしますわよ」

「真剣勝負で手をぬくほど腐つちやいない」

「気が付けば一夏とオルコットさんで白熱した状況になつてゐる。忘れられているんじゃないかな、俺？」

「ハンデはどれくらいつける？」

一夏のその発言にオルコットさんは嘲笑を浮かべ、クラスの皆は笑い出す。この世界の常識は女子より男子が強いだもんな。強いのは一夏だらうに。

「一夏、君は初心者なんだからハンデとかは考えなくていいよ。大体、真剣勝負だからね」

「え、火野君も何言つてるの？ 男が強かつたのはずっと前の話だよ」

「それはISが強いからじゃないかな。ISが使える男子が女子よりも弱いことは決まってないと思つよ」

そう言つと黙り込むクラス。多分、皆の中では女子=ISへ男子つてなつていたんじゃないかな？

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑、オルコット、それに火野は用意をしておくよ。ついでに。それでは授業を始める」

結局、俺も戦うことになつたのか。どうせやるんだつたら頑張ろうかな。クラス代表はやりたくないけど、オルコットさんには負けたくないから。

## ポートと金ドット推薦（後書き）

意見、感想。その他お待ちしております。

とても私事な疑問ですけど、オーズで一番好きなコンボは皆さん何なのでしょうか。自分はタジャドルですけど、フィギュアーツの影響でガタトラバも気に入つたんですけどね。あ、ガタトラバはコンボじゃないか（笑）

## 放課後と管理者と説明（前書き）

Count the medals

英治が持ってるメダルは……

タ力  
トラ  
バツタ

## 放課後と管理者と説明

放課後、部活とかに入るわけでもなく、補修もない俺は寮の自室へ戻ることにした。1026号室、それが俺の部屋だ。2人部屋だから一夏が来るのかな。

あれこれ考へてゐるうちに自室へとどりついた。とりあえず工の参考書を読んでおくかな。一夏より先に覚えないと織斑先生にボコボコにされそうだしね。

「えつと、今日はPHCについて……と」

ズ、なたに伝こと』

参考書を読んで数分。頭に声が響いてきた気がした瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

「ん、俺、寝つけたのか…って、じーじーん？」

目が覚めた俺に見えた光景はビルが見える夜の公園みたいな場所

で、マフラーを巻いた人が立っていた。

「気がつきましたか。火野英治、いや、異世界の仮面ライダー オーズ」

「つーー、どうしてそれを？ それに仮面ライダーって…」

俺は目の前の人があつたことに絶句した。俺がオーズであることを知つてゐる、それを知つてゐるのはいく一部のはずなのに。

「警戒しなくていいですよ。僕の名前は紅渡。貴方に伝えることがあつて来ました。貴方ならわかると思いますが数多くの世界があります。いわゆるパラレルワールドですね」

紅さんが何かをしたのだろうか。辺りには沢山の地球が浮かんでいた。

「それぞれの世界には戦士が生まれました。それを仮面ライダーといいます。人類の進化である存在や時を護る存在、一言に言つても仮面ライダーは沢山います。そして貴方のオーズも仮面ライダーの1つです」

「そりなんですか。でも、俺はもうオーズの力は……」

「そうオーズの力はもうない。俺の世界のグリードを倒したときに同時に封印した。この世界に来たときに何故か3枚のメダルは持つていたけど。

「そのことに關しても聞いてください。貴方がこの世界に来たのは異世界、つまり貴方とは違うオーズが関係していきます」

「俺とは違うオーブ……？」

「実際に見てもらった方が早いですから」

紅さんが見せたものは異世界のオーブがイマジンと呼ばれる怪人と戦うところから始まった。異世界のオーブはアンクと組んでいたんだ。

オーブの戦いの途中に現れた紺色の仮面ライダー、電王。イマジンは近くにいた少年を使って過去に飛んだ。イマジンと戦う役目を持つ電王は時を越える能力を持っていた。強欲なアンクは過去に飛んで、その時代のコアメダルを手に入れようと電王の時を越えるための力、デンライナーに乗り込んだ。それを止めるためにオーブもデンライナーに乗り込んだ。

でも、オーブやアンクが勝手なことをすると過去が変わってしまう。デンライナーのオーナーにデンライナーから出るな、と厳重な注意を受けていた。

結論からいくと、アンクは勝手な行動をして、セルメダルを過去に落としてしまった。それに気づかずに現代に戻ってきたオーブ。しかし、現代は変わっていた。過去にいた組織、ショックカーがセルメダルと独自に作ったコアメダルで新たなグリードを生み出した。

そのグリードはその時代の仮面ライダーを倒し、自分達、ショックカーの駒とした。ショックカーを倒せる者が居なくなつたため、それ以降の仮面ライダーは誕生しなくなる。そして人類はショックカーの手に征服された。

「で、これのどこが俺がこの世界に来た理由に？」

「話はまだ続きます」

現代に帰ってきたオーズ。過去を修正しようとしたが、失敗してデンライナーと相棒を失った電王はショックカーに敗北し、捉えられた。

誰もが絶望したとき、とある科学者によつて洗脳を解かれた仮面ライダー1号、2号。助けられたオーズ、電王。人々の思いにより復活したそれ以降の仮面ライダー達。彼らの総力戦により、ショックカーは倒された。

役目を終え、去つていくライダー達。別れを告げ、去つていく電王。めでたしめでたし、という感じで終わつたのだ。

「異世界でこんなことがあつたのはわかりましたけど、一体これのどこに問題が？」

「まず、最初のイマジンと契約した少年です。なぜ彼は40年前の時間に関わりを持っているのか。そして彼はデンライナーについて行き、40年前に置き去りにされました。彼は洗脳された仮面ライダーを救い、現代では彼の親友の父親となつていました」

「????」

「何が問題なのか全くわからない……

「つまりです。同じ世界なのに違う時間軸が生まれている。これだけならないのですがオーズは電王といたために時間の影響を受けません。2つの時間軸があるにも関わらずオーズは1人だけ。簡単に修復できなくなつた時間を修復した弊害として当時オーズが使えたメダルが別の世界、つまり貴方がいるE.Sの世界に流れたんです」

「アメダルの扱いはオーブが一番いい。だから戦いが終わつてい  
る俺が呼ばれたってことなのかな。」

「僕が貴方に頼みたいのはコアメダルの回収及び管理です。封印す  
る手段、場所がない以上、誰か信用に値する人物に頼みたかったん  
です。後はこれを」

渡されたのはオーブドライバーと、カマキリ、チーター、ゴリラ  
のコアメダル。

「これが必要とされるつてことは怪人がいるんですね」

「ええ。まず風都という街がその世界にあります。そこにはドーパ  
ントと呼ばれる怪人と仮面ライダーウがいます。それにコアメダル  
から作られたグリードのようなものも誕生してしまいました。クワ  
ガタのメダルからならクワガタの怪人が生まれ、クジャクならクジ  
ヤクの」

どうやらコアメダルで生み出されたヤミーと考えればいい感じみ  
たい。コンボはタトバしかなれないけど、使いやすいメダルがある  
から充分戦えるだろう。

「僕達の役目は世界の管理であるためにむやみに世界に干渉はでき  
ません。ですから」

「サポートしかできない、と続ける紅さん。

「そういえば、俺のIS、ライドオーブって？」

「あれは貴方がこの世界で行動をしやすいうように僕が与えたISで

す。それでは頼みましたよ、仮面ライダー オーズ」

紅さんがそう言つと同時に俺は元いた場所、寮の自室に帰つたきた。

やらなければいけないことがあるけど、俺しかできないし、後悔はしたくない。だから俺の手が届く場所でやってみよう。

決意を新たにしたところで、『飯を食べようと思った。隣の1025室の扉がボロボロだったけど何かあったのかな。

翌朝。

結局、一夏が来なかつたので男子は1人部屋だと思つて食堂に来ると、不機嫌そうなポニー・テールの人と一緒にいる一夏がいた。

「おはよう、一夏。一夏も1人部屋？」

「いや、何故か篠と同室だつた。てっきり英治とかと思ってたんだけど」

「わつわつ一夏はその子、えつと、篠ノ之さんと親しそうだけど、どんな関係なの？」

「俺と篠は幼馴染だけど」

幼馴染か。俺にはそういう人がいないな。親に連れ回されて色々な国に行つたからね。

「知つてるとと思うけど、俺は火野英治。よろしく、篠ノ瀬さん

「ああ」

「あ、隣いいよね」

「おう、いいぜ」

それにして、この学食はメニューが多いなあ。やっぱ色々な国から人が来るのが理由かな。ちなみに俺の朝ごはんはパンにスープ、サラダにスクランブルエッグの洋食セット。和食セットが迷つたけど、気分でこつちに決めた。

「といひでし、一夏つて何号室なの？」

「1025号室だけど。それがどうかしたか？」

「……一体、昨日は何してたの？ 俺は1026で、何かの音がよく聞こえたんだけど？」

「それは……」

「いやいや、そんなことあるわけないだろ」

「言ことよどむ一夏。何かやましい」とでもあつたのかな？

そう聞くと、必死で否定された。何かあつたんじゃないかな。ま

あ、人の恋路にを邪魔する奴はなんたらかんたらつて言つから、あまり突つ込まない方がいいか。俺は恋愛は苦手だから。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるだ！」

一 夏達と雑談を交わしながら食べているけど現れた1年生寮の寮長こと織斑先生。食事はゆっくり食べたいけど、グラウンドを走らさせられるのも嫌だからなあ。

## 放課後と管理者との説明（後書き）

今回からライダー色がかなり強くなっています。  
次回はクラス代表決定戦の話と英治とライドオーズの設定を載せたいと考えています。

感想、意見、誤字脱字報告、お待ちしております。

Regret nothing

Tighten Up (前書き)

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ  
カマキリ  
バッタ  
トラ  
チーター  
ゴリラ

早くもあれから1週間。代表決定戦当日。ISそのものについて詳しく述べた俺は何とか勉強して、何回かアリーナで練習しておいた。元々は一夏と一緒に練習しようと思つたんだけど、何故か剣道の練習ばかりしていたからやめておいた。ISの勝負をするんじゃなかつたのかな。

話を戻そう。今回の決定戦はくじ引きの末、1回戦が一夏とオルゴットさん。それで勝つ方が俺と戦うことになった。

一夏のIS『白式』はさつき届いたばかりのもので、結局一夏はずつと剣道の練習をしていたらしい。大丈夫なのかな？

「じゃあ、籌、英治。行つてくる」

「あ……ああ。行つてこい」

「頑張れ」

首を縦に振つた一夏は、ゲートから発進して行つた。そしてオルゴットさんのIS『ブルー・ティアーズ』と対峙する。

「あら、逃げずに来ましたのね。いいですわ。まずは貴方から倒して差し上げますわ」

「そりかよ」

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルゴットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲で」

「うひゅやいな、オルコットさんは大型のライフル スターライターか？ のトリガーを引いた。放たれるレーザーが開戦の合図となつた。

オルコットさんの連射を何とかよけ続けている一夏。中にはかすつているのが多く、さらに白式の武器は近接ブレードしかない。経験、射程どどれをとっても一夏が不利なのは一目瞭然だつた。

そこから置み掛けるようにオルコットさんのISからは青いフィン状のパーツを飛ばしてくる。あの武装の名前が ブルー・ティアーズらしいんだけど、どう見てもファンネルにしか見えない。さらに細かく言ひうと、自由の名前をもつやつの後継機が、翼から飛ばすやつだな。

最初はオールレンジ攻撃に苦戦していた一夏だけど、攻略のきっかけをつかめたのか、少しずつだけど、かわせるよひになつていた。

「27分。もつた方ですわね褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

オルコットさんが言つたように試合開始から27分が経過した。一夏の動きは段々良くなつていくんだけじ、追い詰められていることをシールドエネルギーが語つていた。俺ならどうやつてあのビットに対応しようか？ ライドオーズも斬撃が飛ばせる位しか白式と違わないし。いや、機動性で負けているか。

「うおおおおおおおおおお」

雄叫びをあげた一夏はビットを一つ破壊した。そこから次々とビ

ツトを破壊していく。一夏なりの攻略方を見つけたんだね。

そして4つのビットを壊した一夏はそのままオルコットさんに突進していった。これで決めれるのかな？

だが、その瞬間、オルコットさんの口が上がった気がした。

「かかりましたわ」

その言葉とともに放たれたのはビットではなくミサイル。接近していた一夏にはかわす余裕もなく、黒煙に包まれた。

「一夏っ……！」

隣で見ていた篠ノ之さんは心配そうに声をあげた。でも織斑先生はそれとは反対に鼻を鳴らしていた。

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

煙が晴れると、そこには先ほどまで纏つっていたI-Sの形が変わっている一夏がいた。百式の名にふさわしく、より白い装甲に。そして手にしたブレードも形を変えていた。日本刀のような 雪丘式型へと。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。とりあえず今は千冬姉の名前を守るわ」

「貴方はさつきから何を？」

オルコットさんの疑問も構わずに、加速する一夏。そしてその剣が振り降ろされるとき、ブザーは鳴った。

『勝者、セシリ亞・オルコット』

「「「え?」」」

誰もが思った、どうしてこうなった、と。もちろん、俺も。どう見ても一夏が攻撃を当てようとしたところで終わった。オルコットさんがその隙に攻撃したわけでもなさそうだし。

「さて、次は火野とオルコットの試合だ。オルコットの休憩と補給が完了次第始める」

一夏の決着の理由は後で聞こう。今は前を見ていなけば。

「火野、準備はいいか」

「大丈夫です」

今度は俺が出撃する番だ。

「一夏。仇はとるよ」

「頼んだぜ、セシリ亞に一泡ふかせてやるひつぜ」

さて、行きますか。一夏に頷いて俺は出撃した。

「今度は、圧倒的な差で勝つてみせますわ」

一夏との決着のつき方に納得がいっていないのか、オルコットさんは俺を睨んできた。

『それでは試合を始めろ』

試合開始の合図とともにオーズカリバーを開幕し、構える。下手に突っ込むのは危険だと思ったからだ。

「貴方も近接用の武器しかないですね。わたくしを馬鹿にしていますの」

「やつは言われても……」

同時に剣を振り、斬撃を飛ばす。これはシールドエネルギーを多少消費するが、ないよりはマシだから。

「なつ……」

そんな攻撃が来るのは思わなかつたのか、驚いた声をあげていただがよけられた。

「まあ、いいですね。わたくしが勝ちますので」

そう言つてビビットを開幕するオルコットさん。俺にも一夏と同じようにじわじわダメージを与えていく。頭でいうしなきや、とかはわかるのに、思つようになかわせない。直撃はもうつてないけど。

「くつ！ 先程の方よりはやれる様ですわね」

上手く隙をつけて何回かは攻撃できたが、こちらが不利なのは変わらなかつた。やっぱり差は射程と経験だなあ。こつちはEISを動かして2週間くらい。でも、オルコットさんはその何十倍もあるはずだ。

どうやらオルコットさんはビットを制御しながらライフルを撃つことはできないようだが、一夏のときより嫌な場所を狙つてくる。俺が動く場所を読んで、そこに一撃というスタンスを取つている。自分の欠点を一夏との戦いで直そうと思つたんだろう。俺にとつては困ることだけど。

「これで墜ちなさい」

ビットに囲まれて逃げ場を失つた。しまつた！！ そう思つたころには遅く、俺はミサイルの餌食となつてしまつた。負けたくないなあ。煙に包まれながら、俺はそう思つた。

#### 单一仕様能力 オースキャン発動

これは何だ？ そう思つてはいる俺の頭に流れ込んでくる使い方。成程、だからコイツもオーズなのか。迷わず3枚のメダルを取出し、スキャンする。

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

「なんですの今の歌は……ツ！！」

「歌は気にしないで」

赤いヘッドギアにトラのような爪を装備したアーム。そして緑色の脚。オースタバコンボをHSにしたようなものを俺はまとっていた。

「何かパワーが体の中に溜まつてくる」

使い慣れたものだからか、今なら勝てる気がしてきた。さて、反撃開始だ。

「くつ！… 貴方が何をしようともわたくしは勝たなければいけないですの！」

やつぱりビットは厄介だな。だつたら。

『タカ！ カマキリ！ チーター！』

「はあ…！」

チーターのスピードを生かし、ビットに近づく。次はカマキリの腕についたカマキリソードでビットを切る。やっぱりカマキリは使いやすいなあ。

縦横無尽に飛び、ビットを切り裂いていく。当たりそうなレーザーは弾きながら。

そのまま全てのビットを壊した俺はミサイルを警戒しながら、タカキリーターで攻めていた。すれ違ひざまに一閃。反転して連續キック。

「くつ！『インター セプター』！！」

ショートブレードを展開したオルコットさん。接近戦には慣れていないんだろう。いつのカマキリでの連撃にはついてこれないようだ。

「そろそろ決めるか

『タ力！ トラ！ バツタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！』

決着をつけるチャンスを見つけた俺はもう一度、タトバコンボになり、メダルをスキャンする。

『スキヤーニングチャージ！』

「はああああああああ、セイヤーーー！」

赤、黄、緑の輪を通りぬけて放つキック、タトバキックはオルコットさんに直撃してシールドエネルギーをゼロにした。初めてタトバキックが成功した気が……

『勝者、火野英治』

よし、勝てた……って、このままじゃ俺がクラス代表？ それは嫌だな。よし、敗者に権利はないってことで一夏にやつてもうつかな。

『火野、勝利の余韻に浸っているのはいいが、聞きたいことがある。

戻つてきたら話を聞かせてもらひつけ』

有無を言わさないような口調の織斑先生。えへと、俺何かしたかな?  
うへん、何だらう?

## Regret nothing Tiptoe Up (後書き)

次回はクラス代表決定戦の後日談+なので、明日に投降したいと思っています。そろそろ変身させたいなあ。

## オリキャラ・オリエイ設定？（前書き）

軽いネタバレを含むので、それが嫌な人は見ないことをオススメします。あと、先に4話を見ておくことも推奨します。

## オリキャラ・オリIS設定？

### キャラ設定

#### ・火野英治

主人公で16歳の少年（今年で17のため、実は一夏達より1つ上）。

海外旅行した先で、家族を失う。その後、旅人である伊藤明郎に拾われ、共に世界をまわる。明郎から勉強をそれなりに教えて貰つたが、中学は行つてない オイ！

1年前に帰国、その後オーズとして戦うことに。火野映司とは違い、自分の欲望を持ち、それを制御した。紫のメダルも取り込んでおらず、無理矢理従えたが、全く影響がないわけでもない。

性格としては火野映司より多少クールというかドライな感じ。

### IS設定

#### ・ライドオーズ

英治がこの世界で活動しやすいように与えられたIS。コアは紅渡達と関わりがある異世界の篠ノ之束が作ったコアが使用されている。基本装備はメダジャリバー似の剣『オーズカリバー』だけ。

#### ＜オーズカリバー＞

メダジャリバー似の剣。能力としてはシールドエネルギー消費で斬撃を飛ばせること。時空は切れない。

#### 『ディアクティブモード』

メダルをスキャンしていない状態で、グレーの装甲をしている。モチーフとしては「ガンダムSEED」等のガンダムのディアクティブモード。スペックはISの第2世代くらい。

## 『スキヤーニングモード』

单一使用能力「オースキヤン」発動時にメダルをスキヤンすることによってそれに対応した力を得る。タカならレーダーの強化、カマキリならカマキリソードの装備などなど。单一使用能力自体はそれほど凄いものではないが、コンボを成立させると恐ろしい程のスペックを出すことが可能。

## 〈タトバコンボ〉

タカ、トラ、バツタのスキヤンにより展開される。この姿が一番、オーズカリバーの性能を引き出せる（斬撃を飛ばすのの燃費がいい）。スペックとしては第3世代ぐらい。必殺技は3色の輪をぐぐりながら放つタトバキック。余談だが、オーズとして戦っていた時、英治はグリードはおろかヤミーにすら当てることができなかつた。

## メダル設定

- ・タカ…上述の通り、視力に関する能力が上がる。元々ハイパーセンサーを積むIISのため、能力を本気で使うと……。
- ・カマキリ…カマキリソードの装備。
- ・トラ…トラクロールの装備。テレビ本編と違つて優遇されるのだろうか。
- ・ゴリラ…ゴリバゴーン使えるようになるパワー系のアーム。正直、スピードバトルのIISバトルでは使いにくいところが……。
- ・バツタ…跳躍力、キック力を上げる。普段飛んでるため、跳躍力は意味あるのだろうか。
- ・チーター…いわゆる加速装置。飛んでるのにどうしてチーターで速くなるのか、と野暮なことは聞いてはいけない。

## オリキャラ・オリエン設定？（後書き）

?つてやったけど?とか?は作るのだろうか、俺?

## 尋問とクラス代表と//ルク缶（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

## 尋問とクラス代表とミルク缶

「さて、火野。お前に聞きたいのはお前のISの色が変わったときに使ったメダルのようなものだ。あれは一体何だ?」

試合後、織斑先生に呼び出された俺は、コアメダルについて聞かれていた。いくら異世界から来た、と言つてもなあ。変身して怪人と戦つていましたって言つても、信じてもらえないだろうし。何かいい言い訳はないかな。

『この世界にも怪人はいます』

不意に思い出した紅さんの言葉。その人がそう言つてたことが本当なら……

「織斑先生。俺がこのメダルを使って怪人と戦つていた、と言つたら信じますか」

「怪人だと。どうやらお前がいた世界にも怪人がいるようだな。で、そのメダルがどうした?」

「信じてくれるんですか?」

「田を見ればわかるさ。それに火野は嘘をつきたい訳ではないのだろ?」

信じてもらえると確信した俺はオーズについて話した。コアメダルのこと、コンボのこと、何故かライドオーズでもメダルが使える

「こうじ。そして手元にあるオーディオ・ドライバーも見せた。

「ふむ、どうやらこの世界にいる怪人とは違うようだな。ここにいる怪人はガイアメモリと呼ばれる物を使って人間が変化するドーパントだ。風都という街によく出回るものだ」

「火野君が仮面ライダーだったなんて、私、思いもしませんでしたよ。そういうえば風都って街にも仮面ライダーがいますよね」

「ああ、そうだな」

山田先生の問いかけに織斑先生は何かを懐かしむようだった。その風都の仮面ライダーと関わりがあつたのかな？ 僕もその仮面ライダーに会つてみたいなあ。

「あ。織斑先生。ちょっと相談が……」

聞きたいことは2つ。1つはその風都の仮面ライダー。そしてもう1つは……

「では、1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、1繋がりでいい感じですね」

翌日のH.R.。山田先生が告げた結果に、ある1人を除いてクラスは盛り上がっていた。結局、一夏になつたんだ。俺は降りたんだけ

ど、まさかオルコットさんまで降りるとは思わなかつたな。

「先生、質問があります」

ある1人こと、織斑一夏は納得のいかない表情だった。勝つたのは俺で、その次はオルコットさん。最下位であつた自分がなるなんて、夢にも思わなかつただらうなあ。

「俺は最下位であつたのに、何でクラス代表になつてるんでしょうが?」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

音を立てて立ち上がつたオルコットさんは今までとは違つて一夏を見ていた。きっと見直したんだろうな。その後も理由を喋つていくオルコットさん。大人げなく怒つたことを反省しているようだけど、プライドが高いのは変わつてないみたい。「わたくしが勝つのは当然のこと」って。前よりは憎めない感じだけね。

「それで“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

あ、一夏のこと�名前で呼んだ。やっぱり一夏に対しての印象がプラスの方向に変わつたみたい。まあ、学校生活は楽しい方がいいから、仲良くなるのはいいことだね。

周りの女子は「セシリ亞わかつてるね~」とか「情報が売れる」つて情報は駄目でしょ。E-Sが使える男子が珍しくて抱きあげたい気持ちはわからない訳ではないけど。

そんな周りが浮かれている中、一夏は浮かない顔だった。

「セシリアが降りた理由はわかつたんですけど、英治が降りた理由がわかりません」

あらら、結局俺が降りた理由を聞いてくるんだ。

「それは、俺のエリはエリではない物も使うからエリで戦うクラス代表にはふさわしくないと思つて辞退したんだ。一応、このメダルがその力ね」

3枚のコアメダルを見せる。多くの人は頭に「?」を浮かべているけど、いいか。一夏もそれは何だよって顔してる。

「……俺はメダルのせいで代表になるのかよ」

クラスの皆は男子が代表をやれば良かつたみたいで、メダルにも大した興味を示さずに、一夏についての話に戻つた。本人はなんかブツブツ言つてるけど。

バシン!!

「今はHR中だ。ブツブツ言つてないで周りの話を聞け」

「痛!! 何すんだよ千冬コ」

バシン!!

再び叩かれる一夏。かわいそうに思えてきた。

「織斑先生だ。何度言つたらわかるのか

す、すみませんでした。織斑先生」

「そ、それでですね」

そわそわした様子のオルコットさん。何か大事な発表でもあるのかな。

「わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIRSの操縦を教えてあげますわ。そうすれば……」

「バン！ 机を叩いて立ち上がった篠ノ之さん。何か異様に殺氣だつているけど、どうかしたのかな？」

「あいにくだが、一夏の教官は足りてない。“私が”直接頼まれたからな」

「私が」をヤケに強調した篠ノ之さんはオルコットさんを睨んでいた。2人つて仲が悪かったみたいじゃなかつたし、どうしたんだろ。

「あら、貴方はランクCの篠ノ之さん。Aランクのわたくしに何か？」

2人の間に散る火花。よくわからないけど、この対立の中心にいるのは一夏みたいだから俺は大丈夫かな。

バシン！ バシン！

「座れ、馬鹿共」

オルコットさんと篠ノ瀬の頭を叩いた千冬さんは続けた。

「お前達のランクなどP!!だ。私からしたらどれもひよつこだ。その段階で優劣をつけよつとするな。それにだオルコット。完璧な人間などどこにもいない。簡単にパーフェクトなど使つな」

簡単にパーフェクトなど使つな、か。完璧な人間はどこにもないな。当たり前のことなのに織斑先生が言つたことは重かつたつていふか、心に残つた。まるで本人がそのことを身を持つて知つたかのよつこ。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言つただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しひ」

「バシン！」

不意に一夏が頭を叩かれた。特に何もやつてないはずだけど。

「今、失礼なことを考えただろう」

「そんなことは全くあつません」

「ほつ」

「バシンバシン！！」

「すみませんでした」

「わかれればいい」

ああ、姉弟って凄いんだな。心を読むなんて。でも、ちょっと横暴じやないかな。そんなことを考えたら絶対叩かれるだろ？から表情にださないよ？に気をつけないと。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

『はーい』

クラスの意思是再度1つとなつた。けど、やっぱり一夏には嬉しくない結果だろ？えーと、頑張つて。俺にはそれしか言えないんだ。

放課後、一夏が篠ノ之さんとオルコットさんに連れられてどつかに行つちやつたから暇になつた俺は部屋に戻つてきていた。

「あー、昼（？）寝でもしようかな

バタンツー！

ベットにダイブしたはずの俺はアスファルトにダイブしていた。

「イタタタ。一体今度は何？」

「タイミングが悪かつたようですね」

『気が付けば夜の公園みたいな場所にいて、紅さんがいた。

「えつと、今度はなんです？ ロアメダルを狙つやつが現れたんですか？」

「いえ、貴方に届ける物があつたので」

紅さんが出したのはミルク缶と細長い箱。缶には大量のセルメダル、箱にはメダジヤリバーが入つっていた。

「これはどうしたんですか？」

「貴方が戦うのに必要となるものなので渡します。あと、ライドベンダーもヒュ学園の中に勝手に置いておいていいのかな？」

ライドベンダーがあるのは便利だけど、ヒュ学園の中に勝手に置いておいていいのかな？

「えつと、ありがとうございます」

「いえ、僕達も色々とあってこれ以上の直接接觸は難しいようです。その内貴方の味方となる人物を送りますので世界をお願いしますね」

それを最後に俺は元の部屋に戻つてきた。オーズの力はすぐに必要になる。そんな気が俺にはしているんだ。

## 尋問とクラス代表とミルク缶（後書き）

次回、変身！！

ところでアンケートを取りたいのですがバースをどうしましょうか？

？英治がいた世界から来る。この場合、伊達さん的なキャラか後藤さん的な性格のどちらがいいかも

？バースのツールだけにしてISキャラが変身

？全く別のところからバースが来る。例、オーズ本編から伊達さんが来る、とか。

？バースは出なくていい。

## 訓練と敵襲と変身（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タ力

カマキリ

バッタ

チーター

トラ

ゴリラ

4月も下旬となつた今、俺達1年1組は織斑先生の指導のもと、ISの訓練をしていた。それにしてもいい天気だな。

現在は飛行訓練で、実践するのは俺、一夏、オルコットさん改めセシリ亞の専用機持ち組。クラス代表決定戦から俺のことも見直したみたいで名前で呼び合つ仲くらいには慣れた。誰とでも仲良くやれる方がいいしね。あ、でもオルコットさんは一夏が好きなのかな。素振りからはそんな気がするんだけど、恋愛は苦手だからよくわからないし。

「では、これよりISの基本的操縦をしてもらつ。織斑、火野、オルコット。試しに飛んでみせろ」

織斑先生に言われてISを展開する。特訓の成果だらうか、セシリ亞程とまではいかないけど、中々早く展開できるようになつた。隣を見ると、一夏もワンテンポ遅れて展開できていた。一夏の篠ノ之さんやセシリ亞との特訓の成果かな。

メダル無しのライドオーナー、ディアクティブモードを展開した俺はメダルもスキヤンするかどうか考えていた。ISだけの訓練なら必要ないのだが、こいつはメダルをスキヤンしてこそ完成するものだからなあ。

「よし、飛べ」

織斑先生の合図で飛び上がるセシリ亞。少し遅れて、遅いスピードで上昇する一夏。気になつたこともあるしタトバになるか。

『タ力！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

クラスの皆は「変な歌」とか聞こえてくるけど、もう慣れたし  
ね。さてと、PICOを使わずに跳んでみるか。

脚部に力を貯める。さすがに脚がバッタのようにはならないけど、  
力がみなぎるのはわかる。そして俺はそのまま大地を蹴った。

「「「え？」」」

みるみるうちに一夏、セシリ亞までも追い越し、IS学園も小さ  
く見える高さに。この高さなら人がゴミのよう見えるな……な  
んだろうな、この落ちていく感覚は……あ、ただジャンプしただけ  
だつたからか。

墜落する気は全くないので、PICOを起動させその場で静止。気  
付かなかつたら大変なことになつてたろうな。ISには絶対防御が  
あるけど、この高さから落下したら無事とは思えないし。

一夏とセシリ亞が話している所まで、下降する。2人ともライド  
オーズの跳躍力に驚いているけど、  
びっくりしたのは俺も同じだから。

「いつも思つんだけどさ、英治のISつて動きやそうだよな」

「確かにそうですわね。英治さんのISは大抵のISよりも体にフ  
ィットしている感じですし、非固定浮遊部位もないですし、おまけ  
に謎のメダルで形をえますし……本当に謎のISですわ」

「いやー、謎つて言われても俺もコイツにつけてはよくわからな  
いし」

本当はこれがなんなのかは分かつていてるけど不用意に人に教えるわけにはいかないからね。それにしてもさつきから嫌な予感がする。何だろう? そう思つけど集中してなければ織斑先生に叩かれるだらからあんまり気にしない方がいいかな。

「セツ、いや、英治。英治は飛ぶイメージはどうしてるんだ? セシリアとも話したんだけど、どうもイメージがつかめなくて」

「俺のイメージは、なんていうかなあ、うう、俺に翼ができたイメージかな」

「いや、よくわからないんだけど、それ」

「うーん、そうだよね。俺は別な方法で飛んだことがあるからイメージしやすいだけだからなあ。」

「でも一夏さんイメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を見つけた方がいいですわ」

「そう言つても空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよな。何で浮いているんだ、コレ?」

「気になるのは分かるけどあまり気にしない方がいいよ。正直俺も何となく理解していい感じだしね。理論が気になるんだつたらセシリアに聞いた方がいいよ」

「そうですね。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。それでよければ説明しますわ」

「わかった。説明はいい

うん、俺も聞きたいとは思わないから。聞いてもチングパンカンブンだらうから。

「ふふつ、残念ですか

本当にセシリ亞は変わったなあ。彼女の屈託のない笑みを見てやう思つた。先日までのこぞこぞが嘘だと思ひませび。

そついえばあの試合以降、俺と一夏、セシリ亞は篠ノ之さんと一緒にE.Sの練習をしている。大抵は一夏が教えてもらつていてる形だけね。

「一夏つ！ いつまでそんなことこつる！ 早く降りてこ！

いきなり通信回線から響く声。声の主を見ると、篠ノ之さんが山田先生からインカムを奪つていた。オタオタする山田先生。しつかりしてください。

俺が山田先生に同情している間、隣ではE.Sのハイパー・センサーについて話していた。視力とか聴力が優れるのは変身ではよくあることなのであんまり俺は驚くことはないけど。それにしてもセシリ亞の説明は役立つなあ。言つちや悪いんだらうけど、篠ノ之さんの指導は一夏曰く全くわからないものらしいし。確か擬音だらけなんだっけ。

「織斑、オルコット、火野。急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、英治さん、お先に

セシリ亞はすぐ行動を起こし難なくクリアしていた。次は、と。

「英治、どっちから行く？」

「一夏が先でいいよ」

一夏は軽く返事をし、地面に向かつて加速していった……え、加速？ 確かに急降下も課題だけどそれは加速しそぎじゃ。

ズドオオオーン！！

やつぱり。一夏は墜落し、クレーターを作っていた。俺の目に映るのは2つのクレーター。あれ、2つ？

「メダルウ———」

煙が晴れるとそこにいたのは前に戦つたことのあるクワガタのヤミーそつくりの怪人だつた。

それを見た俺はとにかくケワガタに向かって加速していた。  
I S  
あれと戦えるのかどうかしらぬけど、俺が戦わなければいけない相手だから。きっとコイツが嫌な予感の正体だろう。

「なんだよ、アレは」

一夏は突然現れた怪人を見て呟いた。彼が小さい頃にお世話になつた探偵が戦つたのとは違うのを直感的に感じていた。

「来い、白式」

悲鳴をあげ、パニックになるクラスメイトを見た彼が出した結論は力がある自分が皆を守ることだった。自身のISを纏い、剣を構える。今にも飛び出しそうな彼の耳には届く言葉があつた。

「馬鹿者。お前に何ができる。大人しく全員下がつていろ」

「じゃあ千冬姉はどうするんだよ。相手はドーパントとは違う気がするけど怪人なんだ……！」

「安心しろ、アレの相手をするのは私でも山田先生でもない」

瞬間、3色のISが怪人を蹴り飛ばしていた。

クワガタの怪人、ヤミーもどき? コアメダルを使つているからグリードもどきか。とりあえずIG (Imitation Grid) と呼ぶことにしよう。

それを蹴り飛ばして俺はISを解除した。

「英治…… 何やつてるんだよ…… お前も逃げろ……」

「やつですね。HSを解除するなんて無謀すぎますわ……」

一夏やセシリアの他にもクラスの皆から心配や説得の声が聞こえる。こう思つてもらえるほど、馴染めていたんだな。だからこそ皆は俺が守る。

「大丈夫だから。まあ、見ていてよ」

オーブドライバーを装着する。まずは赤いメダルと緑のを入れる。最後に黄色のいれ、右腰のオースキヤナーでスキヤンする。そしてスキヤンとともにあの言葉を叫ぶ。

「変身……」

『タ力！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

歌が流れている最中、俺の周りは色とりどりのメダルが回つていて、俺の前には赤、黄色、緑のメダルが浮かぶ。  
そして俺はもう一つの姿になる。欲望の王とも言われる存在、オーブに。

皆が息を呑むのが聞こえる。誰もこつなるとは思っていないはずだから当然かな。

「英治、お前、仮面ライダーだったのか」

「そうなるね。オーブ、仮面ライダー オーブだ」

「……オーブ（もしかして千冬姉は英治が仮面ライダーだつて知つていたのか）」

「さてと… 面は俺が守る…」

構えをとつた俺はクワガタEIGへと駆け出した。相手も俺に対して走つてくる。

突き出された拳をよけて、ボディーブロー。そのままトライクローカを展開し、2、3回切る。飛び散るメダル。

「こいつもセルメダルを落とすんだ。でもどうやって作るんだ？ グリードだつて復活したにはセルメダルは必要なのに……おつと」

考へているうちに敵は攻撃をしてきた。クワガタのアゴのような武器を振り回してくれる……つて、危ない危ない。バッタの跳躍力をいかし、後ろに跳ぶ。

「メダル、メダルヨコセー！」

セルがコアかわからぬけど俺のメダルを狙つてくる相手。どつちにしろ取り込んで強くなるつもりなんだろうな。させないけど。

「ハアアー！！」

今度は脚に力をこめ、跳び上がる。バタ足のよつと跳るたびにこぼれ落ちるセルメダル。ヤミーやグリードと比べると少ない量だけ。

「ガアアアアアアアアアー！」

怒りに身を任せるかのように敵の攻撃が激しくなる。腕を掴まれて、武器で切られる。結構痛い。

「 うめうめ 」

火花をあげながら後ろに転がる俺。リーチが問題ならこの前貰つたこれで。そう思つた俺はメダジヤリバーを構えた。周りから「どこから出したんだ、それ？」って聞こえたけど気にしないでおけ。

「ハアアアアア」

反撃の隙を与えないようにメダジャリバーを振るう。相手がダメージをくらっている証拠か、そのたびにセルメダルが落ちていく。

「もうやめ決めるよ」

敵がダウンしたのを確認し、セルメダルを3枚メダジヤリバーに入れる。

# 『トリプルスキヤニシングチャージ！』

「おいおい、何だよアレ？」

「なんですか。あの技は！？」

「信じられん、空間を切るとは……」

俺が剣を振った方に空間はズレていた。そして元に戻る。皆が驚くのもうなづけるものだしね。

「グアアアアアア」

空間が元に戻ると爆散するIG。セルメダル十数枚とクワガタのコアメダルが落ちていた。

これで縁のコンボができるのか……使う機会は無い方がいいけど。でも、予感はする。力を使わなきゃいけない日が来るような気が。

## 訓練と敵襲と変身（後書き）

実家に帰省したため、パソコンが使えないorz  
ストックが多少、携帯で作製もしますが、遅くなる可能性が…  
感想、意見、誤字脱字報告等、お待ちしております。

## 逃走と整備室とインタビュ－（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
トラ  
チータ  
ゴリラ

## 逃走と整備室とインタビュー

女子の情報網は恐ろしい。たつたの数時間たつただけで俺がオーブであることは学園中に広まっていた。繰り返される質問の応酬から逃げ出した俺は安心できる場所を探していた。どこに行つても女子がいるから、そのたびに逃げる。コンボを使ったときより疲れたよ。

「疲れた～。ホントにあの勢いだけはついていけないや……ツ！！

「ここちに火野君が行つたって情報があつたのに

「おかしいね。どこに行つたのかな？」

「じゃああつちに行こうよ。それにしても火野君、人間離れした逃げ足だよね」

女子の声、しかも明らかに俺を探しているのが聞こえてきたため、物陰に隠れる。先程の集団はいなくなつたようだけど、次の集団が近づいてくるのが聞こえた。見つかって質問攻めが嫌だつたから近くの部屋に逃げ込むことにした。人の気配はしないようだしね。

女子達が近づく前に俺はドアを開けてその部屋に飛び込んだ。こ

こが更衣室とかじやないことを願つて。

「ここは……整備室かな？」

田の前に広がる光景は、パソコン数台にエスのパーテツや武器だらうものがあった。いかにも整備室つて感じの場所だった。

「ふう。しづらひまへじて隠れていのかな」

「だ、誰かいの？」

声がした方を向くと水色の髪にメガネをかけた子がいた。

「「ゴメンー。追われているからここに匿つてくれないかな」

「え、……別にいいけど……」

「ありがとう~」

隠れる場所が見つかったといつ安堵から座り込む。はあ、疲れた。

「ね、ねえ……あなたが仮面ライダー……？」

「あ、うん。そうだけど」

俺がオーブスであることにこの子も興味があるようだけど、匿ってくれるお礼にと、周りの皆のよつなしつこさが無かつたから聞かれたことに答えることにした。

饒舌ではない彼女と話している途中、俺は大事なことに気がついた。

「せつにえばや、君、名前は何て書いつの？」

そう、文だと大した長さではないがつて何だこの電波？ まあ、とにかく名前を聞いていなかつたんだ。いつまでも「君」とか「あなた」じゃ失礼だしね。

「更識簪」

「更識さんね。今更だけど俺は火野英治。よろしくね」

「名字で、呼ばないで。その…好きじゃないから」

「え～と、簪でいいかな」

静かに首を縦に振る簪。どうやら本人の許可は得たようだ。

「簪はここで何してたの？」

「私のISH、完成してないから……」

「そりなんだ。って言つても俺はISHが作れるほどわかつていないけどね」

私のISHつてことは専用機持つてことだよね。そりいえば「更識」つてこの学園のどこかで聞いた気がするんだよな。

「まあ、何もできないかもしねないけど手伝えることがあつたら言つてよ」

「別に、いい」

「そんなことは言わないで、ね。何かあつたら手伝つかうぞ」

「どうしてやうこいつをする気になるの……？」

どうして、か。ううん。

「人は助け合いだからね。「人」って字はさ、支え合つて出来ているから。それに手が届くのに手を伸ばさなかったら、後悔する。それは嫌だし」

「そつ……なんだ……口……たい」

「何か言つた？ 最後の方、聞こえなかつたけど」

「べ、別に何でも、ない……」

「うか。本人が違うつて言つてるから俺は追求しないことにしよ。ふと外を見ると、日が沈み始めていた。そろそろ帰ることにしますか。」

「俺はそろそろ行くよ。匿つてくれてアリガトね。また来てもいいかな？」

「コク、と簪が頷いたのを見てからこの部屋を出た。この部屋は第二整備室か。」

英治が帰つたあと、整備室に残つていた簪は彼のことを考えていた。自分が憧れるヒーロー。元々、都市伝説である仮面ライダーで

あつたことから彼に多少は興味があつたのだが、実際に話してみると、彼女が好きなヒーローのようだつた。

英治には聞こえなかつた「そつ……なんだ……ロー……たい」。

これは「そつ……なんだ……ヒーローみたい」と言つていた。

（初対面なのに結構話した……）

ここでは語る理由ではないが、彼女の家系の問題で簪は心を開かしていつた。そんな中、自分に笑顔を向けながら手をさし伸ばしてくれた英治は彼女にとって新鮮な存在だつた。

（火野……英治……）

よくわからない気持ちだが、彼女は英治ともつと話してみたいと感じた。

「……いけない。早く完成させなきゃ」

気持ちを切り替えて彼女はディスプレイと向き合つた。

「ふうん。ここがそうなんだ……」

英治が簪と別れた頃、IS学園のゲートにはボストンバックを持った少女がいた。風になびく彼女のツインテール。

「総合事務受付ってどこにあるのよ」

案内が書いてある紙をくしゃくしゃにしてポケットに突っ込む。目的地がわからない彼女のイライラは少しずつたまつていった。ISで飛んで探すか、とも考えたが自分が属する国、中国の政府高官の情けない顔を思い出した。それと同時にその高官が言つていた問題を起こさないでくれつてことも。

（ふつふーん。あたしは重要人物だからねー。自重しないとねー）

そんな彼女はとある目的のためにこの学園に来た。元々、彼女はIS学園に興味は無かつた。だが、ある日見たニュースは彼女の興味をIS学園に向けた。

（やついえば、アイツ元気かな）

とある少年を思い浮かべる。彼こそが彼女をIS学園に入学させる原因であった。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

不意に聞こえた懐かしい声。その声の主、織斑一夏こそがその理由の張本人である。

少女はすぐに駆け寄る。だが、一夏の隣には見知らぬ女子がいた。しかも一夏と親しそうである。

（誰、あの女？）

冷たい感情を浮かべた彼女はそのままその場を去った。その後す

ぐに受付は見つかった。だが、彼女の気持ちは晴れることがなかつた。

「 説明は以上です。 I.S 学園によつこそ、 ファン・リン・イン 鳳鈴音さん

彼女は怒りの感情を持ちながら晴れて I.S 学園の生徒となつた。

「待つてなさいよ、一夏」

さりに場所を変えること、ここは例の夜の公園。マフラーを巻いた青年、紅渡の前にスーツを着た長身の男が現れた。

「渡、調べた結果だが、やはりあの世界は変化を始めている。新たにいくつかの仮面ライダーがあの世界に誕生する。それに門矢士とは違うディケイドもあの世界を訪れるだろう」

男、剣崎一真は自分が調べたことを伝える。

「そうですか。あの世界が消滅することは?」

「それはない。ディケイドはもつ破壊者としての役目を終えている。それは他のディケイドも同じだ。ただ、ライダーが新たに誕生した場合の混沌は確実だな」

「それは彼に任せましょ。といひで生まれるであらうライダーは？」

「それは……だ」

「それならオーブでも充分戦えますね」

「ああ。俺はまだやることがあるから行くぞ」

「ええ。お願ひします」

剣崎はオーロラをこえ、どこかに去つていった。それを見送る渡。

「事態は予想以上に厄介なことになつてゐるようですね。オーブへの助つ人は誰がいいのでしょうか」

「ふう。帰つてくるのは遅くなつたな」

簪と別れた後、女子に遭遇。獲物を見つけたような顔してたから逃げたのはいいんだけど、寮とは逆の方向へ。

その後はどこかの蛇のようにダンボールに隠れたりしながら寮に向かつた。夕方に出たはずなのに寮に着いたころには既に夜であつた。もう、ヤダ。

さすがにこの時間にはもう俺を狙つてくる人はいなじようで、さ

つさと部屋に戻ることにした。トボトボと血室に戻る途中、食堂の近くを通り、

「あーーー！ 火野君発見ーーー！」

クラスメイトに見つかった。とゆうかクラスメイトがほとんどいて、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」なるものをやっていた。パーティーが嫌いな訳じゃないけど、俺のライフはボドボドだから参加はやめておくよ。しかし、世の中は無情である。すぐさま捕獲されて会場に拉致された俺は乾いた笑みさえも浮かべる気力はないんだ。

「英治、今までどーにいたんだよ…… つて大丈夫か、おい、しつかりしる」

「一夏、何を大げさなことを言つてるのだ…… 火野、大丈夫か？」

「あら、英治さんがどうかしたのですか…… つて大丈夫ですか？」

3人とも大丈夫じゃないから。この疲労感に比べたら、一度に全コンボやれつて方が楽な気がする…… よ

「はいはーい、新聞部でーす。もう一つの話題である仮面ライダーこと火野英治君にもインタビューを…… つてこれじゃ無理そうね。仕方ない捏造するからやめとくか」

捏造はしないでください。ああ、声を出す気力すらない。

「だから俺の分も含めて捏造しないでくださいーーー！」

「じゃあ織斑君。なにか皆に受けたメントを

そんな会話をよそに俺は眠りにおちた。ああ、明日辺りに織斑先生に助けを求める。先生の力ならこの鬼ごっこもなくなるはずだから……」

## 逃走と整備室とインタビュ－（後書き）

早くも簪登場。原作でヒーローとか言つてた彼女なら絡ませやすいかなと思って。でも彼女の工事は早く完成させるかどうかは考え中。

前回のベースのアンケートが全くないにも関わらず、次のアンケート（笑）。

クウガ～ディケイドで出演してほしいライダーを募集します。サブでも悪役でもOK。できれば変身者の立ち位置も。

それでは感想、意見等お待ちしております。

## 宣戦布告とラーメンとライオン（前書き）

Count the medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
トラ  
チーター  
ゴロラ

## 宣戦布告とラーメンとライオン

「火野君、おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた?」

早めに教室に着いた俺は女子から話しかけられた。転校生? どんな人が来るのかな。

「それってうちのクラスに来るの?」

「なんだか2組に来るんだって。で、その人は中国の代表候補生らしいの」

「へえ。そつなんだ。教えてくれてありがとね」

中国の代表候補生か。どんな人なのかな。

「あ、織斑君だ。織斑君にも教えてあげよーっと」

そう言つてクラスメイトは一夏の方へ言つた。

一夏達が話しているけど、俺は眠いから先生が来るまで寝てよう。それじゃ、おや? 「その情報、古いよ」……ん、誰だ? 声がした方にはツインテールの女の子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……? お前、鈴か?」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわ

け

えーと、一夏の知り合いかな。仲良さそうだし。あ、篠ノ之さんとセシリアが機嫌悪そうになつた。うん、確實にあの2人は一夏が好きなんだ。恋愛が苦手な俺でもわかるんだから一夏も気づいているはず。

そう思つていたが、一夏がかなりの鈍感で、全く誰かからの好意に気づかないと知るのは後のことだつた。

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

鈴と呼ばれた女の子は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていった。確かに彼女の雰囲気からだと似合わない気がしないでもないなあ。

「なー？ なんてこと言つのよ、アンタはー！」

やつぱり今の喋り方が素みたいだ。こいつの性格の人には確かにさつきのポーズは似合わないと気が……。

「おい」

「なによー？」

後ろから声がしたので強気な態度で振り向く、えーと、鳳さん。  
……つてその人にその反応は……。

バシンッー！

聞きた音が響く、愛刀（？）『狩吊世鬼墓』を振り下ろした

我らが担任、織斑先生がいた。

「火野、今、変なことを考えただろ」

「……違います」

「2度目はないぞ」

「わかりました」

織斑先生は読心術を使えるから心を無に。

ドクン

今、何か違和感が……。ま、いいか。

この違和感がアレを引き起こすことになるとは誰も思わなかつた。つてモノローグを入れるどうなるんだるう。

「よし、SHRを始める」

気が付けば鳳さんは自分の教室に戻つたみたいで、織斑先生が教卓に立つていた。

パシーン！！

本日何度も音だらうが。叩けているのは俺でも一夏でもない

篠ノ之さんとセシリ亞である。篠ノ之さんは授業を聞いていなくて叩かれ、セシリ亞は独り言をブツブツ言つて叩かれる。

織斑先生の授業でそんなことをしてゐなんて自殺行為みたいなものだけじ、どうしたんだろ？ 昨日は何も変わりがなかつたから、原因は今日のはず。

となると鳳さんが原因かな？ 嫉妬？ 何か違うな？ このことも後で考えよ。

「「あなた（お前）のせいですわ（だ）！..」」

午前の授業が終わり、いきなり2人は一夏に告げた。それは理不尽だと思つただけど。

それは自分の好きな男が取られるつて思つたんですよ。嫉妬みたいなものですね」

へえ、そなんだ。嫉妬ねえ。女心がわからないからとかどうか以前に、一夏のせいにするのは理不尽だと思つけど。

「英治、飯食いに行け」

「ああ、わかった」

一夏に誘われて食堂へ。今日は何食べようかな。

「待つてたわよ、一夏！」

食堂に着くなり鳳さんが現れて、そう言つた。鳳さん、そこにはると口の邪魔になるよ。

「鈴、通行の邪魔になつてゐるぞ」

「な、いきなり何言つのよ…… それにアンタを待つてたのよ」

「夏も同じ」と思つてたよつで、指摘されると怒る鳳さん。ラーメンを持ちながら。

「それ」「ラーメン伸びるわ」

「ぐつ……」

なんだか一触即発の雰囲気。俺が止めないといけないみたい……

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

「アンタは黙つてなさい…… つてアンタが噂の火野英治?」

「一応聞くけど、噂つて?」

「それはアンタつが仮面ライダーだつていつ」

「まあ、やうだけど……」

隠す理由も必要もなくなつので素直に頷く。ああ、早く飯にしたい。

「ふーん、そうなんだ」

そのまま雑談を交わしてゐる訳にもいかないので、注文をとり、席に着く。

「一夏、あなたがどういった関係なのか説明して欲しいのだが

「もうですわ！一夏さん、まさか」の方と付き合つていたしゃるのー？」

一夏と鳳さんが話してゐる途中に、2人は無理矢理割つて入つた。俺も気になつてたんだよね。

周りの皆も気になつていていたのか頷いて、こちらに視線を向けてくる。正直に言つと居心地がよくない。

「べ、べべ、別にあたしは付き合つてゐわけじや……」

「もうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ

あ、鳳さんが一夏を睨んでいる。といふか、鳳さんとも幼馴染つて言つてるけど、篠ノ之さんとは面識がないみたいだけど？

「幼馴染……？」

怪訝そうな声で答える篠ノ之さん。まるで幼馴染は自分だらつて顔で。

一夏いわく、篠ノ之さんは小4までのファースト幼馴染で、鳳さんは小5から中2までのセカンド幼馴染。幼馴染つてファーストとかセカンドつてつけるものだけ？

「初めてまして。これからよろしくね」

「ああ。」

文だけ見ると友好的に見えるが、実際は声は相手を威圧するものだし、2人の間には火花が散っている。どう考へても初対面の人にする対応じゃないよね。

「ンンンッ！ わたくしを忘れてもらつては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

そつか、代表候補生同士なら知り合つてゐる可能性も……。

「……誰？」

あれ？

「わ、わたくしを存知ない。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

絶句して固まるセシリア。あ、顔が赤くなつてきた。

話が進み、現在は誰が一夏にIRSの操縦を教えるかになつていた。「幼馴染」だの「同じクラス」だの言つてゐるけど、一夏の意思を完璧に無視してゐる。なんか険悪な雰囲気になつてきたから止めた方がいいよね。

「そ、3人もいぐら一夏がすく…ムグッ」

結果、口を抑えられました。呼吸が段々苦しくなつてきた。あ、死んだじいちゃんが見える。

パシーン！

誰かが叩かれた音で目を覚ました。場所は食堂、時間はさつきからあまりたつてないみたいだ。目の前には正座の3人、篠ノ之さん、セシリ亞、鳳さん。そしてそれを叱る織斑先生。

そういえば、俺、あの3人に口をふさがれたせいで呼吸が苦しくなつて倒れたんだっけ。

「死ぬかと思った」

「もうすぐ授業だ。遅れるなよ。ああ、火野は気分がすぐれなかつたら保健室で休んでいていいぞ。どこぞの馬鹿共のせいだからな」

「…………」

まあ、俺は大丈夫だけど

「大丈夫か、英治？ 全く篠達もやめろよな。息を止められてポツクリいきましたなんて笑えないからな」

一夏の説得には素直に応じる3人娘。一夏に言われなくてもやめよ。

「さてと、教室に戻るうか」

そろそろ昼休みが終わる時間だ。織斑先生に叩かれたくないから早めに戻らないと。3人娘も立ち上がるうとしたが、ふらつくセシリア。日本に住んでた2人とは違つて正座に慣れていないからかな。

結局、セシリアは一夏に支えられて教室に戻ることができた。篠ノ之さんと鳳さんがずっと羨ましそうな顔だったけど

あ、あと、鳳さんを鈴と呼ぶようになりました。

放課後、一夏達はアリーナに特訓に、翼は山田先生に呼ばれて職員室へ。結果、暇となつた俺はさつさと寮に戻ることにした。いつまでも教室にいるとこの前みたいに質問攻めにあうからね。ん、グランドの方から何か違和感がするな……言つてみるかな。

prrrrr

「はい、火野です」

『火野か。今、グランドの方で怪人が出てきた。行つてくれるか』

「わかりました」

電話を切る。偶然にもそこにいた生徒はいなくて、被害者はひらし。暴れだす前に倒さなくちゃ。 とりあえずIGの足止めとしてタカカンを3つ開ける。

「俺が着くまでよろしくね」

タカカン達は頷いて(?) 飛んでいった。さて、俺も急ぎますか。

現場に着くと、ライオンみたいなやつがタカカン達に翻弄されていた。じゃあ、俺も戦いますか。

オーズドライバーにいつものメダルを入れて、スキャン。

「変身!..!」

『タカ! トラ! バッタ! タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ!』

走りながら変身した俺はそのままライオンIGに飛びかかる。パンチがあたり、転がるIG、もちろんセルメダルを落としながら。

「オーズウ」

恨みがましく立ち上がったIGはクロ一を開いて、切りかかつてくる。

「うわあ!」

予想外の攻撃に対応が遅れ、回避できずに転がる。イタタタ。だ

つたら」ひもワーチを、と。

『タカ！ カマキリ！ バッタ！』

ガキン！！

相手のクローや両腕のカマキリソードで抑え、相手の腹に思いつ  
きり蹴り込む。相手がよろめいてるうちに右、左と、カマキリソー  
ドを振るひ。

「ガアアアアア」

ビカツ！！

「くつ、田が……つわあああああ

相手がライオンのマアの力を持つていてことを忘れていたため、  
ライオティアスのような光に田をやられる。そして、相手はお返し  
とばかりにクローやで攻撃してくる。目がぢやんと見えない俺はかわ  
すこともできずにマトモに直撃してしまひ。

「くつ……がつ……くつ……」

転がつてゐ俺に容赦なく蹴りこんでくるIG。そのまま、容赦な  
く俺を踏みってきた。かなり痛い。

目が少しづつ慣れてきたから、目を開けると、IGは俺の首めが  
けてクローやを振り下ろすをつとしていた。やられてたまるかー！

「ひおおおおおお」

脚に力をこめて、敵を蹴り飛ばす。バツタレッグは脚の中で一番のキック力を誇るため、直撃したIGはかなり吹っ飛んでいった。

「ふう、危なかつた。じゃあ反撃させてもらひやん」

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

頭部をこの前手に入れたクワガタに替え、亞種コンボ、ガタキリーダーとなる。クワガタヘッドはとあるリスクと引き換えに電撃を放つことができる。ホントはあんまり使いたくないけど、ああだこうだ言つてる場合じゃないからね。

駆け出していくHUGに電撃を浴びせ、怯んだといひをチーターの

火花をあげ、よろめくEG。今がチャンスだ。

「これで決める」

# 『スキンシヤージー』

クワガタの電撃を放ちながら、チーターで加速、そしてカマキリの一閃。

断末魔をあげ、爆散するIG。ライオンの「コアメダルを回収した俺は変身を解いて一息つく。IGは何が目的なんだ？ 俺が持つてるコアメダル？」

考へても答えは出やつこないな。でも、とにかく誰かが傷つく前に  
こは回収しなきや。



アンケートや感想等お待ちしています。

次回は英治V.S一夏の予定です。

ああ、簪を早く出してもエラのストーリーに絡めるいい方法が思いつかない。orz

## 奪い合こと禁句と特訓（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## 奪い合こと禁句と特訓

5月。特に変わったこともなく、毎日を過ごしていた。授業を受けて、放課後にEISの訓練をすることがあったたり、と。ああ、そういえば、鈴と一夏の仲がよくなかったなあ。何があったんだろ？で、来週クラス対抗戦を控えた今日から俺と翼も一夏の特訓につきあうことになった。というか1ヶ月あったのに一夏と訓練するのは初めてな気が……べ、別に篠ノ之さんとかセシリアが怖かつたらじやないか。

そんなことはさてよつ、わっせとアリーナに行こうと、と俺は思つていい。なぜかつて？

「中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。一夏のEISには射撃武器がないからな」

「それをいつなら篠ノ之さんの剣術訓練も同じでしょ。EISを unusedしない訓練なんて時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！ 剣の道はすなわち見とつ葉を知らぬのか。見とすなわち」

「一夏さん、今日は無反動旋回のおそれから始めましょう

「ええい、このつー聞け、一夏！」

「俺は聞いてるつー！」

「これって訓練になるのかな？ 教官がまず仲悪いし、言つてゐるともバラバラだし。一夏が強くなつてゐるのか不思議だなあ。

「待つてたわよ、一夏！」

かなりの時間がかかり、アリーナにたどり着くと、鈴がいた。

「貴様、どうやつてここに」

いや、普通に入口からだと思いますよ、篠ノ瀬さん。

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわ」

セシリア、そんなことは決まってないから。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね

鈴、その理屈はなんかおかしい気が……。

あ、一夏の反応に食つてかかる篠ノ瀬さんとセシリア。一夏が軽く怯えているのは気のせいじゃないはず。

いつになつたら一夏の訓練が始まるんだろ。

ドガアーンシ

「言つたわね……。言つてはならないことを、言つたわね！」

一夏が何を言つたのか知らないけど、ISを展開させて怒りに震える鈴。

危険に巻き込まれたくなかったから、俺はあのグループから距離を取る。だが、予想外にも鈴はすぐに帰つていった。なんかもう呆れに呆れてどうでもよくなつてきたよ。

「ンンン… 気を取り直して、訓練を始めるが、一夏」

「やうですね。わたし達の貴重な時間を使用してるんですけども。しっかりとやってもらいますわ」

「「セシリア（篠ノ之さん）は引っ込んでいろ（いくぐださこ）」「

ホントにいつになつたらほじまるのかな。あはあ、仕方ないけど俺がどうにかしなくてや。やけ

「ねえ、篠とセシリアは何がしたいの？ 一夏の特訓？ それとも一夏の独占？」

「な、何を言つていい。私はただ同門が弱いのが我慢ならないだけだ」

「わ、わたくしはクラス代表にはしっかりとしてもらわくてはいけないと思いまして」

「つまり、一夏が強くなればいいんだよね？」

「「勿論だ／そつですわ」「

「だつたら俺みたいに近接戦ができるエスJを使う人が特訓した方がいいんじや」

「俺がそう言つと、一夏は期待をこめた視線を俺に送つてきた。まあ、これもデザート……一夏のためだからね。」

「い、いや、私は一夏がどうしても、と言つから相手をしてくるの

だ

「ちうですね。本人の意思を無視するのは良くなくて」

「いや、俺は訓練してくれるのはあつがたいけど、ビリヒーメつて言つてないぞ」

「何この意見の食い違い？ そして固まる2人。まあ、2人は大丈夫だろ？ 始めるかな。」

「じゃあ一夏、始めるよ」

「おつ」

せひとと、まづまづれかな。

『タカ！ トラー！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！』

「うちからいくよ」

オーズカリバーを構え、一夏に向かつて加速する。すかさず一夏も雪片で対抗してきて鎧ぜり合いになる。

「くつ……」

「一夏、まだまだだよ。」

一夏を押し、よろめいたところで距離をとる。一夏は接近戦用のブレードしかないなら、これを使ってみるかな。

『タカ！ ホリラ！ バッタ！』

トヲを「ホリラ」に変える。スピードは遅くなるが、パワーは上がる。一夏は突っ込みきや攻撃はできない。だったらカウンター狙いでやってみるかな。

「腕を変えた……見るからにパワーがありそうだな。でも鈴もパワーイフらしいんだ。いい練習になるな」

そう言って一夏は加速してくる。雪片の一激を肩で耐え、右腕を振るう。

「うわああああああ

ドガーンッ！

「リラームの一撃を食らった一夏は地面に叩きつけられ、土煙があがる。でも、一夏のシールドエネルギーがなくなつたつて情報が流れないため、油断はできないな。そう思つてタカの能力である視力の強化をする。…一夏はあそこだな。

だったら煙が晴れたら勝負だね。じゃあメダルはこれに。

『ライオン！ カマキリ！ チーター！』

ラキリーターとなり、土煙が晴れるのを待つ。一夏は突っ込んでくると思うから視力を潰す。そこから攻める、それが今回の作戦だ。

土煙が晴れる。俺の予想とは別に一夏は俺と距離をとつた。それもジグザグの軌道で。多分、オーズカリバーを警戒したんだ。予想外の冷静な対応に篠ノ之さんとセシリ亞との特訓は無駄じやなかつ

たんだと思い、ちょっと安心した。

だつたらこつちから攻めるかな。チーターの加速からカマキリソードを振るう。だが、一夏は避けずに、上手い体勢でこいつらの攻撃を最低限のダメージに押さえた。

「え、これを止めるのはちょっと予想外」

「英治、さつきのお返しだぜ」

一夏の攻撃が直撃し、シールドエネルギーが減る。ほぼ不意打ちであるため、かなりのシールドエネルギーを持つてかれた。今度はこいつらが地面に落ちた。

「ふん、特訓の成果がでているようだな」

「さうですね。何もできずにやられていたら困りますわね」

え、いつの間に復活したの2人とも、さつきまで固まつてたよね？

ドガアアン

すぐに気を取り直して一夏の追撃をかわす。  
こつなつたら切り札を使うか。

《ライオディアス発動》

俺に黒いバイザ―が装着され、その後に輝く。

「くそつ、田が……」

「今だ！」

『スキヤーングチャージ！』

一夏が止まってる隙に加速。そのままカマリソードでX字に斬る。

そして一夏は落下。シールドエネルギーはゼロだ。

下を見ると、白旗が解除された一夏が大の字になっていた。

「思ったより強いよ。鈴の実力がわからないけど、まあまあ戦えるんじゃない。まあ俺もI-Sはそんなに強いわけじゃないけどね」

「そ、そつか？」

一夏が確認をしてる途中、篠ノ之さんとセシリ亞は物凄い形相で俺を睨んでいた。はあ、俺が悪いの。

「サンキューな英治。やっぱり接近戦型の相手の方が練習した気になるぜ。次も頼む」

「ははは、まあ、いいけど」

自分達が呼ばれないことに不満を感じてる2人から視線が刺さる中、俺は一夏に答えた。

表鳳鈴音

この戦いがああなるとは今の俺は思いもしなかつた。

## 奪い合ひこと禁呪と特訓（後書き）

突然ですが、アンケートの締め切りを原作1巻終了予定の8月30日までとします。そうしないとキャラを出すタイミングがなくなるので……

ちなみにバースは伊達さん、参戦ライダーは龍騎が1位となっています。投票して下さった方に感謝です。

## クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（前書き）

Count the medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速

クラス対抗戦当日。対戦カードは一夏と鈴。そういえば、一夏は織斑先生から何か教わったみたいだつたけど、なんだろ？

一夏と親しいから俺、篠ノ之さん、セシリ亞は織斑先生、山田先生とピットから見ていた。期待の新入生同士の戦いだからか、アリーナは全席満席で、あちらこちらでモニターで見る人がでるほど、注目の的となつてゐる。

「そろそろ、はじまるのかな」

フィールドでは、一夏と鈴が睨みあつよつて立つてゐる。鈴のI-Sは『甲龍』と書いて、ションロンと呼ぶ。特に目を引くのは、非固定浮遊部位と、2本の青龍刀 双天牙月。何とも攻撃的なデザインなことで。

『それでは両者、指定の位置まで移動してください』

アナウンスに促された2人は指定の位置へ。2人の距離、5メートルが少ないとと思うのは俺だけだろうか？

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルをさげてあげるわよ

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い

バトル開始前から舌戦ですかい。まあ、俺が口を出すべき問題ではないから、本人達の気が済むようにやればいいと思う。

「一応言つておくけど、HSの絶対防御も完璧じゃないのよ。シリードエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体に貫通させられる」

あの言い方、鈴にはそれができる武装があるってことか。そして、戦い開始のブザーが鳴る。さて、どちらが勝つのかな。

ガギィンッ！！

一夏は展開した雪片で、見えない何かをはじくが、体制を崩す。それなりの威力はあるようだ。まあ、一夏はすぐに、セシリ亞から教わった機動、えーと、名前は忘れた、で鈴の正面に行く。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

そう言つと鈴は双天牙用をバトンのようくぐるぐる回しながら、一夏に切りかかる。様々な角度からの斬撃をいなすだけで、一夏は精一杯のようだった。あの鮮やかな動きを刀一本でいなせるだけ、俺は凄いと思うんだけどな。

(まずい。)のままじや消耗戦になるだけだ。一度距離をとつて

「甘いっ……」

「ツ……」

鈴が叫ぶと同時に、一夏は吹き飛んだ。肩から、何かを撃つたようだけど……。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべた鈴は、体制を立て直している一夏にもう一

度何かを撃ち込んだ。一夏は痛そうな悲鳴をあげている。きっとこれが、最初に言つてた武器なのだろう、あの見えない砲撃が。

「なんだあれは……？」

篠ノ之さんが呟く。俺も仕組みがわからないから、何だ、って思つていい。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余乗で生じる衝撃を打ち出す。ブルー・ティアーズと同じだい3世代ですわ」

解説ありがとう、セシリ亞。要するに、威力が桁違いに高いダンボール砲つて感じかな。篠ノ之さんは今の説明を聞いていなかつたみたいだけど。大切な人が辛そうな表情でいるのだから。

(……一夏)

篠ノ之さんはこの激しい戦闘を目の当たりにして、ただただ、一夏の無事を願つていた。

「心配なのはわかるけどさ、一夏の勝利を願つてあげるべきだと思うよ。信じる方が大事だからね」

「……ああ、そうだな」

頑張れよ、一夏。こんな美人が心配してくれているんだから。

「よくかわすじやない。衝撃砲 龍砲 は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

見えない鈴の攻撃に防戦一方になる一夏。弾が飛んできてからよけるのは多分無理。だつたら、銃口を見て、あらかじめ射線から逃げるのが有効だけど、銃口すら見えないからな。

でも、一夏の IIS なら相手の攻撃をよけつづけるより、一瞬の隙をついた奇襲の一撃必殺がむいているはずだ。あいつの雪片なら、それが可能だ。

一夏は織斑先生から何かを教えて貰った後、近接戦闘と急加速急停止に力を注いでいた。それが勝利の鍵だろうな。

(練習なら、できることをやつたけど、IISの経験はどう考えても鈴の方が上なんだ。だから、俺ができるのは、気持ちで負けないってくらいだな)

一夏はそう考へて、鈴を見つめた。

「鈴」

「なによ?」

「本氣で行くからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。と、とにかく、格の違ひってのを見せてあげるわよー」

鈴は再度、双天牙月をバトンのよひに回し構え直す。対する一夏は衝撃砲を警戒し、その前にどうにかしようと加速体制に入つた。  
『瞬時加速』。この1週間で一夏が身に付けた技術、そして切り札。この奇襲は一度限りだらう。これが、この勝負の鍵である。

「うおおおおおつー」

そして、一夏は飛ぶ。刃が鈴に届きそうになつたとき、それは起つた。

ズドオオオオオンッ！！

大きな衝撃がアリーナを襲い、遮断シールドに穴が空く。穴はすぐ修復されるが、煙ははれない。

「な、なんだ？ 何が起つて……」

迷う一夏に鈴からプライベート・チャンネルが繋がる。

『一夏、試合は中止よー。すぐにピットに戻つてー』

何を言つ出すのか？、と考える一夏を現実の戻したのはHSの緊急通告だった。

ステージ中央に熱源。所属不明のHSと断定。ロックされています

「なつー！」

アリーナの遮断シールドはHSと同じもので作られている。つま

り、それを貫通するほどの攻撃力を持つた機体が現れた、ということだ。おまけに一夏も鈴もエネルギーを消耗している。よつするに、ピンチということだ。

『一夏、早くー。』

「お前はどうするんだよー?』

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよー。』

自分が囮になるから、その隙に逃げるよつに言つ鈴と、そんなことはできない一夏。平行線である2人の意見の対立に終止符を打つたのは敵の攻撃だった。

「あ、ぶねえーー!』

間一髪、鈴を抱えて、敵の攻撃、ビーム砲をよける一夏。その威力は彼の友人、セシリ亞のそれを上回つていていたのだった。

そのまま、敵は2・3発と一夏達を狙う。それをかわすと、煙がようやく晴れ、敵の姿がわかつた。

「なんなんだ、こいつ……』

そこにいたのは異形だった。ISには珍しい『全身装甲』。バランスの悪い団体。そして並みのISより、巨大である。

『織斑君! 凤さん! 今すぐアリーナから脱出してください! すぐに先生達がISで制圧に行きます!』

山田先生は2人に逃げるよつに言つ。だが、一夏達は戻らないよ

うだ。きっと彼にもわかつたんだね。誰かが相手をしないと、観客席にいる人達が危ないということを。

結局、山田先生の説得むなしく、2人は謎の敵に立ち向かつていった。武器の都合上、一夏が前衛、鈴が後衛という形で。

「もしもしー？ 織斑君聞いてます！？ 凰さんもー 聞いてますーーー？」

山田先生がいくら呼んでも返事は来ない。戦いに夢中なのか、それとも、通信不可能だからか。

「本人達がやると言つているんだ。やらせてみてもいいだろ？」

「お、お、お、織斑先生！ 何を呑氣な」とを言つているんですかーーー？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライラするんだ」

さすが織斑先生。落ち着いていらっしゃる。でも、コーヒーって糖分だっけ？

「……あの、織斑先生。それ塩ですけど……」

「…………」

前言撤回。やはり、織斑先生も人の子。弟のピンチには動搖してこないつだ。

「あつー。やつぱり弟さんのことか心配なんですねー? だからそんナースを……」

「…………」

気まずい沈黙。山田先生、地雷踏んだな。

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「へ? それって、塩が入ってるやつじや? ……」

「どうぞ」

有無を言わぬ口調。たよなら、山田先生。あなたのことは忘れません。

「い、いただきます」

「熱いので一気にいくとこー」

ああ、山田先生が何とも言えない微妙な表情を。とりあえず、織斑先生を弟のことでいじってはいけない。例え、ブラコンであることが事実だとしても。

「まひ、火野。お前もコーヒーを飲みたいのか

「いえ、いいです。それよりも……」

「先生！ 私にE.Sの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「ありがとうございます。君のおかげで命びろいできたよ。

「そうしたいところだが、……これを見ろ」

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉がすべてロックされて……あのE.Sの仕業ですの！？」

「つまり、避難も救援もできないってことか」

「強いシールドに囲まれている。突破には高い火力が必要なのか……だったら。

「そのようだ。今、3年の精銳がシステムクラックを続行中だ。それが完了次第。すぐに、部隊を……どうした、火野？」

「先生、ちょっとといいですか？」

「何だ？」

「遮断シールドをどうにかできればいいんですね」

「？」

「肯定する織斑先生に話が読めていないセシリ亞と山田先生。あれ、篠ノ之さんはどこ？」

「やつだがどうする気だ？」

「まあ、任せてください。とにかくの方法があるので」

「本来なら生徒にこんなことはさせたくないのだがな、事が事だ。出撃を許可する。だが、戻つたら色々と方法とか聞かせてもらひ」

「織斑先生、でしたらわたくしも行きませわ」

「仕方ないな。本来お前のヒュは多対1に向いてはいいのだが、勝手な行動をされる方が困るな。出撃を許可する」

「ありがとうございます」

ピットを飛び出してきたのは遮断シールドの田の前。  
わひと、じゅあンボ、いってみよつか。

## クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（後書き）

次回はあのロンボが登場。ロンボは2つ使えるけど、どちらかは感のいい人ならお分かりでしょう。

感想等お待ちしております。それでは次回。

Got to keep it real (前書き)

Count the medals  
オーブが使えるメダルは…

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

「くつ……！」

一夏が放つ斬撃はいとも簡単に襲撃者にかわされてしまう。これで4回目のチャンスを逃している。敵はありえないほどの回避能力を持っていた。死角をつこうが、どんなに速い攻撃をしても、だ。おまけに、鈴も一夏も連戦とあって、シールドエネルギーが残り少なかつた。

（参ったな……。）れども、バリアー無効化攻撃はあと1発だせるかどうか……）

「一夏つ、離脱！」

鈴の警告が一夏の思考を現実に戻す。さつきまで、一夏がいた場所をビームが通り過ぎる。白式のエネルギー残量から考えると、1撃くらえれば、御陀仏だろつ。

「ああもひつ、めんぢくさいわねコイツ！」

鈴も衝撃砲を撃つが、敵の長い腕にはじかれる。残りエネルギーを考えると、速攻で決着をつけたがったがそうはいかなかつた。なら、できるだけ早く勝負を、と考えてもそうはいかない相手だつた。

「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的にひと桁台つてところじゃない」

ドンッ！ 2人の頭上からは何かがぶつかる音がする。

「ゼロじゃないだけましだけど、確かに厳しいな……」

ドン、ドンッ！

音は強くなるばかり。

対策を考えているうちに意識を敵からそらしたのがいけなかつた。敵は腕を向け、ビームのチャージを始める。一夏が気づいたときはもう遅く、回避はできない状況だつた。

「一夏……」

鈴が叫ぶが、彼はどうあがいてもよけられない体制であつた。誰もがもう駄目だと思ったとき、その音が聞こえてきた。

ガシャアアーンッ！

遮断シールドを突き破り現れた十機近くの縁のIISは襲撃者を蹴り飛ばし、着地する。

「ふう、危ないとこりだつたね」

「2人とも大丈夫でして？」

「英治にセシリ亞。助けに来てくれたのか

「つで、アンタ達どうやって入ってきたのよー 遮断シールドは解除されたないのよ」

「まあ、切り札があつたからね」

いつもの3色のタトバではなく、縁一色の装甲を纏つていた英治が答える。

「それに、なんなのよ、この大量のアンタそつくりのISはー?」

「まあちゅうとね……」

ISで時間を戻して、突入する前の英治達にスポットを当てよう。

「さてと、じゃあ、今は」

取り出すのは3枚の緑のコアメダル。

「同じ色のメダル3枚で、何か起ころんですの?」

「まあね。ISだとどんな力かはわからないけれど……」

『クワガタ! カマキリ! バッタ! ガタガタガタガタキリッバ  
ガタキリバ!』

ライドオーブの姿はとてもない力を發揮する姿、ガタキリバコンボとなる。

「つまむむむむむむむむ」

雄叫びとともに展開される十機位のガタキリバに似たI.S。

「なー? なんですかそれは!」

「うーん、セシリアのビットの入型バージョンかな」

セシリアの顔は驚愕の色に染まる。彼女は4機の誘導兵器の制御に苦労するのに英治が展開するのは10機。それも入型である。彼女が、いや、I.Sを知る者なら誰もが驚くであろう光景だった。

「さてと、一点突破でいきますか

『スキャニングチャージ!』

飛び上がるガタキリバ達は空中で1回転し、足を突き出す。

「つまむむむむむむむむ、セイヤ——!」

「説明は後で。だから今は田の前だけに集中して」

「ISからの警告で人型ビットの展開はシールドエネルギーを大量に消費すると言われ、展開を解除する。敵の目的がわからない以上、持久戦はできるようにしないと。」

「一夏！」

「お、おつー」

鈴の警告に応え、一夏はその場から離れる。数テンポ遅れてその場をビームが通り過ぎる。一夏が回避したのを確認した後、すぐに敵に切りかかる。だが、敵はビームを撃つた後の体制にも関わらず、簡単にカマキリソードの一撃をかわしてみせた。とてもじやないけど、人間がこんな動きはできないと思うんだけど。

「英治さん、援護しますわ」

セシリアの援護射撃も簡単にかわし、俺に殴りかかってくる敵。それを後ろに跳んでかわし、一夏達と合流する。

「なあ、アイツの動き、機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

「そう言つことじやなくて……俺が言いたいのは、あれって本当に人が乗つているのか？」

「人が乗つてないISなんて聞いたことがありませんわ。確かに動きは不自然ですが……」

俺は、あれは無人、もしくは人あらざるものが乗つていると考え

るのが妥当な気がする。でも、あれは怪人が使っているわけではない。何だかそんな気がする。

「2人とも何言つてんのよ。でも、確かに不自然なことは多いわね。でも、無人機だったら何?」

「そりや、遠慮なしに攻撃しても大丈夫だろ」

確かに搭乗者のことを考えなずにボコボコにしても無人機なら問題はないはずだ。

「一夏、どうしたらしい? 何でも手伝つわよ」

「頼む。英治とセシリアはアイツの隙を作ってくれ

「了解」

「わかりましたわ」

セシリアのレーザーが足止めをしていくうちに切り掛かる。スピード、パワーともに高い相手ならゴリラやチーターがいいんだろうけど、下手な亞種にするよりはコンボのガタキリバの方が強い。人型ビットを展開できるタイムは残り30秒。確実に決めるタイミングで使わないと。

「はあああああ

相手の拳をカマキリソードでいなし、バッタの脚力で距離をとりながら、クワガタの電撃を放つ。ダメージはそれなりには通るみたい。一夏はそろそろかな。

「一夏、まだ！？」

「わかつた。じゃあ鈴、たのむ

『一夏あつ！』

早速、一夏が準備しようとしたときに聞こえてきたハウリング。その発生源は中継室で審判とナレーターを殴り倒した篠ノ之さんからだつた。そんなことしてると命令じゃないでしょ！――

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするの！』

再びハウリングを起こし、叫ぶ篠ノ之さん。彼女の表情は真剣なものだが、あくまで彼女にとつてのだ。そんなことはお構いなしに無人機は銃口のついた腕を篠ノ之さんに向ける。

「つ、第！」

一夏が飛び出したのと、引き金が引かれたのは同時だつた。一夏は白式の単一使用能力、『零落百夜』を発動させるが、白式のシリードエネルギーは残り少なく、ビームを相殺すると同時に一夏は倒れた。

「一夏あつ！――」

鈴が叫ぶが一夏は気を失つていいのか反応はしない。容赦なしに無人機はその腕を一夏に向ける。でも、そんなことはさせない！！さう心に思い、ビットを展開させる。悪いけど、倒すから。

再び展開されるビット。チャンスは30秒だけだからすぐにきめる！

『スキヤニングチャージ！』

遮断シールドを破壊した時と同じように全機飛び上がり、空中で1回転。そのまま足を突き出す。

ドガアアンツ！ ドガアアンツ！

1機、2機と次々に蹴り込むと同時に、煙をあげ、無人機はその原型をなくしていく。

「はああああああ、セイヤ————！」

最後に本体である俺のキックが無人機を貫く。

「ふう。やつぱりコンボは疲れるなあ」

爆発を背に、着地した俺は咳いた。実際のオーブのコンボよりは疲労を感じないけどね。さて、一夏は大丈夫かな。

「2人とも、一夏は？」

「ただの気絶ですわ。何にしろ大事に至らなくてよかったですわ」

一夏が大したことのないことに安心。よかつた。さてと、問題はこの無人機が誰からの刺客なのか、ということ、ね。そう思つて中継室に目をやる。いくら一夏のためになりたかったからって、そう認められることじやないしね。

『火野君、オルコットさん、鳳さん、大丈夫ですか？ 今、遮断シールドが解除できましたので戻ってきてください』

山田先生からの放送を聞き、ピットに戻る。詳しい事後処理は俺達がやることじやないから。

## Got to keep it real（後書き）

オーズが終わった……私は何を生きがいにすればいいのでしょうか。  
そんなことはさておき、次回は今回の後日談なので翌日に投稿します。

感想等お待ちしております。アンケートも明日までです。

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（前書き）

Count the medals

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

チータ

ゴリラ

## 説教と仲直りと約束（ただし一方通行）

ピットに戻ってきた俺達はすぐに一夏を保健室に運び、一夏が目を覚ましてから今回の事件についての連絡がある、と聞き、すぐに解散となつた。でも、俺は今回の事件でどうしても解決しなければいけないと思うことがあつた。だから、すぐさま一夏の元へ向かおうとする篠ノ之さんを呼び止める。

「何故止めるんだ？ 火野は一夏が心配ではないのか！？」

「心配だよ。でも、こいつなつたのは篠ノ之さんのせいでもあるんだよ。どうしてあんなことをしたの？」

「や、それは……」

「自分が狙われないことを考えなかつたの？ 中継室で篠ノ之さんが氣絶させた人達も傷つく可能性があることを考えなかつたの？」

「……」

篠ノ之さんは黙つたまま。それでも俺は続ける。だれが伝えないと、またこんなことが起こる気がするから。

「もしかすると一夏は篠ノ之さんがあのタイミングで出てこなければ怪我しなかつたのかもしれない。正直に言うと、あの時の篠ノ之さんは足手纏いだったから。俺が言いたかったことはこれだけだから

「ひ

「…………わ、私は……」

「つづむく篠ノ乃さん。その表情は見えないが雰囲気から自分のスに気づいてる気がする。

「言い方が悪かったかもしれないけど、人の命に関わることだから。何より失った命は帰つてこないから」

そう言つて脳裏に浮かぶのは守れなかつた人達。自分に力があれば助けられたかもしれない人、オーブスの力があるのに間に合わず助けなかつた人……

自分でも表情が暗くなつているのがわかるほど俺は今でも後悔をしているんだ。だから後悔しない生き方を探しているんだ。

「火野…… そうだな。私が悪かった。あの時は一夏のためになるつてことしか考えていなかつた…… すまないな。お前のおかげで大事なことに気がついた」

「わかつてくれればいいよ。俺は先生達と話があるから先に一夏のところに行つてて」

「ああ」

そう言つて篠ノ乃さんは一夏のところに向かつた。これでこの事件は解決かな。

「すまないな、火野」

後ろから織斑先生の声がする。その顔はいつもの凛とした表情ではなく、少し戸惑いのある気がした。

「本来は篠ノ井にああ伝えるのよ教師の役目なのだがな、山田先生は優しくおれむし、私は感情的になつてしまつやうだからな」

「別にいいですよ。俺だって気になりましたから。それに……」

一夏本人は優しいから」のことを咎めすらしないだらうから。もし誰も何も言わなかつたら大事なものが無くなつうな気がしたから。

「……そつか

「じゃあ俺はこれで

そう言つて、俺は保健室に向かつた。一夏がどうなつてゐるかな。

英治と篠が話している頃、早くも田を覚ました一夏とそれを鈴はとこうと、夕田がさす保健室で話していた。

「あー、やつじえは試合、無効だつてな

「まあ、やつややつやつじょうね」

「あ、やつこやせ、勝負の決着つてやつする、次の再試合つて決

まつてないんだよな?」

負けたほうがなんでも言つ」とを聞くところ賭け。彼は鈴との約束のことでも気になったのだ。

「やのことなら、別にもついていわよ

「え? なんだ?」

「い、いいからここのよー」

顔を赤くする鈴。元々の発端は、鈴が中国に帰るときの一夏とした約束「あたしの料理の腕が上がつたら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?」の内容を一夏がただ飯を食わせてもらえたと勘違いした所から始まつたのだ。鈴の真意は日本でいう味噌汁の話、いわゆるプロポーズのものだつたのだが、相手は歩く唐変木、織斑一夏。見事に誤解していたのであつた。

「鈴。その……悪かつたよ。色々とすまん」

一夏は素直に頭を下げた。鈴はそんな一夏に面を食らつたような顔をしたが、すぐに戻つた。

「ま、まあ。あたしもムキになつてたし……。いいわよ、もつ

「ソレで終わればいいのだが、一夏は正確な約束を思い出し、それが味噌汁がどこのいつのとか言つたときは鈴は固まつて、動搖していた。

「やういえば、また店やるのか? 鈴の親父さんの料理、うまいも

んな。また食べたいぜ」「

「あ……。その、お店はもうしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから……」

場の空気が重くなつた。鈴の両親が仲が良かつたのを知つてゐる一夏は「冗談じやないのか、とも思つたが、鈴の表情を見て、冗談ではないのをさとり、何を言つべきなのがわからなかつた。何より一番辛いのは鈴なのだ。理由は確かに気になるが、そんなのは訊いていい話ではないのだ。彼女の心の傷をえぐつてしまつから。

「家族つて、難しいよね」

その問いに一夏は答えられなかつた。彼自身も家族に問題があつた。一夏と千冬は捨てられた。さらに、一夏は両親の顔を知らない。だから、何も答えられなかつた。

「なあ鈴」

「ん、何?」

「今度どつか遊びに行くか

「えー? それって、そのデー

「弾も呼ばうぜ。久しぶりに3人で集まるか

「…………」

何かが碎け散る音がした。よく自分から突き落として、上げる。

それが異性に好印象を『える方法と耳にする』ことがあるが、彼はまさに逆のことをやつてのけたのだ。夜中に刺されても文句は言えないだろ？。

「あんたと2人っきりなら、行つてあげなくも

」

「一夏さん、こんな所でなにをやつていますの？」

「なんでアンタがここに」

突如、2人の間に火花が散る。その後、クラスだの、戦闘スタイルだの、一夏の「一チは自分だ、だの言い争いが始まった。一夏にとつて幸いなことは篤がいないことだらう。幼馴染は自分だ、だので余計に騒がしくなるだらう。

（ああ、早く部屋に帰つて休みたい……。ていうか風呂に入りたい……）

「一夏（やん）……」

少年の願には当分、叶わないようだ。だが、諦めてしまつたら、そこが終点になつてしまつ。

人機の解析を行なっていた。無人機はすぐさまその場に運ばれていた。真耶が解析してゐる間、千冬はアリーナでの戦闘記録を何度も見ていた。

「やはり、登録されてないコアだつたか」

真耶からの報告を聞き、千冬はあることを思い出した。

（そういえば、火野と門矢のIHSも登録されていないコアだつたな。だが、何者も手出しができないように仕組まれている）

すぐさま友人の顔を思い出し、聞き出してみたいと思つた。

「織斑先生、どうかしましたか？」

「いや、IHSのコアについて考えていただけだ」

「といひことは心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今は、まだ」

千冬は携帯に登録されているある番号を見つめる。それが答えに一番近づく方法だから。だが……。

（山田先生もいるしな。後でかけるか）

彼女は視線をディスプレイに戻す。世界最強まで上り詰めた彼女の瞳には何が映るのだろうか。

「結局、コンボを使わなきゃいけなかつたか。でも……」

一夏がいつもの3人に振り回されているのを見た、俺は自室で休んでいた。緑のコンボ、あれがこの世界の常識を超えているものだつたら、絶対、誰かが狙つてくる。

あの戦いだつて、無人機はあまり高く飛ばなかつたし、ガタキリバの物量でどうにかなつた部分が大きい。ISでの戦いはまだまだだから強くならなきや。

そして黄色のメダルに目を落とす。現段階でできるもう一つのコンボ。あのコンボはISだとどうなるのだろうか。それに残りのメダルも集めなくちゃいけない。

「強くならなきゃな」

そう思つたあと、気分転換に外の空氣、といつか購買に行こうと思つて部屋を出た。そして適当にジューク、パンを買って部屋に戻る途中、のほほんさんがいた。

「何してんの、のほほんさん？」

「あ、ひのひの。今ね、おりむーの部屋の前で面白がつないことになつてゐるのだ～」

ひのひのつてポケットなモンスターと旅するゲームの2作目の中のキャラの鳴き声みたい。で、面白いことつて？ そう思つて見ると、

篠ノ内さんが一夏の部屋の前で何やら話していた。

「ひ、付き合つてもいいつー。」

そう言い残して篠ノ内さんは去つてこつた。

「のぼるさん、コレどうこういふ」と。

「うーん、今度の学園別トーナメントで優勝したらお祝いと一緒に来るかなー」

「へえ、そうなんだ。何か大変なことになりそう……」

「ひのひのとも優勝すれば付き合えるー?」

「いや、付き合えないけど。一夏達で決めたルールでしょ。優勝したら一夏と付き合えるって?」

一夏がこんな約束するとは予想外かな。

「じゃあ俺、部屋に戻るから

「うん、おやすみー」

## 説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（後書き）

アンケートは本日の10時までです。次回はそのアンケートで決まったキャラを出すための話にするため、一から作るので遅れる可能性があることを御了承ください。

オーズの最終回見たらアンクを出したいとも思つたけど、出しても収集がつかなくなりそうなので悩み中。

筆とドーパントとバース（前書き）

英治が全く出てこないので「Count」はお休みです。アンケート結果発表バース編みたいなものです。

「帰つたら……これを見よ」

授業のない土曜日。簪は用事（お気に入りのアニメのDVDをアリオイトに買いに行く）を済ませ、街を歩いていた。これ以上、ここに用事もなかつたため、すぐに帰るつもりだった。

（私のHIS、どうしよう…）

道中、彼女はそのことを考えだした。代理が出たクラス対抗戦はともかく、今度行われる学年別のトーナメントにはこのままで間に合わないからだ。

（…英治は自分のデータを使ってもいって言つてた。……でもあの子にはライドオーズのデータは、ちょっと……）

クラス対抗戦で見せた人型ビット。あれがあれば戦いは有利だろう。だが、彼女が元々作ろうとしてたのはマルチロックオンシステム。それで苦戦中なのだからそれよりも難しい人型ビットは論外である。それを作るきっかけとなつたのは蒼い翼を持つ自由ではないと思いたい。

好きなアニメの技が使えたらしいなあ、とも簪は考えているが、それを再現するためのヒントとかがないため不可能である。

（アニメの武器か……ドリルかな……天を突くみたいな感じ…）

彼女の脳内にはとある口ボットが思い浮かんだ。

(「、これは無理……な、何か別の……）

さすがに道理は蹴つ飛ばせなかつたのだろう。簪はふるふると首を振つた。他にも赤く輝き3倍の性能を発揮するシステムや月面まで伸びるパンチ等々考えたが、彼女個人ではどう考えても再現不可だったので考え直した。

そんなことを考えてるときに事件は起つた。

ドガーンッ！！

その爆音は彼女が銀行の近くを通つたときに聞こえてきた。

「な、何？」

辺りでは悲鳴があがり、逃げ惑う人々が大勢いる。爆音の中心となつた建物からは煙が上がり、そこから人型のシルエットが歩いていた。

「ヒヤハハハハ、楽勝じゃねえか。ここには厄介な仮面ライダーもないし、俺に勝てるやつはいねえぞー！」

異形の怪人、アームズドーパントはそう言いながら駆けつけてきた警官を蹴り飛ばした。カエルが潰れたような声をあげ、警官は転がつていった。

(「ど、どうしよう。英治に連絡したつてここからH2学園は結構距離あるし……）

彼女が思考の渦の中にいる最中も次々と警官は駆けつけ、包囲する。

「貴様は包囲されている。大人しく投降するんだ！」

「ああ、んなことするわけねーだろー。」

アームズドーパントは右腕を銃に変え、発砲する。だが、その1撃は脅しどばかりに警官達を狙わず、付近のパートナーを破壊した。それをきっかけに警官隊は拳銃で攻撃をしかけるが、ドーパントには大したダメージは与えられず、1人また1人と倒れていく。

（早く英治に連絡を……っ！）

少し離れた物陰に隠れて、英治に連絡をとろつと思つた彼女の目の前に映つたのは怪我をしていて動けない女の子だった。近くにはパートナーの残骸が見えるため、それで足を怪我したのだろう。

（助けなきゃ……）

そう思つて簪は少女のもとへ急ぐ。幸いにもドーパントは警官達を相手にしているようではちぢれに気づいていなによつた。

「……大丈夫？ 早くここから……」

「いい獲物がいるじゃねえか。なぶりがいのありそなやつらだ」

女の子を背負い、逃げようとした簪に後ろから声がかかる。そこでぐさま走りだせば違う未来になつたかもしない。だが、簪は怪人が自分に向ける殺気に恐怖し、立ち止まつてしまつた。

（せ、せめて……この子だけでも守らないと……）

自分より震えている少女を見て、簪はそう思つた。しかしどーパントはそんな彼女の考え方も気にせず、着実に近づいてくる。

「あばよ、お嬢ちゃん達」

バンッ、バンッ！

彼女達めがけてドーパントが腕を振り下ろそうとしたとき、銃声が響いた。

「があああああ

警官の持つ拳銃とは威力が桁外れのそれに煙をあげ、よろめくドーパント。

「貴様あー！」

ドーパントが怒りをこめて目を向けた先には体格がよく、髪を短く刈つた男がいた。年は三十くらいであろう。だが、何より目を引くのは背負つているミルク缶だらう。

「いけねえよ、自分の欲望を満たすためにそんなことをするのはよ

ま、俺も欲望まみれだけだ。そう男は続ける。

「貴様、タダじゃすまねえぞ」

男はドーパントの敵意をさせじこせず、悠々としている。

「さて、異世界での初仕事。いっちょがんばりますか」

男はベルトを巻き、メダルをはじく。宙を舞うメダルを掴み、一  
言。

「変身！」

メダルをベルトにいれ、ハンドルを回す。カポーン、そういう音  
と共に、男の姿は変わる。仮面ライダーの姿に。

「か、仮面ライダーだと…？」

ドーパントは狼狽する。「こことは違つ街、風都で手に入れたガイ  
アメモリで男がわざわざこっちに来て暴れたのは自分達の天敵とも  
言える仮面ライダーを警戒してのことだつた。

「やうなるな。じゃあ仮面ライダーベースだな

「ベースだらうがどうでもいい。貴様を倒せばいいんだよ！」

アームズドーパントは右腕を剣に変え、ベースに切りかかる。

「うおっと。危ねえな… つと、お返しだ！」

体勢を低くして剣戟をよけ、膝蹴りをする。ようめぐドーパント  
にそのまま追撃にパンチをする。

「いっちはも武器を使うか」

再度、メダルをベルトにいれ、ガチャガチャのように回す。

『ドリルアーム』

「もじっちょオマケだ！」

『キャタピラレッグ』

右腕と両足の周りにいくつもの部品が展開され、それが名前通りの形となる。

「おいやあああああああ

キャタピラで前進し、ドリルアームを振り回す。火花を上げ、よろめくドーパントに今度はキャタピラレッグで蹴りこむ。

「がああああああああああ

キャタピラの回転に巻き込まれ、痛みに悲鳴を上げるドーパント。

「ぐ、ぐわッ」

実力の差を知ったのかアームズドーパントは背を向け走り出す。

「逃がすかよ！」

バースは何枚かのメダルをベルトにいれ、回す。

『ブレストキャノン

『セルバースト』

「ブレストキヤノン、ショートーー！」

走り出すドーパントを光の奔流が飲み込み、爆発させる。煙が晴れたそこには氣絶した男と砕けたメモリがあった。

「さて、お仕事完了。嬢ちゃん達、大丈夫だったか？」

変身を解いた男は簪の方へ近づいてくる。

「私は大丈夫。でもこの子が……」

簪は怪我をしてゐる子に向ける。

「どれ、見せてくれ。うーん、安心しな。ただの打撲だ。少し休めば大丈夫だ」

そういうて男は簡単な処置を施す。

「ヒナ、ビー？ 反事をして？」

「あ、お母さんだ。お姉ちゃん、おじちゃん。ありがとう」

母親に連れられて女の子は帰つていった。母親に背負われながらその子はずつと手を振つていた。

「まあて、嬢ちゃん、一ついいか？」

「は、はー」

「ここからE.S学園に行くにはどうすればいいんだ？俺、今までこの保健室で働くことになったんだな」

「え？ あ、私、E.S学園の生徒です。よかつたら一緒に来ますか」

「お、そういうのはありがたいな。頼むぜ。俺は、えーと、こいつを」

男は一枚のマニコアルを取り出した。

「……伊達明。で、仮面ライダーバース……」

マニコアルを受け取った簪はペラペラとページをめくる。そこにはベースの武器、C-LAWsが書かれていた。

（すい。もしかするとこれなら……）

「嬢ちゃん、どうしたんだ？ そのマニコアル気に入ったのか？」

静かに頷く簪。

「ううか。そういう嬢ちゃん名前は？」

「……更識簪」

「じゃあ、簪はいつの整備できるのか？」

「ま、まあ、少しほ……」

「お。じゃあ、もしかすると頼むことがあるかもしれないな。ソレ、貸すからアロシクな」

「あ、はい」

簪の案内の元、伊達明は工芸学園に向かう。そこで英治達にどういつ影響を与えるのだろうか。

「じゃあ工芸学園に向かうか」

そう言って伊達は歩き出した。

「あ、あの駅はそっちじゃない……あっち」

「何？」

大雑把な人だな。会つてそういうのに簪は伊達の性格がわかつた気がした。

文句が着そうな簪魔改造計画。

言い訳をするならバースのI.S化をしたかったからです。  
ちなみに参戦希望ライダーは龍騎とカブト（天道総司で）の同率  
一位でした。すぐにとはいきませんが、出番をお待ち下さい。天道  
をどのタイミングで介入させるかが難しい……

アンケートに協力してくださった皆様、ありがとうございました。

## ねやこと輝と転校生（前書き）

今回はつなぎみたいなものなので短いです。

Count the medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## おでんと噂と転校生

とある日曜日。簪に呼ばれた俺は保健室に来ていた。俺に会わせたい人がいるかららしいけど、誰だろ？

「失礼します。火野ですけど……」

「…英治、来た」

「おう、来たか。お前が火野英治だな」

「あ、はい、そうですけど」

保健室には簪と知らない体格のいい男の人人がいた。男の人は鍋で何かやつてるけど。

「俺はこいつやつだ。ヨロシクな、火野」

そう言つて渡されたマニュアルを見る。そこには「バース装着者伊達明」って書かれていた……って、バース！？

「おう。紅渡に頼まれて来た、お前の助つ人だな。しつかし、お前本当に俺の知つてる火野とそつくりだな」

「「？」

同時に「？」を浮かべる俺と簪。どうやら伊達さんは俺とは違うオーズの世界から来たみたい。その世界のオーズは俺とそつくりだが、グリードの一人、アンクと仲間だったらしい。俺がいた世界じ

や、既敵だったもんな。そいつが、グリードヒルも仲良くなれる可能性だつてあるのか。

「ま、俺は医者だから普段『』に困らなければ俺の『』に来な」

「はー。あつがどつづれこまか」

「何か聞いたことはあるか?」

「聞いたことか……。じゃあ一つ。

「その鍋は何作ってるんですか?」

そう聞いた途端、簪が「え……それ?」って呟いたけど気にしない。だつてお腹すいたから。

「お、これに皿をつけるか。『』にまわせんでんだ。食つか?」

「あ、いただきます。」

「……しかも食べるの……?」

簪が突っ込むナビ、これも気にしないで箸を伸ばす。あ、ちくわ。

「『』おこしによ。簪も食べたら」

「……じゃあ、私も……」

「おこしなかったけど、保健室で3人がおでんを食べて

るつて異様な光景だつたんだろうな。

「ふう、食べた食べた」

「結局……ずっと、食べてた……」

おでんを食べた後、俺達は戻ることにした。簪は伊達さんのマニユアルを持つてたけど、どうするんだろう？

バースに変身するのかな？

まあ、それにしても伊達さんみたいな人が来てくれてよかつた。ここE-S学園は一部の職員を除き、全員が女性。ああいう頼れる大人つて憧れるしね。

その後すぐ、簪と別れ、俺は寮へ。といつても特にやることはないんだけどね。

英治達が戻った後、伊達は一人、考え方をしていた。

「紅は「コイツを使うときが来るって言つてたな

取り出したのはバースドライバー。だが、彼の元にはもう一本、バースドライバーがある。

感のいい人ならお分かりだろうが、これはプロトバースドライバーとでも呼ぶのがいいであろうものだ。紅渡は伊達にこれも渡していたのだ。

自分がいた世界でもバースを後藤慎太郎に託し、自分は手術のために旅立つた。その後、プロトバースとして復帰したのである。

「ま、あんまり考えていっても変わらないか

この世界には英治のオーズ、伊達のバース。そしてまだ見ぬ仮面ライダーがいる。それでも危機に陥らない可能性が無いわけではない。

「コイツを渡すやつ、探しといた方がいいかもな

プロトバースのベルトを見ながら、伊達は呟いた。

夕方、自由気ままに過ごした後、ご飯を食べに食堂に来ていた。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いたー」

「え、何の話?」

女子の集団が何か盛り上がりしているな。何かあったのかな? 聞いてみよ。

「ねえ、何かあったの? 漆い盛り上がりしているけど」「ひのひの。この前のおつむーのことだよー」

一夏の? ああ、あの優勝したら付き合えるってやつか。

「なるほど。優勝すれば一夏と付き合えるから盛り上がりしているのか。思つたんだけど俺が優勝したりどうなるの?」

またか俺が一夏と……絶対そんなことはないはず。

「今年のネタになるわ」

「むしろそれがいいかも」

「つて……ちよ、冗談じゃないよ」

何が悲しくて男と付き合わなきゃいけないの!?

「とにかく火野君とは付き合えないの?」

「そりやそりや。優勝したら付き合つて約束したのは一夏ですよ。残念だけど俺は違うよ」

「そりなんだ～残念」

「残念つてなんかあつたのか？」

「あ、一夏。帰つてきてたんだ」

鈴と一緒に一夏が現れる事に「よつて荒れる女子達。隠す必要あるのかな？ ま、いつか。

ちなみに一夏は中学の友達の家に遊びに行つてたりして。

「まあ、一夏はあんまり気にしなくていいと思つよ」

「さうか。まあ、いいや。それより英治も一緒に食わないか？」

「いや、先約があるからやめとくよ」

そう言つて鈴を見る。彼女はホッとした表情だつた。多分、一夏と2人きりがよかつたんだろ？ 俺が邪魔するのは悪いはず。さてと、何食べようかな。

「諸君、おはよ～」

翌朝。織斑先生の登場によつて一気に静かになる教室。まあ叩か

れたくないからね。先生の威儀は軍隊でも通用するんじゃないかな。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

その後、ISステッスを忘れたものは水着、それすら忘れた人は下着で、つて。思春期男子としては気になる光景だけど、駄目でしょ。ちなみに誰が狙つたのか、ここ指定の水着は旧型のスクール水着で体操着はブルマ、と。

「では山田先生、HRを」

「は、はいっ」

そんなことを考えているうちに始まるHR。今日は何があるのかな。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも2名です」

「「「えええええっ！？」」」

え？ 転校生？ 2人も同じクラスに？ 分散させないの？

こちらの疑問にも関わらず、開くドア。どんな人が来るのかな？

「失礼します」

「……」

礼儀正しく入ってくるブロンドの髪の人と、黙つて入ってくる銀

髪の人。でも驚くことはプロンドの髪の人は“男”だったことだつた。

やつとで原作2巻突入。2巻が終われば大体のキャラが揃つから、その後の展開がやりやすいのに。何が言いたいのかひとつ、ライダーの出番が未だに少ないということです。

フォーゼつて宇宙関係と学園ものひとつでエンド絡ませやうな気がしますね。フォーゼを出す予定は無いんですけど。

金髪と銀髪と山田先生の実力（前書き）

Count the Medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。この国では慣れな」とも多いですが、よろしくお願ひします」

「こやかな表情で告げるデュノアさん。そんな彼とは逆に俺達クラスメイトはあっけに取られていた。

「お、男?」

クラスの誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「きや……」

「はい?」

「きやあああああああ――――」

クラス中に響き渡る換気の叫び。耳が痛い。織斑先生もやれやれつて顔してるし。

「男子、3人目の男子」

「守つてあげたくなるタイプね」

「地球につまれてよかつたー」

次々と聞こえてくる喜びの声。最後の人は大げさだと思つけど……

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだもう一人の自己紹介が終わつてませんから～」

織斑先生、山田先生に言われて静かになるクラス。そして大量の視線はもう一人の転校生に。銀髪の彼女は綺麗な髪をしているが、何より目を引くのは左目を隠す眼帯である。デュノアさんと違つてその雰囲気はまるで軍人つて感じで、冷たい印象だった。

「…………」

黙つたままの転校生。本人はまるで周囲に興味がないような表情だった。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生に言われて姿勢を変える転校生。織斑先生を「教官」つて呼んけど、何か関係があるのか？

「こー」ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、こーではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ

「了解しました」

「もう教官ではない」に「！」では「」か。昔何かあつたつてことだよね。後で一夏に聞いてみるかな。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

その短すぎる血口紹介に固まるクラス。そしてこの空氣にいたたまれなさそうな顔の山田先生。

「あ、あの以上…ですか」

「以上だ」

ぱつさつと切り捨てられ泣きそうな山田先生。ボーデヴィッヒさんもボーデヴィッヒさんだけど、山田先生もしつかりしてください。先生は一応、年上ですよ。

ボーデヴィッヒさんは一夏と田があつたかと思いつと、一夏の方へ近寄る。

バシンッ！

そしていきなり一夏を殴つた。え、一夏は何もしてないよね。

「私は認めない、貴様があの人の弟であるなど、認めるものか

「いきなり何しやがるー」

「ふん……」

一夏の抗議も鼻にかけずに戻つていぐ。ボーテヴィッシュさん。俺を含め、クラス中はポカンとしていた。一夏は何か心当たりがあるようだけど。

「あー、ゴホンゴホン！ ではHRを終える。各人はすぐに着替えで第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でINS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩きながら織斑先生は指示を出す。それによつて一夏とボーテヴィッシュさんの事件で固まつていたクラスは動き出した。

「織斑と火野はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ？」

その指示がでてすぐに一夏と田があわせ、頷く。

「君達が織斑君に火野君だよね。僕は」

「じめん、デュノアさん。このままだと大変だからー。」

すぐさまデュノアさんの手を取り、走り出す。こうしないと大変なことになるから。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習の度にそこまで行くから慣れてくれ」

「う、うん」

走りながら一夏が説明する。デュノアさんは落ち着かなさそうだけど、今は気にする場合じやないか。

「ああっ！ 転校生発見！」

「それに火野君と手をつなこでる」

どんどん辺りに集まつてくる女子達。 「者ども出ぬえ出ぬえー」  
つてこゝは江戸時代じゃないから。

「さやああ、生まれてきとよかつた。お母さん、今年は母の日は河  
原の花以外のをあげるね」

セニ、家族は大事にしようよー

「な、なに？ 何で盗聴しているの？」

「そりや、男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

わからないうつて顔のトコノアさん。 一夏が説明しようとしてるけ  
ど、もう行き場がないよ。

「しまつた。英治、どうする？」

「どうするって囮作戦か、それとも」

チラシと窓を見る。 」の顔をない俺は変身しなくて何とかなる  
かな。

「一夏、『メソ』」

「 「 「 「え?」」」

一夏、デュノアさん、その他の皆が驚く。窓を開けただけなのに。

「一夏、織斑先生にフォローは入れとくから」

「おい、英治、待ってくれ」

一夏が何か言つてゐるけど氣にしないで、デュノアさんを抱えて飛び降りる。

「キヤア——————」

やけに高い悲鳴をあげるデュノアさんが氣になつたけど、時間が大変だから、そのまま走り出す。

「ね、ねえ、降ろしてくれないかな?」

「あ、『ゴメン。まあ、改めてようしぐ、俺は火野英治。英治でいいよ』

「うん、よりしく英治。僕もシャルルでいいよ」

そのまま更衣室に到着。一夏は一々着替えるけど、俺は面倒だからって理由でIFS-SUITSは中に着てゐる。だから制服を脱いで着替え完了。上着をいきなり脱いだとき、シャルルが驚いていたけど何があつたのかな?

まあ、そんなこんなで無事、時間通りに俺とシャルルは授業に間に合つた。でも、何か忘れてゐるような……?

「英治さん。間に合いつたみたいですね。……といひで一夏さんは？」

「あー。」

「スペアணணー！」

響きわたる出席簿が振り下ろされた音。結局遅れてきた一夏は叩かれた。「ゴメン、一夏。フォローするのも忘れてた。」

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

「英治に困られて女子に困まれてたんだよ。くつやー、英治のやつ」

「女子に困まれてずいぶんお楽しみのようですね。そんなですか  
ら女子に呑かれるのですわ」

少々刺のある口調のセシリア。今回ばかりは一夏、ホントにゴメン。

「何? アンタまた何かやつたの?」

「うるさい一夏さん。転校生に会つていきなりはたかれましたの」

「はあ！？ 一夏。アンタ何でそうバカなの！？」

「安心しろ。バカは私の前に2名いる」

バシーンー！ ×2

セシリアと鈴が反応するよりも先に降りおろされる出席簿。いつたい今日はどのくらいあれが降り下ろされるのかな？

氣を取り直して始まる授業。鈴とセシリアは叩かれたことを根にもつているのかブツブツと何か呟いていた。そんなことしてると、また叩かれるよ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 鳳！ オルコット！」

織斑先生の指名に不満の声を上げる2人。諦めた方がいいと思つけど。

「お前ら少しあやの氣をだせ。 アイツにいいところを見せられるだ」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちのー！」

織斑先生が何か言つたと思つたら途端にやる気を出す2人。先生、何言つたんですか。

ドガーンー！

突如響いた音の方向を向き、俺達は絶句した。なんと、一夏が山田先生を押し倒していたんだ。

「驚いたよ。まさか一夏が好きな人が山田先生だつたとは……どうりで篠ノ之さん達に振り向かなかつたのか、納得納得。あ、でもこんなところで押し倒すのもどうかと……」

「いや、英治、違うから！ これはただの事故だ！ 臆も何か言つてくれ」

「そう言われても……その体制じゃ……」

どんな体制かと言つと、一夏の手は山田先生のメロンのとこだね。いわゆるラッキースケベつてやつ。

「ハツー！」

刹那、一夏は山田先生から離れる。そして一夏がいた位置をレーザーが通り抜ける。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑っているセシリアはライフルを再度構える。つて止めなきやまざいんじや……

「うおおおお！」

俺がそういう思つてる間にも双天牙月を連結させ、ためらいもなく投げる鈴。あ、あれは当たるな。そう思つていたが、間一髪、一夏はそれをかわした。すごいな……って一夏、後ろ！

体制を崩して的一夏を襲うのはブーメランのように戻ってきた双点牙月。あれは冗談抜きでマズイって。

ドンッ！

そう思つたのもつかの間。山田先生は両手でマウントしたアサルトライフルで双点牙月の軌道を変えたのだ。あの山田先生とは思えない行動だ、といつかいつもからあれくらいしつかりしてればいいのに。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

照れたように答える山田先生。まあ俺だって自分の過去のことでも褒められることがあれば照れくさくなるけど。それにしても代表候補生つてことはセシリ亞や鈴達と同じかそれよりは強いつてことになるよなあ、そう考えると山田先生が凄く思えてくる。ゴメンナサイ、先生。頼りにならないとか思つちゃつたりして。

それよりもよく考えれば俺の試験の相手は山田先生で、負けたんだつた……

「さて小娘どもこつまで惚けている。やつをじめんや」

「え？ あの、2対1で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負けや」

セシリ亞と鈴が物言いたそうな顔で言つたが、織斑先生の一言に火がついたのか、急に闘志を燃やす。

「では、はじめー！」

「手加減はしませんわー！」

「さつきのは本気じやなかつたしねー！」

「い、行きますー！」

号令と共に飛び出す3者。専用機があり、数でも勝つてる2人の方が有利だと思うんだけど……。

「さて、今の間に……そつだな。ちゅうじい。『デュノア、山田先生が使つてゐる』の解説をしてみせや」

「あ、はい」

山田先生が使っているのは確かラファール・リヴァイブだつたな。俺の試験のときにも使つてたやつだし。シャルルの説明を程々に聞きながら、俺は3人の戦闘を見ていた。

セシリ亞がレーザーを撃つが、簡単にかわされて反撃をもらつ。この隙に鈴が攻撃すればいいんだろうけど、鈴は鈴で攻撃をしてかわされ、反撃をくらう。

「ちょっと！ セシリ亞邪魔よ！」

「り、鈴さんこそ、わたくしの邪魔ですわ」

しまいにはお互いがお互いの邪魔になつていい始末。そこ、ちゃんと協力しようよ。お互いに足を引っ張つているせいか、山田先生はノーダメージだつた。あ、セシリ亞そつちに動いたら鈴とぶつかるよ……つて、遅かつたか。鈴と激突したセシリ亞はそのまま動きを止め、2人まとめてグレネードでやられた。目をまわしながら落下する2人。結局、山田先生の完全勝利だつた。性能が戦力の決定的差でないことがよくわかる戦いだつたな。まあ、2人の連携が悪かつたのが一番の要因だつたけどね。

で、結局今日の授業は何するの？

金髪と銀髪と山田先生の実力（後書き）

我ながら中途半端などこで話を終わらせたな……  
次回は授業の続き + の予定です。

感想や要望等お待ちしております。

## 実験と貴公子の壁上（前書き）

Count the medals  
オーブが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

「べべべべべつ……ー」

「わわわわわわわわ……ー」

山田先生との模擬戦の後、ずっとこちらを睨つたままのセシリニアと鈴。お互いに相手が悪いって言つてるけどどちらもどちらだったからな……

それについてまでも話していくと、ほひ。

パシーンッ！

「こつまでこりみ合つてこる、馬鹿どもが」

頭を抑えてうずくまる二人。まあ、出来自得つて言えどもさうだけど……

「さて、これで諸君にもヨリ学園教員の実力は理解できただらう。以後は敬意を持つて接するよつこ」

セシリニア達をにおかまになく、パンパンと手を叩き織斑先生は続ける。

「専用機持ちは織斑、火野、オルコット、デュノア、ボーデヴィック、それに鳳だな。では8人グループとなつて実習を行つ。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

織斑先生がそう言つやにな、女子が一斉に俺達男子の方に来る。

「織斑君、一緒にがんばろ!」

「火野君、わからないとこ教えて~」

「デュノア君の操縦技術見たいなあ」

予想通りかな、やつぱり女子達は俺達を囲むように、いや、もう囲んでるか。シャルルはこうなるのを予測してなかつたのかずっと「ふえ！」だの「え！」とか言つてゐる。なんか、女子に流されていきそうな気がするんだけど……

そんな男子の状況を見かねたのか、織斑先生は面倒そうに低い声で告げる。

「IJの馬鹿どもが……。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさつき言つたとおり。もたつくようなやつはIJSを背負つてグラウンド百週させるからな！」

途端に女子達は一目散に自分のグループに行く。多分、このグループになるのに2分もかかつてないんじやないかな。

自分のグループのメンバー（テンションが高い）を確認した後、俺は周りを見てみると、俺や一夏、シャルルの班になれて喜ぶ声、さつきの模擬戦のせいか、がつかりの声があがるセシリ亞や鈴の班。そして何も会話がないボーデヴィッシュさんの班、という状況になつていた。あそこの班、氣まずそつ……

「ええと、いいですかーみんなさん。これから訓練機を1班1体取りに来てください。数は『打鉄』、『リヴァイブ』ともに3機です。好きな方にしてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

いつもよりしっかりした山田先生が告げる。そのままの模擬戦で自信でもついたのかな。

「火野君、ラフアールのほうがいいな」

「うんうん、私もそう思つ」

山田先生の戦いでの印象がよかつたのか、うちの班では満場一致でラフアールを使うことになった。じゃあ、せっせと持つてくるか。「わいと、誰からやる~。やる」とは装着と歩くとか簡単な動作をする」とだけ

「じゃあ、わたしからー」

最初はほほんさんからか。えーと、確かに装着の手伝いをしろ、とも言つてたな。

「主席番号1番! 相川清香! ハンドボール部所属! 趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ!」

「お、おう。ていうかなぜ自己紹介を……」

隣の一夏の班から聞こえてきた自己紹介。何で?

「おつむー、人気だねー」

「まあ、数少ない男子だからね。って俺もだけど。じゃあ、やる」とやつちゅおうか

「わかつたー」

とりあえず自分もIISを展開しておくかな。そっちの方が色々と便利だらう。

『タ力！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

「じゃあのほほんさんはどうまでできる？」

「んー、大体はできるかなー」

「じゃあ、やつて三「 お願いしますっ！ 」 つて何？」

声の方を見ると女子に言い寄られているシャルルが戸惑っていた。助け舟出した方がいいのかな。あ、織斑先生が向かった。じゃあ大丈夫かな。

スパーング！ × 3

「 いつたああつっ！」

「ああはなりたくないから、皆、がんばる」

俺がそう言うとグループの皆はコクコクと頷いた。見ると一夏の班もまじめに行動しだした。ちなみにセシリ亞や鈴の班は着々と進んでいた。騒ぐこともないからかな。逆にボーデヴィイッヒさんの班は静かすぎて進んでいない。あ、山田先生が向かった。

「あ、織斑君の班、いいなー」

「一夏がどうかしたの?」

見てみると、一夏の班はHSを立たせたまま解除してしまったため、一夏が抱えていた。

「ついやましいかもしないけど、あんことしないでよ」

「「「「「善処します」」」」

その後、なんとか実習を切り抜けた俺はHSを片付けることになった。ちなみに一夏の班は一夏任せで、シャルルの班は女子達が「デュノア君にそんなことさせられない」とか言られて、女子が運んでいた。俺は女の子に力仕事をさせるのはどうかなって思ったから自分でやることにしたんだ。

「じゃあ、じつこうときませこれだな」

『タカ！ ハリラ！ バッタ！』

HSを使えば元々楽なのにさらにパワー型のタカゴリバであるために大した苦もなかつた。

「あー。あんなに重いとは……」

俺が訓練機の置き場に来ると俺より結構先にHSを運んでいた一夏が座り込んでいた。

「一夏、どうかした?」

「いや、これってすうげえ重いな……って……」

俺を見て声が小さくなつていいく一夏。なんか「EVAを展開すればよかつたのか」とかブツブツ言つてるし。

「まあかとは思うけど、そのままカートを引いてたの?」

「おう、てつきりそんなものかと思つてたからな……」

「ハハ。ま、まあ昼休みだし、さつさと着替えて」飯にしようつよ

「そうだな。英治、今日は屋上で飯にしようぜ。シャルルも誘つて

「うん、いいけど」

なんか一夏は今日弁当があるらしい。じゃあ俺は購買行つてから行くかな、シャルルと。

「お、シャルルだ。おーい、シャルル。着替えに行こうぜ。俺達アリーナの更衣室まで行かなきゃいけないしよ

「え、ええっと……僕はEVAの調整をしてから行くから。時間がかかるかもしれないから先に行つて」

「いや、別に待つのは慣れてるから大丈夫だぞ

「い、いいからいいから! 僕が平気じゃないから。ね? 先に教室で待つて」

シャルルの妙な気迫に押されて一夏は頷いた。シャルルのあわてつぱりはなんか不自然だけど、ま、いつか。

「じゃあ、シャルル後で」

「う、うん」

「お待たせ。あれ、一夏は？」

昼休み、アリーナから戻ってきたシャルルがそう告げる。

「一夏は先に屋上に行つてゐるつて。じゃあ俺達も早く行こうか」

「うん」

「ねえねえ、あの子だよ。今日来た男子つてのは

「え、ホントだー」

さつそく購買に向かう俺達だけど、第3の男子といふことだらうか、周りの女子達の視線が怖い……

「ねえ、私達とお皿食べよ」

「あ、ずるーい。私達と食べよつよ」

……予想通りなのかな。争奪戦とばかりに集まつてくる女子達。先約があるからって断つてもキリがないなあ……。俺がそう困つているとき、不意に聞こえてきたのが……

「僕のよつなののために咲き誇る花の一時を奪つことはできません。こうして甘い芳香に包まれていいだけ、もうすでに酔つてしまいそうなのですから」

声の主であるシャルルは、何て言つかな、そつ、お世辞っぽくない感じだった。まるで本心からみたいに。一方シャルルにそんなことを言われた人達は、とうとう……って、流血！？ 血を流しながら倒れる人がいっぱい……。リボンの色からだと大半は3年生みたいだけど、何があつたんだ。

「ちょ、大丈夫ですか！？」

一番近くに倒れていた人に呼びかけてみる。もしかして新手の病気か何かかもしれない。

「……うん、幸せ……」

そういう残し、幸せそうな顔で氣絶した。他の人もそうだけど流れている血は鼻血で、シャルルの一言に興奮したみたいだった。気絶していない女子達は今の一言に恥ずかしそうな表情で引き上げていった。

「シャルル、凄いね。ああこう」と言えて。俺にまでやつにない  
よ」

「……予想以上に効いたやつたけどね」

気を取り直して購買でお皿を買って、屋上に向かつ俺達。そこで  
目にしたものは……修羅場だった。どういう状況かというと、篠ノ  
之さん、セシリ亞、鈴が自作の弁当を持って一夏に迫っている光景  
だった。

「ねえ、英治。僕達、ここに来てよかつたのかな？」

「うーん、確かにそんな気はするけど……まあ、一夏が誘ってくれ  
たんだから、行くだけ行つてみない？」

「英治、シャルル。思つたより遅かったな。何かあつたのか？」

「いや、シャルル珍しさに女子が集まつてただけだよ」

そう言つと、一夏は納得した顔で頷いた。一夏も最初はそうだ  
たから思つことがあるんだろう。俺もだけど。

「……どうこうことだ」

「ん？ 篠ノ之さん、何か言つた？」

「い、いや、何でもない」

何か言つてたけど、本人が何でもないって言つならいいか。そん  
なこんなで雑談、というか、篠ノ之さん達から文句を言われる一夏

を見ながら昼休みを過ごした。わかつた」とと言えば、篠ノ介さんと鈴は料理ができる、セシリ亞は……

「さてと、じゃあ英治、シャルル。次の授業の準備に行こうぜ。今度は第1アリーナに行かなきゃいけないからな」

次の授業はかなりの距離を移動しなきゃいけないから、そろそろ行かなくちゃ。そう思つて立ち上がつた瞬間、携帯が鳴り響いた。

「はい、火野です」

「私だ、織斑だ。突然だが、お前に頼みたいことがあるんだが、いか?」

「はい」と答え、話を聞く。どうやらトト学園付近で怪人がでたみたい。で、その調査をして欲しいらしい。断る理由もない俺は返事をした。

「一夏、ちょっと俺は用事ができたから」

「え、ああ。授業はどうするんだよ!?」

「大丈夫だよ、織斑先生からの頼みだから」

一夏にそう告げた俺はライドベンダーの所に行く。目撃現場は少し距離があるみたいだから。



次回から仮面ライダー的な展開が多くなる予定です。まあ、グリードではないですが、メダル争奪戦をしようかなといつじで。そのため、『W』をクロスさせていいるのですから。

図と指揮官と野獣（前書き）

Count the medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

「……ここか、怪人を見たつて人がいるのは……」

特に変わったところはなさそうだな。とりあえず、怪人を見たつて人がこの辺りにいるらしいから、その人から色々と聞くのがよさそうだな。そう思つて歩くこと少し、40歳くらいのスーツを着た男性を見かけた。多分、あの人だろうな。

「すいません、この辺りに怪人を見たつて話があつたんですけど、何か知つてますか？」

「ん、ああ。怪人なら確かに私は見た。この近くにはI.S学園があるから、そこを狙つてるかもしかつたからね」

男の人の言い方はまるで一夏が狙われているような口調だつた。確かに一夏は世界的に有名な織斑先生の弟で、I.Sが使える男。狙われる可能性は十分にあるはず。学園に戻つた方がいいのかもしれないな。

「そうですか。じゃあ俺はこれで」

「ふむ。ところで少年。この世界をどう思つつかね？」

「……どう、とは？」

「力を持たない、いや、力を持つことができない男が虜げられ、ごく一部しか力を持つ者はいないのに偉そうにできる女。I.Sとは必

要なものなのか、ということだよ。力を持つ少年」

「I.Sは必要なものなのか、か。この世界に来てみてそれなりに経つたけど、そんなこと考えたことはなかつたな。

「……今のは忘れてくれて構わんや。そろそろ本題に入ろう。火野英治君」

刹那、身構える俺。この人の雰囲気から何か大変なことを起こそうとしているのがわかる。

「率直に言うと、君に協力してほしいのだよ。我々財団は君の持つメダルに興味を抱いていてね、それを提供してほしいのだよ」

狙いはメダルか。もしかすると俺を呼ぶために敢えて嘘の怪人の情報を流したのかもしれない。

「お断りします。貴方達のような人にこのメダルは渡せませんから」

「フフ、予想通りの回答だ。だが、本来の我々の目的は織斑一夏の生け捕り。私の任務としては君を織斑一夏から引き離すことなのだよ」

その答えを聞き終える前に走り出そうとする。だが、俺はすぐにここから離れられない理由ができてしまったのだった。

『COMMANDER』

その音声と共に、男はI.S.Bメモリみたいなものを腕に挿し込んだ。瞬間、みるみるうちに男の姿は異形の怪物に変わっていく。

「いいのかな。私のような怪人を放つておいて」

周りを人質に取られた俺はこの怪人を放つておくわけにはいかなかつたから。

「くつ、やるしかないのか。変身！！」

『タカ！ ト・ラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

構えを取ると同時に走り出す。相手の右ストレートをはらい、左拳を繰り出しが、つかまれる。

「はああああああああ

膠着も束の間、バッタレッグに力をこめ、蹴り飛ばす。相手が転がると同時に後ろに飛び、距離を取る。

「やはり君は厄介な存在のようだな。財団としてはガイアメモリからは手を引いたのだが、君やエスを相手にするとなると必要になるものだな」

怪人、コマンダードーパントはそう言い、左腕にある円形のディスプレイのようなものに手をかざす。その瞬間、ドーパントを囲むように兵士のような怪人が数体、姿を表す。仮面兵士達は警棒を取り出し、こちらに走り出してくる。それに対しても俺はメダジヤリバーを構える。

「はあ、セイツ！」

正面から来る敵を袈裟懸けに斬り、次に来たのを蹴り飛ばす。仮面兵士は1体1体は大した強さじゃないけれど、数が多い。しかもドーパントは無限に召喚できるから、この状況が続けば、絶対にこつちがやられる。どうにかしないと。そう思った俺は、メダルを変えることにした。

『タカ！ カマキリ！ チーター！』

タカキリーターとなつて、兵士達の間をすれ違いざまに切りながら駆ける。火花をあげながら転がる兵士達は消滅するけど、そつちには目もくれずに、怪人へと一直線。両腕の刃で、その体を切り裂いた。

「くつ。やはり一筋縄じゃいきませんね。こちらも切り札を使う必要ありますか。それに向こうにもそろそろ到着した頃でしょう」

口元を拭うような動作をしながら、ドーパントは立ち上がる。そして、小型の機械を取り出した。

「先程までのように思わない方がいいですよ」

『COMMANDER UPGRADE』

その何かを自身のガイアメモリに取り付けたとき、背中には機械的な輪が装備された。

「では、これでも」

背中から放たれた大量のミサイルがオーブを狙う。俺はそれをよ

けようとしたけど、行動を起こすのが遅かった。ミサイルは広範囲に撃たれていて、チーターの速さでも安全圏には逃げ切ることはできなかつた。

「ぐわあああああああああ

英治が調査に行つた後、IS学園では授業が行われていた。それは反対意見があつたものの、余計な不安を『えないための措置だつた。

「ねえ、一夏。英治つてどこに行つたの？」

「さあ。千冬姉の頼みがあるつてどっかに行つたけど、俺も詳しくは聞いてないな」

一夏とシャルルは格納庫で話していた。午後の受業はISの整備。専用機をもたない生徒達は午前中に使つた学園のISの整備を行なつていく。専用機持ちである彼らは学園のものだけでなく、自分のISも見るように言わっていたが、自身の愛機のことは自分が分かつていてるし、慣れた作業でもあるため一夏以外は余裕ができたのだった。

「英治さんの」とですから、その、仮面ライダー絡みのことではなくて？」

「ああ。 そうかもしれないな。 だとすると、 英治は大丈夫か」

昼休みに出てつてから戻らない英治の行方を気になつていた一夏はセシリアの一言に納得の声をあげる。

「大丈夫じゃない？ あたしは英治が変身したの見たことないけど」

会話に鈴も加わる。 この受業は2組と合図のため、 彼女もいるのだ。 この場所にいない英治、 一夏達と親しくないラウラ以外の専用機持ちはこの場に集まっていたのだ。 ただ1人、 会話の内容についていけない者がいたが……

「ええつ！？ 英治つて日本で有名な都市伝説の仮面ライダーなの！？」

会話についていけないでいたシャルルが声を荒らげる。 その声を聞いた銀髪軍人が部下にそんなことを言つてたやつがいるな、 と思つたがくだらないと思い、 一蹴した。

「お、 おう。 英治は仮面ライダーだぞ。 というか、 仮面ライダーつて外国でも有名な話だつたのか……」

「ええ、 わたくしも噂くらいは聞いたことがありますわ。 確か、 どこの街によく出るとかつて」

「ああ、 それ風都よ。 あたしが日本にいたとき、 一夏と行ったことがあるのよ」

鈴の発言を聞き、 一夏はそのことを思い出す。

(中2の夏休みに花火を見に行つたんだよな鈴の両親が連れてつてくれるって言ったから千冬姉もOKしてくれたんだったな)

そう思つたのも束の間、シャルルのアドバイスの元、白式の整備を進めていく。

「では、I.Sの整備はここまでとする。諸君は教室に戻るよう各グループがノルマを達成したのを確認した千冬は指示を出す。それを皮切りに次々と教室に向かう。一夏達も教室に戻ろうと、歩き出したのだった。

「お、織斑君！ 早く逃げてください！ I.S学園内に怪人が！」

後ろから来たのは息も絶え絶えの山田先生。一夏は状況もちゃんと理解する間もなく、山田先生に手を引かれていく。そしてそれについていくシャルル達。

「怪人ってどういふことですか！？」

走りながら一夏は聞く。山田先生は教えるべきかどうか、少し考えて後、告げることにした。

「つい、さつき、学園内に侵入者がいたんです。先生達が何人か向かったのですが、侵入者は怪人に姿を変えて逃げ出したんです」

教員達は学園のI.Sを使用して追撃をしたが、大したダメージも与えることもできず、野獣の「」とき動きに次々と撃墜されていったのだった。

「おい、ガキ。友達の命が惜しければ大人しくこっちに来な」

突如、壁をぶち破つて現れた怪人は一夏を見て言つ。それを見たセシリ亞、鈴、シャルルはすぐさま I.S を展開して攻撃を仕掛ける。ブルー・ティアーズのスター・ライト Mk-?、甲龍の龍砲、シャルルの I.S.『ラファール・リバイブ・カスタム?』のアサルトライフル ゲント が火を吹いた。それぞの銃弾は怪人にまっすぐ当たり、爆発を起こす。

「やつたのか！？」

遅れて白式を開いた一夏は呟いた。そんな様子の一夏とは違い、代表候補生3人はこれで倒しきつたとは思わず、真剣な眼差しで煙の中を見ていた。

「はつ、少しは効いたじゃねえか。まあ、嬢ちゃん達に用はないんだ。その織斑一夏を引き渡せば素直に帰つてやるぞ」

煙からでてきた怪人、ビーストドーパントは傷だらけではあったが、瞬時に傷を治し、セシリ亞達と向き合つ。

「な、マジかよ……」

「傷を一瞬で治したっての、コイツは…？」

「とにかくやるしかないですわ。一夏さん、ここは私達が時間を稼ぎますわ」

「うん、だから一夏は早く逃げて！」

「テコノア君に、オルゴットさん、鳳さん、危険過ぎます。早く逃げてください……」

山田先生は戦つ意思を見せる3人を説得するが、聞く気はなかつたようだ。

「何言つてんだ…… アイツが俺を狙つてない、俺が残るから監視を早く逃げる」

全員の意見が行き違つ中、痺れを切らしたビーストドーパントは爪を突き立てる。

「俺は織斑一夏を連れて帰れればいいんだ。全員でかかつて来てもいいんだぜ」

そう言つてビーストドーパントは駆け出した。

「「「やせませんわー／＼やらせないよつー」」

シャルルとセシリアはすぐさま銃の引き金を引く。レーザーと実弾、2種類の弾丸がビーストドーパントに直撃するが、相手はビクともしないで、一夏に向かつて前進を続ける。

「だからやらせないって言つてるでしょ？　がー」

爪と青龍刀、つばぜり合になる鈴とビーストドーパント。だが、ドーパントは甲龍のパワーをものとせず、そのまま押していく。

「なんてパワーなのよ、ハイツはー」

弾かれた鈴はそのまま距離を取る。その間にもペーストは一夏に近づいていく。

「このままでは不利ですわね。一夏さん、壁を壊して外に！」

屋内であるここではHISの利点、飛べることが活かせないため、3人はペーストが入ってきた箇所から外に行く。セシリアの忠告に頷いた一夏も近くの壁を壊し、セシリア達と上空で合流する。

「で、どうするのよ？ 肝心な時に英治がいないみたいだし……」

「アーツの狙いは俺なんだ。だから俺がここに残つて奴の気を引くのが一番だろ」

「一夏、何言つてゐのー。一夏を放つておへわけにはいかないよ」

「そうですね。それにわたくし達がここから逃げると、他の皆さんが狙われる可能性がありますわ」

話し合ひの末、折れたのは一夏であり、皆でペーストと戦うことになった。そうは言つても、一夏の白式はブレードしか武装がないため、セシリ亞、鈴、シャルルが作った隙に攻撃をし、距離を取るヒット＆アウヒイの戦法を取ることにした。

「ぐわああああああああああ

「コマンダー同様に強化された仮面兵士の警棒が突きたたる。それから流れ出す電流に俺は苦しんだ。変身が解除されて、膝をつく。結構、ヤバいなあ……」

「くっ、何だ、こつちも急に強くなつて……」

あのミサイルの後、立ち上がった俺を待ち構えていたのは、また召喚された兵士達だつた。でも、召喚主が強くなつていたからか、兵士達も強くなつていて、俺は苦戦していたんだ。

「そろそろ、君のトドメとここいつか。君が倒れた後、そのメダルは有效地に使わせてもらうよ」

「まだ、諦めるもんか……手が届くのに伸ばさなかつたら後悔する、だから、できる限りでもいい、俺は、諦めない」

敵の数が多いなら、コレしかないな。手にした3枚のメダルを見て、俺はそう思った。それに、俺がここで倒れても学園には仮面ライダーはもう1人いるから。

ドライバーの両端に緑色のメダルを入れて、真ん中にも緑のメダルを入れる。そしてオースキャナーを手に取る。

「うわあああああああ

「一夏つー」

同時刻、一夏達もビーストに苦戦していた。連携でビーストを追い詰めるところまではよかつた。だが、ビーストの回復力を上回る攻撃がないのが決定的となってしまった。ISが相手なら最大の攻撃力を誇る白式もドーパント相手では十分に力を発揮できなかつたのだ。一夏の一撃は簡単に掴まれ、お返しにと重い一撃を食らつたのだ。解除される白式。倒れ込む一夏。彼に少しづつ近づいていくビースト。

「くそつ、ここまでなののかよ」

「そんなことはないぜ」

「」「」「...」「」「」

その場にいた誰もが、新たに現れた声の主の方を向いた。

「よつ、助つ人つてわけだな。後は俺に任せな」

見たことのない男の登場に誰もが不思議な顔をする。だが、男はそんなのを気にした様子もなく、ビーストの方を向く。

「あ、アンタは、誰なんだ？」

「ま、火野の仲間みたいなやつだな」

男、伊達明は慣れた手つきでドライバーを装着、右腕で弾いたメ

ダルを掴む。

「「変身！！」」

『クワガタ！ カマキリ！ バッタ！ ガタガタガタガタキリッバ！ ガタキリバ！』

違う場所にいるはずなのに2人の変身は同じタイミングだった。  
英治は歌と共に、昆虫系グリードのコアメダルによるコンボ、オ  
ーブガタキリバコンボに。  
伊達はカローンという音と共に、セルメダルの力で戦う、バース  
となる。

2人のメダルの戦士がここに参上した。彼らは自分の守りたいも  
のを守ることはできるのだろうか。

次回、ガタキリバ無双の気が……（笑）

黒幕的ポジションが財団Xだつていうのは、W最終回付近で、ファンサービス的につけてきたコアメダルが理由つてのは口が裂けても言えないぜ。まあ、財団はISのあの企業とも上手く絡めれると思つたのもありますけど。

感想、意見等お待ちしております、いや、ください（笑）

数の暴力と足止めと弟子入り（前書き）

Count the medals  
オーブが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## 数の暴力と足止めと弟子入り

「つまおおおおおおおおおおーー！」

雄叫びを上げる、俺。やっぱコンボは体に力が溜まつてくんなあ。

「ふん、今更姿を変えよつともこの数には勝てまい」

そう言つて相手は数十体の仮面兵士を召喚してくる。でも、このコンボなら数では負ける気がしないな。近寄つてくる仮面兵士に向かつて俺も走りだす。進む度に1人、また1人と俺は分身していく。

「はあーーー！」

降りおろされた警棒ごと敵を切り裂くものもいれば……

「セイヤツーーー！」

相手が攻撃する前に先手必勝とばかり「ミドルキックを放つやつもいる。

「ば、バカな……」んな情報、聞いてないぞ」

唚然とするコマンダーをよそに、ガタキリバと仮面兵士の乱戦は熾烈を極めていた。あちこちで繰り広げられる攻撃の応酬。火花が飛び散り、殴られ、蹴り飛ばされ宙を舞う仮面兵士達。ものの数分もしないうちに仮面兵士の数はかなり減つていた。

「くっ、これでどうだ！！

ドンッ、ドンッ！！

放たれたミサイルはあちこちに着弾し、黒煙をあげる。分身も何体か吹っ飛ばされたけど、まだ、大丈夫。

「つまおおおおおお

煙の中から走り出す影は3つ。1人目、2人目は両腕の刃で相手を切り裂き、3人目はよろめいた隙に飛び蹴りを当てる。そしてコマンダーが転がつていった方に残された仮面兵士も吹き飛ばされてく。

「くそつ、まだだ、まだ終わらんよーーー

そう言つコマンダー。だけど、かなりのダメージを受けたようすで、何度も立つともがくけど、立つことはできなかつた。

「悪いけど、これできめるから

何十もいるガタキリバはコマンダー達を囲み、一斉にオースキャナーを手にする。

『スキヤニングチャージー！』

「はあああああああああああああ

何重にも重なつた電子音声と一緒に飛び上がるガタキリバ。

「セイヤー——————！」

相手に断末魔をあげさせる」ともなく流星群のように、ガタキリバキックが叩き込まれていく。自分でやりすぎかもしないと思うけど、友達のピンチだから。

爆発を背に1人に戻るガタキリバ。ちゃんと1人に戻った。

「さてと、一夏のところ……」

フラツ、そういう感じによるめく俺。久々にこれやつたからかなあ、座り込む。最初に使つたときは倒れたんだつけ。

「……って、昔を思い出してる場合じゃないでしょ」

そう思つたから、ライドベンダーを一端自販機の方にして、赤い缶と縁の缶をいくつか出す。プルタブを開けると、赤いのはタ力に、縁はバッタのになる。

「じゃあ、一夏と伊達さん、それから織斑先生のところによりしくね

通信器として使えるバッタカンをタ力カンに運ばせる。もちろん、自分の手元にも1つバッタカンを残すのを忘れないで。

「じゃ、俺も急がないと」

ライドベンダーをバイクの形態にして、アクセルを切る。皆、無事でいいくれよ。

「仮面…ライダー？」

伊達が変身したバースを見て一夏は眩いた。

「おう。仮面ライダーバース。ヨロシク」

一夏に向かつてサムズアップをした後、バースはビーストと向き合つ。

「さあて、いっちょ始めますか」

構えたバースバスターの引き金を引くが、相手はそれをよけ続ける。

「もうつたあ！」

「おおつと」

ビーストの一撃を転がつてかわし、バースバスターを撃つ。怪人と戦うための武装であるためか、与えられたダメージはISのものより大きいのは一目瞭然だった。

「がつ……少しば効いたぜ。だがよ、この程度！」

すぐさま回復するビースト。バースは「げつ！」と声をあげるが、すぐに気を取り直して銃を構える。

「これでもくらつてな！」

再度、連射するが、楽に回復できるダメージだとわかつたビーストはそのまま前進してバースバスターを弾き飛ばした。

「コイツ、すげえパワーだな」

「つて、何番氣なこと言つてるんですか！？」

関心したような口調のバースにすかさず突っ込みを入れる一夏。バースは「わりい、わりい」と謝るような仕草をするのだった。

「コイツで頼むぜ」

『ショベルアーム』

バースの左腕に装着されたそれは、バースの武器の中で最大のパワーを誇るため、怪力のビーストに対しては最も適した装備なのであった。

「フン、何を使つたつて無駄だぜ」

そうとも知らずにビーストはバースに接近。拳を繰り出そうとするが、ショベルアームのクローラーに掴まれる。

「おりやあああああああああ

そのまま掴んだ腕を軸に、ビーストを振り回すバース。そして、そのままビーストを地面に思いっきり叩きつけるのであった。さすがにコレは効いたのか、空氣を吐き出すビースト。だが、持ち前の生

命力によつて再び立ち上がるのであった。

「「「いや、もうアレしかないな。おーい、嬢ちゃん達！ とつてお使いから」」イツの足止めしといてくれ

「「「えー？」」

「頼んだぜ」

セシリ亞達の返答を聞く間もなく、バースはメダルをベルトに入れていく。

『ブレストキヤノン』

『セルバースト』

「もうこいつちよー！」

『セルバースト』

「ああ、もう！ やるしかないわね」

「わかりましたわ。シャルルさんもよろしいですわね？」

「うん、大丈夫」

シャルル達はすぐさま、銃の引き金を引き、次々とビーストに銃弾を浴びせていく。レーザーがかすめ、衝撃砲が相手を弾き飛ばす。追撃にと、アサルトライフルが浴びせられる。

「ぐ、がつ！」

『『えれるダメージは大したことはないのだが、連續攻撃に回復に専念してしまうビースト。』』

「まだまだあ！」

『『セルバースト』』

鈴達が攻撃を浴びせていく間もバーストはセルメダルを入れ続ける。そんな様子を見た一夏は『『S』』が解除されている自分にもできることがないのか周りを見回す。

「あれは…」

一夏の目に映ったのはすぐ近くに飛ばされていたバーストバスター。皆を守りたいと願つ彼はすぐさまそれを手に取り、引き金を引く。

「うわああ！」

「ん、があああ…」

反動に弾き飛ばされる一夏だが、放たれた弾丸はビーストの顔面に命中し、その動きを妨げるのに充分に役に立つたのだ。

「よし、サンキューな」

セルメダルを何枚も入れて、かなりのエネルギーを貯めたブレストキヤノンを向ける。ビーストは一夏の一撃の当たりどころが悪かつたのか、足を止めていた。

「ブレストキヤノン、シユート！」

バスが後ろに押される程のエネルギーの流れに飲み込まれたビーストは断末魔をあげ、爆散する。

「ふう、終わった。お！」

変身を解いた伊達の元に飛んでくるタカカン。タカカンは上空で旋回して、伊達の手元にバツタカンを落とす。

『伊達さん！ そろちに怪人が出ま世んでしたか！？』

「おへ、そこつなり今せつを廻したといだ。見たといだら無事のよ  
うだぜ」

『そうですか。よが二たあります』

伊達と英治が話している頃、一夏の元にもタカカンが来たか、夏はバッタカンの使い方が分からず四苦八苦していたのだった。

「改めて、バース装着者兼この保健室の先生の伊達明だ。ヨロ

シクな

「 」 「 」 「 」 「 は 」 「 」 「 」

「 惑つ 一夏達をよそに伊達は話を続ける。英治も合流して一行は保健室に来ていた。

「 一夏ちゃんだつけ？ お前も相当な無茶をするやつだな。いきなりそれを使うなんて」

「 あ、アハハハ……すみません」

「 ま、気にすんなよ。おかげで相手に好きができたからな」

伊達はそう言つてその時のこと思い出す。歯を守りつつとして行動する姿勢、目。行動が無茶であると言えればそうだが、誰かがしっかりと鍛えればまっすぐ育つ。伊達はそう思つた。

「 お前ならコイツを託してもいいかもしんねえな」

「 コイツ、ですか？」

「 お、一夏ちゃん。俺が鍛えてやるつか。エレジじゃないけれどな」

伊達は続ける。お前は怪人にも狙われる可能性もある。今回は自分がいてよかつたけど、いつもそうとは限らない。一夏自身が怪人に対抗できる力があつた方がいい、と。

「 ……お願いします！ 僕を鍛えてください」

少しの間の後、一夏は答えた。誰にも傷ついて欲しくない。英治と同じような願いを持つ一夏は自分のせいで誰かが傷つくのは嫌だからである。

「OK。じゃあまずはコレからだな」

取り出したのはバースバスター。

「それって伊達さんの武器じゃ？」

「気にするな、一夏ちゃん」

伊達の武器がなくなる。そう思つて一夏は聞くが、首を横に振られた。

「伊達さん、まさか……」

「おう。火野の思つてる通りだ。『イツもベルトもつあるからな

「ベルトが2つついて』とは一夏さんも変身するんですねの？」

「え、一夏が……」

セシリシアと鈴。一夏に恋する少女はその光景を思い浮かべる。自分がピンチになつたときに颯爽と現れ、敵を倒し自分を守ってくれるヒーローを。

「「……はふう／＼／＼」

「ど、どうしたんだ、2人とも」

「さあ。急に悶え出したけど、何を考えたんだい？」

「まあ、そつちは大丈夫だ。じゃあ一夏ちゃん、今日はゆっくり休みな。特訓のことは後で教えてやる」

「はいー。」

気のいい返事をした一夏は皆と一緒に寮に戻ることに。今回の件の報告等は本人達の疲労も考えて後日に回されたのだ。保健室にいたのも念のための診断だったからもある。

途中でセシリアと鈴と別れた一夏、英治、シャルルは自室に戻る途中だった。ちなみにシャルルは英治がいる方の部屋が割り当てられたのだった。

「うーん、皆を守りたいと思つけど、俺にできるのか？」

「大丈夫だよ。一夏が皆を守りたいって想いをなくさない限りはないよ」

「英治、シャルル。ありがとな。俺、頑張るよ

頑張れよ、一夏の欲望は一夏にしか叶えられないから。

## 数の暴力と足止めと弟子入り（後書き）

自分で書いていて、これがISとのクロスものと忘れそうな回だった（笑）

とりあえず、伊達さんと一夏が接触。これがやりたかったことの1つですね。まあ、伊達さんを出すにあたり、後藤さんポジが欲しかったからもありますけど。今後の一夏は予測がつくと思いますが、念のために『バースはずっと伊達さんでいきますから』

意見、感想等お待ちしております。

## シャルル先生と挑発と危ない疑惑（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## シャルル先生と挑発と危ない疑惑

シャルルが転校してきてから、数日。シャルルも一夏のE.Sの特訓に付き合つようになつて、一夏の動きは日に日によくなつていくのがよくわかる程だつた。多分、シャルルのわかりやすい説明と、伊達さんとの特訓により体力がかなりついてきたのが理由だと思うんだ。まあ、そんなこんなで今日もE.Sの特訓つてことでアリーナに来ていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんと勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかってるつもりだつたし、伊達さんは感覚でやつていけつて言つてたんだけど……」

今日もシャルル先生の講義が開かれていた。俺も一夏も射撃武器はないからね。どうしても把握できないところはあるからな。厳密に言つと、遠距離攻撃（クワガタの電撃etc）が可能な武器はあるけど、銃火器じやないからわからないんだろうな。

「瞬時加速の場合は方向を変えない方がいいよ、最悪の場合は

」

シャルルのレクチャーは続く。一夏が言つにはシャルルの教え方が一番わかりやすいんだつて。まあ、擬音だらけの篠ノ之さん、理路整然とはしているんだけど、イメージしづらいセシリ亞、「何となく」とか「感覚で」等の鈴。それと比べて……比べなくとも教え方は上手だな。あの3人もシャルルの教え方は上手いって認めているんじゃないかな？

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやつたのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だと書つのかしら?」

あれ、すつしぐ納得していないつて顔だよ。一夏もわからないならはつきりそう言つた方がいい時だつてあるのに。

「一夏め。どうして幼馴染の私ではなく、『ユノアなんだ』

「ちょっと待ちなさいよー。一夏の幼馴染はあたしよー。」

「お、幼馴染だからって一夏さんのパートになる理由はありませんわよー。」

気が付けば、打鉄▽ブルー・ティアーズ▽甲龍に……つて、こんな人が多い場所じや戦つちゃ駄目でしょー。俺、一夏、シャルル、と男子3人見たさで来てる人が多いんだから。一夏なんてさつきから何回も周りの人とぶつかつてるんだし。

「ちょっと、ちょっと、3人とも、落ち着いてよー。」

「む、英治か。なぜ止める?」

「そりですわ、邪魔しないでくださいむかしりへ。」

「邪魔するんだつたらあんたも相手にしてあげるわよ」

視線だけで人が殺せる世界だつたら何人も殺せそうな田で俺を見てくる3人。だから落ちついてつて言つてるでしょ！

何とか説得の末、3人の正面衝突は避けたんだけど、問題が1つできたんだ。それは……

「いひなつたら誰が一番一夏さんのコーチに適しているのか英治さんに選んでもらいましょう」

「いいわ。あたしが勝つに決まってるんだもの」

「そんなわけはないだろ？ 私が一番だ。一夏との訓練も一番長くやつてるからな」

自分が一番だと思い込んでる3人娘。これつてはつきり言つてい場合だよね……。

「俺はシャルルの教え方が一番上手いと思つてるけど……」

「……な！？」

絶句する3人。すぐに再起動して「それはどうこう」とか「納得のいく説明を要求しますわ」等言しながら俺を揺さぶつくる。ブンブンつて音がするほど振られたからかなあ、気持ち悪くなつてきた。ウブツ……。

「そ、そんなこと言つならお互ひの説明を聞きあつてよ。そ、それから……そろそろ離してくれないかな……」

「……あ……」

バタンッ！

「ゲホゲホ、死ぬかと思った。とりあえずお互いの説明を聞きあつていた篠ノ之さん達は再度衝突していた。

「篠さん、あなたの擬音だらけの説明では全くわからないですわー。」

「そういうセシリアのだって、具体的過ぎてイメージじづらこのよ

「だったら鈴のだって、感覚だの、で伝わらないぞ」

いつの間にか名前で呼び合いつ仲になつてたみたいだけど、『うなつたらビリビリようもないや。』そう思つていた俺に話しかけてきたのはシャルルだった。

「ねえ、英治。英治のライドオーブ<sup>アーロック</sup>にも射撃武器は無いんでしょ。使用承諾したから英治もやってみて」

「わかった」

そう言つて渡されたアサルトライフルを構えてみる。オーブの時も銃持つたのはあのコンボだけで、しかも必殺技のときしか使わなかつたからかな。慣れない感じだ。

「構えはいいね。じゃあ撃つてみて」

だれもいない方に向けて、引き金を引く。「バンッ！－！」って音がしたけど、思った程の反動じやなかつたなあ。続けて2発、3発と撃つ。「うん、こんなもんかな。銃の感覚を掴めた気がしたからシ

ヤルルに銃を渡す。ライドオーブも後付武装がないし。

「どう?」

「ん~、まあ、思ったより反動がないっていつかな。そんな感じだよ」

「エラで撃つからじゃないかな。どうしてそんなことを思ったの?」

高威力のバズーカを使ってたから、とはさすがに言えないよなあ。そう思つてここの言葉を適当に濁しておくことにした。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソつ、ドイツの第3世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いていたけど……」

銃の話からシャルルのエスについて話していたとき、急にアリーナが騒がしくなつたんだ。何があつたのか気になつて、女子達の視線の先を見ると、黒いエスを纏つているボーデヴィッヒさんだつた。

「おい、貴様も専用機持つだすだな。ならば話は早い。私と戦え」

俺も含めた周りの人間は眼中になつて感じに一夏に告げるボーデヴィッヒさん。一夏は理由がないから断つている。

「貴様にはなくとも私にはある

一夏を睨みながらボーデヴィッヒさんは言った。理由があるのか、どんな理由だろ?

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の異形をなしえただろう」とは安易に存在できる。だから、私は貴様を 貴様の存在を認めない

ボーデヴィッヒさんの言う教官って織斑先生のことだよね。大会2連覇は一夏がいたからできなかつた。つてことは一夏に何かがあつたからその大会で優勝できなかつた。でも、それがどうしてボーデヴィッヒさんが一夏の存在を認めない理由になるんだ? 一夏本人なら何か心当りがあると思つて見てみると、何か心当りはあるみたいだつた。けれど、俺が簡単に踏み入つていいことでもないのもわかつた。一体、何があつたんだ。

「また今度な」

ボーデヴィッヒさんの挑発には乗らず、あくまで理由がないとする一夏。でも、ボーデヴィッヒさんはその態度が気に入らなかつたのか、左肩に大砲を展開する。

「ふん、ならば 戦わざるを得ないよにしてやる

そう言つなり、引き金を引く。俺も、一夏もそれに反応できなかつたけど、1人は違つた。

ゴカギンッ!

鈍い音をたてたのは割り込んできたシャルルのシールドだつた。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はすごいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……フランスの第2世代型<sup>アンティイーク</sup>」ときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第3世代型<sup>ルーキー</sup>よりは動けるだろうからね」

アサルトカノン ガルム を向けたままシャルルは挑発する。お互いに涼しい顔をしたままの睨み合いが続く。シャルルの武器の展開の速さには驚いたんだけど、今はそれを気にしているときじゃないから。いつでも動ける準備をしておく。多分、シャルルはここで戦うつもりはないんだろうけど、もしものためには。

『そこの生徒！ 何をやつている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけて現れた先生の声が響く。相手が教師だったからなのか、ボーデヴィッヒさんは興を削がれたように帰つていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

さつきの睨み合いのときとはつて変わり人懐っこい顔でシャルルは一夏の無事を確認する。時間も時間だから、今日は終わらつてことになつてアリーナに戻ることにしたんだけど……

「たまには一緒に着替えようぜ」

一夏のこの一言がまた騒動の原因になつたのだった。確かにシャルルは人前で着替えるのを嫌がつてゐるけど、誰かと一緒に着替える必要もないと思つんだけど。あ、そう言えば寮の部屋でシャワー上がりにパンツだけで過ごしていたら顔を赤くして目をそらされたなあ。他にも不自然つてこいつか違和感を感じることもあつたけど、ま、いつか。

「ほ、僕はエリの点検があるから先に行つていいよ

「そのくらくなら待つわ。一緒に着替えに行こぜ」

「い、イヤだよ。といつがぢつして一夏はそんなに僕と着替えたがるの？」

「じゃあ何でシャルルは俺達と着替えるのが嫌なんだ？」

あれ、一夏つてあつち系の人だつたの？ どう見てもそうにしか見えないんだけど……。まさか、僕とシャルルが同室になつたのは一夏がそっち系だつたからなのか！？

その後も一夏のしつこいアプローチは続く。周りからは「織斑君つてそつちの趣味だつたんだ……」とか「ぢつりで篠ノ之さんやオルコットさんのアプローチを気にしないわけね」、「今年のネタは織斑君×……」と言われたい放題で、正直一夏から距離を取つたほうがいいのかなと思うくらいだつた。そんなことさせておき、そろそろ助け舟出した方がいいよな。

「とにかく一夏、周りを見てみた方がいいよ。ひどいことになつ

てるから

「周りって何かあるのか……」

ここで始めて一夏は自分にBL疑惑がかかっているのに気づいた。慌てて否定する一夏だけど、もう遅い気が……「今年のネタは……」って言ってた人は「インスピレーションキター————！」って宇宙服みたいなライダーの真似してどつか行っちゃつたし……。ドンマイ、一夏。落ち込む一夏を引きずりながら更衣室に向かった俺だけど、山田先生から大浴場が使えるって聞いて復活した一夏に引いたのは余談かな。

続く。

## シャルル先生と挑発と危ない疑惑（後書き）

原作のこの部分でも一夏つてホの字かと思い込んだ時期が1時期ありました。果たして一夏は汚名返上できるのか！？ え、できない。

メダルを手に入れるタイミングが中々見つからなくてシャウタとかサゴー<sup>ゾ</sup>を出すタイミングが見つからない。一夏達との模擬戦が初登場つてことだけは避けたいと思っている今日この頃。後、今さらですが前書きの部分に「前回までの3つの～」ってあった方がいいのでしょうか？

それでは意見、感想等お待ちしております。

データと眞実と自分のやりたい」と（前書き）

Count the medals  
オースが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## データと眞実と自分のやりたい」と

「英治、ちょっと、いい……？」

山田先生からの大浴場が使えるよになつたという知らせを受けた俺達は寮に戻ろうとした。けど、一夏は何か書かなくちゃいけない大事な書類があるって連れて行かれたんだ。で、シャルルも中々更衣室に来る気配も無かつたから寮に帰ろうとしたところ、簪に呼び止められたんだけど、何だろ？

「いいけど、何かあるの？」

「クリと頷く簪。どうやら簪は自分のIISを作るためにライドオーブの稼働データが欲しいみたいなんだけど、何に使うんだろう？」

「……伊達さんの、バースをIISにしたい……だから、英治のIISが一番参考になる」

「いいけど、バースつてことはドリルとか作るつてことなの？」

「……うん。今度の学年別トーナメントには、間に合わないかもしれないけど……」

「わかった。で、いつデータを渡せばいいの？」

「英治がいいんだつたら……今すぐが、いい」

今か……特に断る理由もないし、それでいいかな。そう伝えて、

早速簪に着いていく。

「あれ、英治、何かあるの？ それにそつちの子は？」

途中シャルルとすれ違う。じつやう今から部屋に行くみたい。

「うん、ちよっとね。」<sup>ヒツヒツ</sup>更識簪

「よろしくね。」<sup>ヒツヒツ</sup>簪

「……よろしく

「じゃあ俺達は行くから。後でね」

シャルルと別れ、整備室に向かう。さてと、ビのくらいかかるのかな？

「で、俺は何をすればいいのかな？」

作業を始めた簪に聞く。俺がやつたのはライドオーブを見せただけだし。話を聞くと、ISの素体はできているけど、武器、それにベースを再現したときの立ち回りの参考となる、データがないんだって。立ち回りは伊達さんに聞いた方がいいと思ったんだけど、伊達さんに聞くと仮面ライダーベースとしての立ち回りでISには参考

にならない可能性があるんだって。それ以前に大雑把な伊達さんに聞いて必要な情報が手に入るのか疑問だけど……。それで、仮面ライダーでもありエスも使える俺のデータが欲しいってことになったのか。

「で、何かわかった？」

カタカタとキーボードを打つ簪に聞く。簪は暇そうな俺にとある画面を見せてきた。

「……これ。まだ、使つてない頭が4つ、腕は4つ、脚は5……どういふこと?」

簪が見せたのはライドオーズのパーティ一覧の表だった。使つてないメダルのものはシルエットだけで何もわからないけど。ん、おかしいな使つてない頭はサイにシャチにプロテラ。腕はクジャク、ウナギ、トリケラ。脚はゾウ、コンドル、タコ、ティラノのはずなんだけど、1個多いぞ。俺が知らないメダルもあるのか? でも、紅さんは赤、黄、緑、白、青のコアメダルがこの世界に流れてきたって言つてたけど。

「そのデータはオーズの他のメダルのやつだけ、俺が持つてないやつだね。と言つても、存在を知らなかつたのがあるみたいだけど……」

「組み合わせは $7 \times 7 \times 7$ の、343通り……?」

「違うよ。1つは他の色のメダルとは組み合わせれないのがある。知らないメダルが他の色のと組み合わせれるんだつたら217、組み合わせれなかつたら127通りだね」

「……多過ぎ」

「あはは、確かにね。オーズでも使わなかつた組み合わせがあるからね」

「……よく使つたのが、その、コンボ?」

「そうだね、反動で結構疲れるけど」

作業自体は簡単に済むみたいだから、雑談をしながら進めていく。30分くらい経つと、データの「ピー」も終わつたのでお開きとなつた。

英治とシャルルの部屋ではシャルルが1人いた。英治が簪とビニカルに行くのを見て、自室に戻つてきたわけだが、特にやることもなく一息つくだけだつた。

「英治は遅くなるみたいだし、シャワー浴びよつ」

一休みを終えたシャルルは着替えを手に取つてシャワー室に入つた。

(そういうえば、昨日、英治がシャワーについて何か言つてた気がしたけど……いいや)

たたしまー

自室に戻つてみると、そこにシャルルの姿はなかつた。あれ、い  
ないのか？ そう思つて周りを見るにシヤワー室から水音がするの  
に気がついた。あれ、そういうば石鹼が切れていたよね。まあ、伝  
えたから大丈夫かな。そう思つた俺はベッドに飛び込んだ。「んー」  
と背伸びしながら心地よさを堪能する。さすがに汗をかいた後に寝  
る気にならないし、夜ご飯もまだだから眠りはしないけど。

ガチヤ

ドアが開く音がした。多分シャルルだな。そう思つて体を起こす。

「ん？」シヤルル上がつたの？」

え、え、英治……？」

出てきたのはタオルを体に巻いたシャルルだった。でも、男ならふくらむはずのない部分がふくらんでいる状態で。あ、綺麗な肌だな、って、そうじやなくて。

「え、英治。お、お、落ち着いて……」

なぜか大声で叫んだのは俺だった。慌てた様子で俺の口に手を当てるシャルル。ちょ、どういうこと、これ？誰か答えて……アレ、息が……って、前もこんなことなかつたっけ？もう限界。バタンッ！

「え、英治……」

それから俺が意識を取り戻したのは30分くらい後のことだった。

「で、一体どうこうことだつたの？シャルルが男装していたってことはわかつたけど、いいんだつたらどうじてそうしていたのか教えてくれない？」

「それは、その……実家からわざわざつて言われて……」

「実家つていうと、デュノア社だつけ？」

「そう。そこの社長が僕の父。その人からの命令なんだよ」

命令？どうして家族がそんなことを？それにどうしてシャルルは家のことを話すと表情が暗くなつていくんだ？

「どうして家族が命令なんかするの？」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

「…………」

その瞬間、俺はシャルルになんて言えぱいいのかわからなかつた。同情して慰める？ 違う。シャルルは同情して欲しいとは思つてないはず。じゃあ、元気づける？ それも違う気がする。元気づけようと言葉をかけても、それは軽いものにしか見えない気がするから。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなつたときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする内にIIS適性が高いことがわかつて、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやってたんだ」

その後もシャルルの話は続く。父と会つた回数が少ないこと。父の本妻と会つたときの衝突。そしてデュノア社が経営危機になつたから廣告塔、そして俺と一夏のIISデータを得るためにIIS学園に來たこと。淡々と乾いた口調で話すシャルルだつたけど、俺は煮え切らない思いで聞いていた。俺が簡単に口を出せることがじゃないのはわかつてゐるけど。

「とまあ、そんなどころかな。でも、英治にばれちゃつたから僕は本国に呼び戻されて、デュノア社は他の企業の傘下になるか、……倒産だらうね。どのみち今までのようないかないけど、僕にはもうどうでもいいことかな」

「…………」

「話したら気が楽になつたよ。それに、今までウソついてゴメン

「深々と頭を下げるシャルル。でも、俺はそんな態度にモヤモヤした感情が浮かんでいたんだ。

「本当にそれでいいの？」

「え……？」

「だからそれでよかつたの、そう聞いているんだ。ただ親の言つことを聞いて、ウソがばれたからどうでもいいや。それでいいの？」

「え、英治？」

戸惑う様子のシャルル。彼女のそんな様子に構わず俺は続ける。

「親が言つてたからそつしなくちや駄目なの？ シャルルはそれでよかつたの？」

「僕にはどうしようもないから、いいも悪いもないよ。どうせ僕がどうなるのかも時間の問題だらうし……」

「じゃあシャルルの欲望は何？ ビラしたかったの？ 父親の言いなりがよかつたの？ それがいいなら俺は何も言わなこい」

「よくわけないだろ！……でも、僕には、どうしようもなかつたんだ！」

田に涙を浮かべながらシャルルは叫ぶ。溜めていた思いが溢れてきたのか、その涙は止まる気配はなかった。

「大丈夫。今ならじうじょうもあるや。」J.J.学園はあらゆる國家や組織の影響は受けない。だから時間は卒業するまである。それに俺でよかつたら力を貸すよ」

「いいの? 僕は英治を騙していたんだよ」

「誰かを助けるのに理屈はいらなこせ。それに俺は自分の手が届くんだつたら手を伸ばす。届かなかつたら誰かと手を繋いで伸ばす。とにかく後悔だけはしたくない性格だからね」

「ははつ、何それ。でも、元気がでたよ。あつがとう

さう言つてほほ笑むシャルル。さう今までとは違つて本心から笑えてるみたい。

「やつとで笑つたね。さつちの方が可愛」と思つよ」

「え……／／／」

可愛いつて言われたからか、顔を赤くするシャルル。その反応を見ると、言つた自分も気恥ずかしくなつたくる。

「ま、まあ、どうするかはシャルル次第だからね」

「へ、うん。さつするよ」

妙な気まずさが襲つ。いつこうとあつてびついたらいいんだ?

コンコン

۱۰۰

「英治、シャルル。飯食いに行」つぜ」

いきなりのノックに慌てる俺達。

一入るせー

「おおお落ち着いて、まずは身を隠して……って、クローゼットじやないって！ ベッドの方がいいよー。それで布団をかぶつて。後は俺が何とかするから」

ガチヤ

「一夏、ご飯だけどシャルルの調子が悪いみたいだから俺は後で行くよ。ゴメンね。俺達に構わぬ先に行つて」

「お、おう。わかつた。シャルルによろしく言つといてくれ」

「うん。じゃあ後で

一夏が去つていいくのを見送つてドアを閉める。ふう、何とかなつたな。俺もそろそろお腹がすいたな。シャルル、ご飯食べに行こうつて、俺が具合悪いことにしちゃつたんだつた。シャルルが迂闊に部屋を出るわけにいかなくなつたな……

「『メン、やつこつわけで何か取つてへるよ。何がいい?』

「何でもいいよ」

何でもいいが一番困るんだな。そつ脱つて部屋を後にした。

「ただいまー」

「あ、おかえり」

部屋に戻つてぐるなり、シャルルに焼き魚定食が乗つたトレイを渡す。

「あつがとう」

「こり笑つて受け取るシャルルだったけど、トレイを見るなり固まつた。何かあったのか?」

「どうしたの? 嫌いなものでもあつた?」

「べ、別にやつじやないんだけど……。い、いただきまや

ぎいちない表情で箸を持つ。魚をほぐす、そのままではよかつたんだけ……。

まひ、まひ

「あつ……」

どうやらシャルルは箸が使えないみたいだった。そういうえば、シャルルが箸を使ってるの初めて見る気がするし……

「ゴメン、スプーンでも持つてくれるよ」

「ええつ！ 悪いよ、そんな。これで頑張ってみるか？」

俺の問いかに答えを詰まらせるシャルル。そんなに気を使つこともないのに……

「別に気にしなくていいよ。それで食べるの難しいでしょ？」

「それには、シャルルはもっと誰かを頼つた方がいいと思つよ。甘えることでも何でもいいからさ」

「ううつ……じゃあ、英治……」

ためらつてを見せた後、シャルルが出した答えは俺を驚かせるのに充分だった。

「え、えつとね……英治が食べさせて」

上田遣いで俺を見てくるシャルル。あ、まつげ長いな……って、そんなことを考へてる場合じゃなくて……俺がシャルルに食べさせれる？

「だ、ダメかな……？」

まあ、誰かに甘えるとか言つたのは俺だけや。それこの上田遣いは反則だと思つんだけ……

「……わかつたよ」

結局折れたのは俺だつた。箸でご飯をつまむ。

「じゃ、じゃあ、あーん

「あ、あーん」

もぐもぐと口を動かすシャルル。食べてる様子を見て小動物みたいだな、とか思つたけど段々と気まずくなつてきたから口数は減つていつた。すつごく恥ずかしい／＼

お互に恥ずかしかつたのか、その後は口数も少なく眠りについた。

## データと眞実と自分のやりたいこと（後書き）

ええ、次回からかなり原作をぶつ飛ばした展開になる予定です。まあ、新キャラがでます。オリジナルの。といつか、次回の話自体がぶつ飛んでる展開になる気がするんです。まあ、そこは新キャラに頑張つてもらつとしましょう。

それでは、意見、感想等お待ちしております。

## Ride on Rington time (前書き)

Count the medals  
オーブが使えるメダルは…

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

(……………ひつひつなつたのだ)

ある日の朝、篠は窓際の席でそう思に悩んでいた。諸君は覚えていだらうか、篠が一夏に「付き合つてもらう!」。そう宣戦布告(?)したのを。そしてそれが布仏本音に知られ曲解の末、今度の学年別トーナメントで優勝した人が一夏と付き合えるつてなつたのを。その噂の真相をするため、セシリア、鈴はおろか別クラス、他学年から次々と1・1に押し寄せてきたのだ。鈴も別クラスでだけど……

「なあ、英治。さつきから俺の名前がちらちら聞こえてくるけど、何だらうな。聞こいつとしても女子にばぐらかされるし……」

「いや、そつは言われても。俺の予想の範疇を超えていたつていうか……正直、俺にもよくわからんんだけど……」

「僕にも何が何だか……」

クラスを見回すと篠ノ之さん who が何かに耐えるように震えていた。何にだろ? 考えてもどうしようもないでの席に着く。今日の受業は何だったかな。

放課後。一夏は今日も特訓があるみたいでアリーナに行こうとしていたけど、それを呼び止める。大事な話があるからね。

「ゴメンね、一夏。話があるのは僕なんだ」

シャルルを含めた3人で、寮の自室に来る。ここなら少しあのうかに聞かれる心配はないだろうからね。

「話つてなんだ？ そんなにかしこまらなくて……」

「いいから聞いて。僕はね、一夏達に大きなウソをついてたんだ。僕はね、女なんだよ」

「え？」

シャルルは俺にしたのと同じ話をする。違うのは俺にしたときよりも悲観的でないこと。話を聞く一夏の表情が重くなり、握った拳が震え出す。

「謝つてすむ」とじゃないのはわかつてゐるけど、ホントにゴメンな

れい

頭を深く下げるシャルルに対し一夏の答えは……

「いいよ、そんなこと。シャルルはそのことを悪いって思ってるんだ。なら、俺は何も言わないさ。ま、どうしようもなかつたとか、どうでもいいってまだ言つんだつたら黙っちゃいなかつたかもしれないけどな」

「……一夏」

「困ったことがあるなら俺にも言つてくれよ。友達を助けるのに理由はいるからな」

一夏がそう言つと「ふふ」つてシャルルが笑つた。

「え、どうして笑うの？」

「だつてね、英治と同じ言つんだから」

一夏にも謝つたからか、スッキリした表情でシャルルは言つた。  
一夏はホントにいい奴だな。だから皆惹かれていくんじゃないかな。

その後、シャルルが女子だつてバラすわけにもいかないから皆で協力して隠すこととした。この後は時間もあるし、一夏の特訓をすることになった。まあ、俺も特訓しなきゃ怪しいけどね……

「「あ」」

鈴とセシリ亞、2人揃つて間の抜けた声を出してしまつ。2人がいるのは第3アリーナ。大方、今度の学年別トーナメントに向けての特訓だろう。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

火花を散らす2人。学年別トーナメントでも、一夏を巡る戦いでも2人はライバル（？）なのだ。強敵と書いて友と読む。そんな言葉があるが、2人に、いやこの場にいない筈も含めれば3人か。とにかくその言葉を否定するであろう。周りから見ればお前ら、仲いいだろってなるが……

「ちょうどいいわね。この前の実戦のこともあるし、どっちが上かはっきりさせようじやない」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね。どちらがより強く、より優雅であるかはっきりさせようじやありませんか」

メインウェポンを呼び出し、構える2人。少しの静寂の後、動き出をうとした2人に邪魔をするものが現れた。

ドンッ

「「ー？」」

いきなり飛んできたのは1発の弾丸。緊急回避の後、鈴とセシリアが見たのは漆黒にISだつた。

機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』。登録操縦者……ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「……どういっつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

連結した双天牙月を肩に掛けながら、鈴は言った。セシリアも同様にいつでも戦闘に入れるような大勢をとっていた。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……ふん、データで見たときの方がまだ強そうではあつたな」

挑発的な物言いに来るものがあるセシリアと鈴。ラウラの物言いは自身から来ているものが2人にはわかつたのだった、だからこそ2人はその鼻つづらを折つてやりたいとも思つていたのだ。

「何？ やるの？ わざわざドイツからくんだりからやつてきてボコられたいなんて大したマゾつぶりね。それともジャガイモ農場じやそういうのが流行つてんの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじめるのは可哀想ですわよ？ 犬だつてまだワソと言いますのに」

「はつ……口は一人前のようなだな。だが、2人がかりで量産機に負ける程度の実力しか持たぬものが専用機持ちとはな。よっぽど人材不足とも見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

「ぶちつ！」

挑発が逆にし返され、2人はついにキレた。自国をバカにされて黙っているわけにもいかないし、何よりこの2人はラウラ・ボーデ

ヴィッヒという人物が気に入らなかつたからだ。

「……セシリ亞、どつちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ。そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが  
……」

「はつ！ そんな下らないことなんて決めずに2人がかりで来たら  
どうだ？ 下らん種馬を取り合つようなメスにこの私が負けるもの  
か」

「は」

この場にいない者、一夏を罵倒されて2人は我慢の限界だつた。  
そんなセシリ亞と鈴の様子も気にせずラウラは「来い」とだけ告げ  
る。

「上等ー。」

しかし第3アリーナでの戦いの火蓋は切つて落ろされた。

「あう……」

「くく、何なのよあの装備……」

アリーナにたどり着いた俺達が見た光景は想像を越えるものだつた。セシリ亞と鈴とボーデヴィイッヒさんが模擬戦をしている。これだけならよかつた。でも、現状はセシリ亞と鈴が完全にボコボコにされているところだつた。シールドエネルギーが0になつたみたいでISが解除される2人。それに対して、ボーデヴィイッヒさんは大したダメージを受けていないみたい……。鈴とセシリ亞の相性が悪いからつて口コまでになるものなのか。

「口程にもない奴らだ。お前達にもう用はない」

ジャキンと銃を2人に構える。ISを展開していない人にそんなことするなんて……。冗談にすらなんないよ。この行為は止めなくちや、そう思つてISを展開しようとする俺の隣を何かが通りすぎつていつた。

「おおおおおお！」

零落百夜を発動させた一夏の白式がボーデヴィイッヒさんのシュヴァルツェア・レーゲンに肉薄する。アレはISに対しては絶大な威力を発揮する。ボーデヴィイッヒさんも避ける様子もないから、必ず当たる。皆そう思つていたはず。でも、一夏は何もない場所で止まつていたんだ。

「な、なんだ!? 体が、くそつ……」

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない。……消えろ」

冷たく言い放つたボーデヴィイッヒさんはその大型カノンを一夏に

向ける。俺とシャルルが何らかの行動を起こそうとしたとき、引き金は引かれた。

「ぐああああああああ

零落百夜の長時間の発動、今の直撃で元々のシールドエネルギーが少なからず白式は解除されて、一夏は鈴達が倒れている方に転がる。

「くわっ……」

「ふん、やはり私は認めるわけにはいかない。貴様が教官の弟であることを。その2人もろとも、消えろ」

再度、大型カノンを向ける。今の状態でそんなことされたら、命が危ないじゃないか。でも、そんなこと……

「させてたまるかあああああ！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！

「がつ……き、貴様」

不意をつけてのか、飛び蹴りを当てるに成功した。何とか照準をずらすことに成功した俺はそのまま構えを取る。

「これ以上やるなら、俺が相手になるよ」

「ふん、今更1人増えようと、何も変わらない」

「僕もいるよ」

アサルトライフルを構えたシャルルも英治の隣に来る。でも……

「シャルル、ここは悪いけど俺に任せて3人を守つていってくれないかな？ 見たところ大した怪我はしていないみたいだけど、ISは展開できないだろ？ から」

「そんなこと言って大丈夫なの！？ 相手は動きを止めることができるんだよ。多分、アレは認識した標的を止めるものだから2人でいつた方がいいよ！」

認識でか……だつたら尚更大丈夫だな。ホントは対人では使いたくなかったけど、ボーデヴィッシュさんの目を覚まさせてやりたいからね。

「大丈夫、切り札はあるから」

俺の目を見たからか、シャルルは頷いて一夏達の方へ下がった。それを確認した俺の手には2枚のメダルが……

「1人でいいのか？ あのブロンズのやつが言つたように2人がかりならどうにかできたかもしねないが？」

「ま、見ていてよ。君の間違った強さを止めてみせるから」

「ツ！ 私の強さが間違っているだと？ そこまで言つたら見せてもらおう。貴様の実力とやらを」

予想外にも少し同様したボーデヴィイッヒさん。彼女に対抗するために俺はタカとバッタのメダルを変える。

「いくよー。」

『ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラトラーラー！』

「あれは……」

「コンボですの……？」

「あの時の縁のとは違うみたいよね」

「コンボって……？」

「ふん、色が変わったところで何が……ぐつ」

ボーデヴィイッヒさんが言い終わる前に、トラクロード切りつける。ヒット＆アウヒイ。認識したものを止めるんだつたら、認識できないスピードで動けばいい。これが対策その1。

「は、速い。あれが英治のHSの力なのか……」

「変な歌は相変わらずみたいね」

「こつものがタトバ、この前のがガタキリバですと、今のはラトラーター……？」

「だからコンボって何！？」

離れたところで話している一夏達。でも、シャルルだけは話についていけないみたいで、ずっと説明を求めていた。無視というか、気づいて貰えてないみたいだけど……

「くつ、がつ……」

その間も俺の攻撃は止まない。一撃、一撃の威力は大して高くないが、反撃を許さない分、十分こっちに勝機はある。右から、左からと振り回されるボーデヴィッヒさん。でも、彼女は何かを狙つてみたいで、目を閉じていた。

「どんなに速かろうと、対処できないわけではないっ！」

俺が突っ込んでくるタイミングを計つていたみたいで、彼女が手を突き出した途端、俺は静止した。そのまま肩の大型カノンを向けてくるけど、手はまだあるから。

『ライオディアス発動』

黒いバイザ―が展開されて、ライドオーズは輝きだす。

「何つ…」

その眩しさから、目をつぶつてしまつボーデヴィッヒさん。その瞬間、俺の行動は自由になる。

『スキヤニングチャージ！…』

「ハツ、しまつた！」

ボーデヴィッシュさんが田を開けたころには、もう遅かった。3つの黄色い光の輪。それをぐぐる度に加速していくラトラーターを止めることはできなくて、両腕のクローナーでXの字に切り裂いた。

「まだだ！ まだ私は負けでない！」

一瞬で急所だけは外せたのか、未だに健在のボーデヴィッシュさん。でも、ダメージは少なからず「えられたみたいで装甲には多くの傷がついていた。

「行くぞ……！」

ガキンッ！

響き渡る金属音。ボーデヴィッシュさんの攻撃を受け止めたのは……織斑先生だった。

「……やれやれ、これからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

驚きの声を上げる一夏。そんな一夏も気にしないで、織斑先生は続ける。

「模擬戦をやるのは構わん。だが、こつも被害が多くなるのは教師として黙認しかねる。この戦いの決着は今度のトーナメントでつけてもらおうか」

「……教官がそうおっしゃるのなら」

不満気ではあつたけど、相手が織斑先生だったからか、ボーデヴィイッヒさんは頷いて去つていった。

「火野や、織斑達もそれでいいな？」

「わかりました」

俺達も頷く。その後、この事態は織斑先生によつてあづけられ、今後はトーナメントまで私闘は禁止という状況になった。

「あいつ、中々面白そだなア。潰しがいがあるぜ」  
「……好きにすればいい」

IDS学園、第3アリーナを遠くから見つめる者が2人いた。どちらも異形の姿をしており、狂氣を振り撒くのは茶色がかつたオレンジの蛇のような異形。一方の興味なさそうなのは紫色の恐竜みたいな異形だった。

「早速あの女でヤミーを作つてくるぜ」。祭りの始まりだア

「……ワース、程々にしろ」

「わアつてゐよオ、ギル」

2体の欲望の化身はその姿を消した。ワースと呼ばれたグリードの視線の先にいたのは先程英治に負けそうになつたラウラであった。

## Ride on Rington time (後書き)

怒られそうですが、オリジナルのグリードで、爬虫類と恐竜（幻獣？）を出しました。ぶっちゃけ最近思いついたので、この後どうなることや……

というか、シャウタ、サゴーヴ、タジヤドル出さず（）にポートティラ出たら物語が……未だにそれに対応したエGがどのタイミングで出るか半分未定なのに……

それでは、感想、意見等お待ちしております。

## 設定集？（前書き）

これを閲覧する前に22話を見ることをオススメします。  
9／28訂正。リトラーラーの技名を教えてくださったゲートゲー  
ー様、ありがとうございました。勝手ながらこの場を使ってお礼を  
させていただきます。

・ライドオーズ『ガタキリバ』

イメージはそのまま、ガタキリバのIS化。わかりやすいチート。能力はクワガタの電撃、カマキリソード、バッタレッジの脚力だが、コンボの特殊能力として無人機操作がある（イメージはガンダムXのGビット）。武装はガタキリバと同じ、操作も意識を集中させることもなく使えるが、シールドエネルギーの発生源は1つしかないため、展開できる時間には制限がある。まあ、よっぽどのことがない限り、大抵の相手は時間内に倒せるが……

必殺技は人型ビット含めた全機で繰り出すガタキリバキック。こんな試合で使つたら大半は操縦者へのダイレクトアタックになると思われる。

・ライドオーズ『ラトラーラー』

AIC、いや、ラウラに対するチート（？）。ライオディアスに高速移動で相手に認識させる感がゼロである。だが、その点からいくとビットの制御に集中力を使うセシリアキラーにもなると思われる。ガタキリバと違い、特筆する能力はない。だつてISはバイクに乗らないもん。」

というか、コンボつて大概チートになるが、誰かキラーにもなりそう。シールドバリア関係なしに堅いのや、水を操るのがあるし……

必殺技は黄色い光の輪をくぐりながら、刃を両腕のクロード切り裂く「ガッシュクロス」。

・メダル設定

クワガタ……電撃を放てるようになる。中距離攻撃の獲得。ライオン……ライオディアスが使用可能。要するに強力なめぐらまし。

- ・オリジナルグリード設定。

#### 『ワース』

爬虫類型のグリード。属性をつけるなら『地』だろうか。本来はガメルが大地らしいが、重力を操る描写しかなかつたため、砂等を操ることでいきます。メインの動物のモデルはコブラ。そのため、性格は龍騎の朝倉威をモデルとしてる。名前の由来は朝倉 暴れる壞す ワース。

#### 『ギル』

結局オーズ本編でははつきりしなかつたグリード。本小説ではオリジナルのグリードとして使わせてもらつた。属性か『氷』。ドクターのモデルがティラノ、映司がトリケラらしいので、モデルはピテラ。朝倉がワースなので、北岡をモデルにしようと思つたけど、カザリとかぶる気がしたから性格はよりクールで無口に、そうなつた。

このグリードだけ、存在している理由は昔はこのISの世界にもコアメダルはあつた。しかし、ギルによつて残りのコアは全て碎かれた。その後、ギルとワースは相討ちとして、メダルの状態で眠り続けた。そのため、世界の管理者からは認識されることはなかつた。ところが、別のコアメダルが流れてきた影響で復活。財団Xがコアメダルを狙い出したのは彼らのせいである。

- ・IG (imitation greed)

コアメダル1枚とセルメダルで誕生したグリードもどき。誰かの特定の欲望で生まれたといつよりも完全な自分を求めて他のコアメダルを狙う。

クワガタIG……クワガタのコアメダルで誕生。他のコアメダル（特に緑の）を求めて英司を狙つた。モデルは『剣』よりギラファアンデットのカラーで、武器を持ったクワガタヤミー。

ライオンIG……ライオンのコアで形成。ライオティアスが使用可能。モデルは『電王』のレオソルジャー。

## 設定集？（後書き）

とりあえず現時点での設定集。タジャドル等も能力設定は終わっているので知りたい人がいれば活動報告にでも載せようと思います。IGは他のライダーの怪人をモデルとしています。一応調べていますが、コンドル、ゾウ、シャチ、ウナギがモデルの怪人を教えていただければ幸いです。ちなみにクジャクは赤い銃撃手、サイは紅き救世主と戦つたのが予定です。

## 完成と暗躍とチーム結成（前書き）

Count the medals

オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## 完成と暗躍とチーム結成

「それじゃ、治療も終わりだ。よかつたな、3人共、大した怪我もなくてな」

場所は保健室。先程の戦いでダメージを負った一夏達のために来ていたんだ。伊達さんが言うには3人共、大したことはないみたいでシップを貼るとか、その程度で済むみたいだつた。

「別に助けてくれなくてよかつたのに」

「あのまま続けていれば勝つていきましたわ」

「いや、強がりはやめようよ。2人とも、俺達が着いた頃にはエス、解除されてたしね」

「」「う」

言葉を詰まらせせるセシリア、鈴。完璧に図星だつたね……

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我が大したことはなくて安心したぜ。ま、俺も人のこと言えないか……」

同じく、シップや絆創膏だらけの一夏が諫めるけど、2人はまだ強がりを言つていた。

「好きな人につっこ悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「わああああああーー」「

「ん?」「

シャルルの一言に取り乱すセシリアと鈴。頭に「？」を浮かべる一夏。これじゃあ誰かの一夏への想いは成就しないんだろうなあ。一夏は「シャルルのやつ何言つたんだ?」って顔してるし。

「はい、ウーロン茶に紅茶。とりあえず落ちついてね。一夏もウーロン茶でいいでしょ?」「

「ん、おひ。サンキュ」

「ふ、ふんつー!」

「不本意ですがいただきましょーつー!」

鈴とセシリアは受け取った飲み物を一気に飲もうとするけど、そうすると「「ゲホッ、ゲホッ」……むせるよ……って、遅かったみたい。

「そう言えば火野、更識が探していたぞ」

「簪が……?」「

「おひ、何でもヒヒが大体はできたらしくてな

簪のヒヒって、バースがモデルだよね。この前できるかどうかって言つてたのにもうできたの? そうだつたら凄いや。

- 1 -

「な、何だ？ 何の音だ？」

廊下から聞こえる地鳴りにも聞こえる音。『んんん』それが近づいてくるのを感じた俺と一夏は顔を見合させた。嫌な予感しかしないんだけどね……

ドカーンッ！ そんな激しい音をたてて、保健室のドアが吹き飛ぶ。そのドアが宙を舞う光景に目を奪われそうになつたけど、そのドアがあつたとこにはもつと恐ろしい光景があつたんだ。どこを見ても、手、手、手。とホラー系の映画にも使えそうな光景が繰り広げられていたんだ。

「織斑君」

「デュノア君」

「火野君」

冷静に考えればわかることだつたけど、なだれこんできたのは沢山の女子。状況を飲み込めていない俺達に女子達は1枚のプリントを突きつけてきた。

「なになに『今月開催される模擬トーナメントは、より実践的なものとするために、2人組みで行うこととする。ペアができなかつたら

「ああ、それまではいいから、とにかく一」

「私と組んで織斑君！」

「一緒に組んで、『ミュノア君』

「私と参加しよ、火野君」

「伊達さん、結婚してくださいー」

あれ、何か一つ違うの混ざつとなかった? 伊達さんも「嬢ちゃんがもう少し年が上だつたら婚えたけどな」つて、何普通に答えてるんですか? ?

「え、えっと…… (び、びしきよひ、英治、一夏?) 」

(落ちついて、としあえずシャルルは俺達のびっちかが組むことにしないといけないね。一夏、びつする?)

(ジャンケンか?)

(いや、俺はアテがあるから、一夏が組んでいこよ)

この間一秒。としあえずわざと手を打たなことじつひじと、行動を開始する。

「悪いな、俺。シャルルと組むことになつてる……

「『メンね、皆。俺も約束した相手がいるから

しーん、そつ一気に場の空気が静まる。悔しそうに去つていいく女子を目に、俺達はふつ、と息をつくのだった。

「ちよ、ちよっと。あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょ？ うがー。」

「いえ、！」はクラスメイトとしてわたくしと……」

「2人とも、悪いな。後で何でも言つて聞いてやるから！」は諦めてくれ

「一夏がそう言つた途端、2人の目がキュッペーンって光つたけど、氣のせいだよね。

「ま、まあ、そういうことなら仕方ないですわね」

「わ、わかったわ。その代わり後で覚悟しちゃなさいよ」

ねえ、一夏、ひょっとしなくても自爆したんじや……？

「ねえ、英治。僕は一夏と組むことになつたけど大丈夫なの？」

「ああ、気にしないで。俺にはアテがいるからね。それに下手に一夏を残すと厄介なことになりそつだつたからね」

「アハハ、ありがとね。氣使つてくれて」

「じゃあ俺は組んでくれそうなの所に行つてくるから

「うん、頑張つてね」

そう言つて保健室を後にする。さてと、簪はどこにいるのかな？

「くつ、火野英治……」

英治が簪を探し始めた頃、ラウラは一人、屋上に佇んでいた。思  
い浮かぶのは、自分の強さを間違つてると言い、自分を追い詰めた  
男。そのせいか、彼女は今、一夏は眼中になく、どうやって英治を  
叩き潰すか、が頭の中を占領していた。

「お前、オーズを叩き潰したいんだってなア」

「何者だ！？」

急に後ろから聞こえた声に慌ててラウラは振り向く。そこにいた  
のは、見たこともない男だつた。現役の軍人である自分に悟られず、  
背後を取つたことに警戒するが、男はそんなことを気にしないよう  
に続けた。

「だから、オーズ、いや火野英治を潰したいんだろオ？」

「ツ！」

火野英治、まさしく自分が倒そうとしていた相手の名前を出され  
てラウラは目の前の男がますます謎に思えてきたのだつた。

「その目、いい目じやねエか。お前の欲望、開放しちまいなア」

男、ワースはラウラにセルメダルを入れて去っていった。ラウラは自分身に一瞬違和感を感じ、見渡したが、男は既に消えていたのだった。

「せいぜい楽しませてくれよオ、オーズよオ」

ワースはラウラの中にいるヤミーの存在に期待しながら歩きだした。オーズが自分の相手にふさわしいかどうかを確かめるために。（しかしよオ、ギルの野郎が言ってたが、この世界には俺のど、ギルのしかコアメダルは存在してねエはずなんだが……まあ、考えても変わんねエか）

オーズが持つてるコアメダルの存在に疑問を持ちつつも、ワースの姿は闇に紛れたのであった。

「簪、いる？」

「……うん、いい……」

簪を探しに整備室に来てみると案の定いた。最後の点検でもあるのかな？

「早速だけど、俺を探していた用事つて？」

「……これが、できたってことと、……模擬戦の相手になつて」

模擬戦の相手、か。可動実験は大事だからね。俺はすぐにOKして、アリーナに向かうことになった。

「ねえ、模擬戦やるのはいいんだけどさ、一つお願いがあるんだけど？」

「……な、何……？」

「今度のトーナメント、俺と組んでくれないかな？」

「え！？」

急に驚いた顔の簪。俺、何かマズイことでも言つたのかな？

「べ、別にいいけど……私で、いいの……？」

「よくなかつたら頼まないよ。それとも、簪は俺とじや嫌だつた？」

ふるふると首を振る簪。ビツヤリといみたいだな。

「それじゃあ、よろしくね。それと、簪はもう少し自身持つた方がいいよ」

「……私は、あの人には適わないから……」

「あの人？ 誰のことだろ？ でも、その誰かと比べて、自分が劣つているからそう思つんだよね。」

「あの人気が誰だかわからないけどそんな卑屈にならなくてもいいと思つよ。簪には簪にしかないいとこころがあるんだから」

「……私のいいところ？」

「うん。例えばそのHS。自分で作れる」とは凄いと思つよ

「でも……あの人人は、できる……」

「げ、その人、そんなに凄いの……？」

「で、でもさ、俺にはHSは作れないよ。HSが作れたからすごいってなら、俺なんか……」

「で、でもあの人人は他にも何でもできるから……」

「こういうやり取りは数回続いた。俺が簪の凄いところを言つても、「……あの人もできる」の一点張り。段々と自分でもヤケクソになつていくのがわかるほど繰り返しだった。

「ああああああああ、もう。簪には簪にしかできないことがあるし、その人にも苦手があるんだって。完璧な人がいたらそっちの方が怖いよ！ 人って字は支え合つてできているものだしね」

「……編み物……」

「編み物？ あおれが一体どうかしたのかな？」

「その人の、苦手なこと……。あ、ありがとう……なんか、すつきり

した……

俺の必死の説得が通じたのか、簪はさつきよりいい表情をしていた。シャルルといい、どうして俺の周りには卑屈な女子が多いのかな？

「じゃあ、今度のトーナメント、よろしくね

「う、うん。……よろしく、お願ひします……」

いつも正式にペア結成と言つたところで、アリーナに着いた。さてと、模擬戦、始めますか。あ、よく考えれば織斑先生から私闘禁止つてなつてたんだつた……でも、模擬戦だから、大丈夫だよな。

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タドバ タ・ト・バ！  
！』

模擬戦の開始前。簪を待ちながら周りを見回した俺は一人の女子と目があつた。その人は俺と目が合うなり、ウインクをして、扇子を広げた。だが、気になったのは、その人は簪と、目、髪の色が同じつてこと。制服のリボンから見ると上級生だから姉つてことだよね。

「……待つた……？」

「いや、別に。それよりあそここいるのつて簪のお姉さん?」

俺が指す方向を、見て表情を暗くする簪。お姉さんと何かあったのか?

「……う、うん。でも、今は…あんまり、仲良く、ない」

「……そつなのか」

何とかしてあげたいとは思うけど、これは簪の問題だからむやみに首を突っ込むべきではなかつた俺はそれだけを言つ。さてと、始めよつか。

「……展開」

簪がそつ言つと、あつという間にエリが展開される。黒とシルバーの装甲。肩や肘、膝とかにあるガチャポンのカプセルみたいなパーツ。そして背中に展開される翼。デザイン、シルエットが他のERSより人型に近いそれはまさに、仮面ライダーバースをそのままERS化したものだつた。

「じゃあ、始めよつか」

コクリと頷く簪を見て、距離を取る。

少しの静寂の後、どちらともなく、動き出した。

「当たつて……！」

バースバスター似の銃を呼び出し、Jリナに向かつて撃つてくる。

2発、3発と銃弾は俺に向かって飛んでくる。それを横に、あるいは上にとよけ続ける。セルメダルを消費しない分、あっちの方が燃費（？）がいいんだろうなあ。そう思いつつもオーズカリバーで斬撃を飛ばしながら反撃する。簪はそれを樂々とかわすと同時に、再度、こっちを狙つてくる。

「くわ、のわ、おおとー！」

どう考へてもこの状況が続けば、こちらが不利なのは変わらないであろう。それ程射程の差、弾数の差は大きいんだ。シールドエネルギーを消費して斬撃を飛ばすこっちと弾数式の銃の向こいつ。このまま遠距離戦が続けば絶対こっちが負ける。せめてウナギか、クジヤクがあれば……

「……隙有り」

「しまつた！」

考へてるうちに動きが悪くなつた所をつかれて何発かくらう。ラッキーなことに大ダメージにはなつてないけど。とりあえずコレに賭けてみますか。

『タカ！ コリラ！ バッタ！』

メダルエンジと同時に腕を突き出す。そうすると、腕甲だろうか、その辺りのページが飛んでいく。まあ、要するにロケットパンチだな。

「ロケットパンチだ……？」

「これもかわす簪だけど、何か今、期待に満ちた顔をしていたよ。でも、これで隙は作れたはず。」

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

「セイヤッ！」

「え……？」

一気に近づいてカマキリソードを振る。突然の加速、それも瞬時加速並みの加速をたやすくやったことに驚いたのか声をあげる簪を何回か攻撃するのだが……

ギュイーンッ！

回転する何かに止められて、火花が散る。簪の右腕に装備されたドリルアーム。それに俺の攻撃は受け止められていたんだ。

「うわっ……！」

ドリルとソード、そのままつばぜり合いになるかと思つたが、そ  
うはいかなくて、ドリルの回転による振動で思つように力が入らな  
くて弾かれる腕。がら空きになつた胸にはドリルの一撃が。

「のわあああああああああああああ

ドジーン、そういう音と一緒に地面に叩きつけられる俺。シールドエネルギーは結構減つたけど、まだ戦えるな。でも、どうせって攻めようか。やっぱり大技で、かな？

「……クレーンアーム」

「え？」

クレーンアームの展開により、さつきまで右腕にあつたドリルはクレーンの先端になる……つまり、ドリルの射程が伸びること……アレ、かなり不利？

そう思つた瞬間に、飛んでくるドリル。ギリギリでかわせたけど……危なかつたあ。

『タ力！ ト・ラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

イチかバチかの逆転のためにタトバコンボに戻り、オーズカリバーを取り出す。シールドエネルギーの消費は大きいから斬撃は飛ばさない。でも、これならダメージは期待できるはず。

『スキヤニングチャージ！！』

「ツー？」

その音で何かするつてわかつたのか、簪はこっちに向かつて加速していく。ドリルやクレーンも展開しないで突撃してくることに疑問は感じたけど、背に腹は変えれないから、こっちも加速して簪に突っ込んでいく。いくよ、簪！

ガキンッ！

その音と共に着地する両者。着地によつて舞い上がる砂煙。場を支配する静寂の中、健在だったのは簪の方だった。こっちの一撃は

当たつていた。それでも俺が負けたのは、簪の翼はカッターウイングつてことを忘れていたからだった。

「英司、大丈夫……？」

「ん、大丈夫だよ。ハハ、それにしてもあつさりと負けちゃったな」「そ、そんなことないよ……英司も、強かつたし……」

その後も談笑は続いた。そういえば、そう思つて簪のお姉さんがいた方を見るとそこは誰もいなかつた。もう帰つたのかな、妹に一言くらいかけていけばいいかもしけないのに……

トーナメントまでもう少し。特訓あるのみ、かな。

## 完成と暗躍とチーム結成（後書き）

遂に（？）登場、簪のIS。でも、名前未定（笑）。いや、本氣で。何かいいアイディアがあつたら教えてくれれば嬉しいです。ちなみに自分が間がれたのは『打鉄・誕』とかでしつくりこなくて……。

とりあえず今回の原作（？）ブレイクは一夏にもシャルルの秘密をばらした。  
セシリア、鈴、簪、トーナメント出場可能。  
ラウラがヤミーの親に  
の3本です。次回もまた見てくださいね。ジャンケン、ポン……  
つてサ Hさんじやねえし！

それでは氣を取り直して、感想、意見等お待ちしております。

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（前書き）

Count the medals  
オースが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始

「ふう、疲れた～」

「お疲れ、英治」

部屋に戻つて来た俺を笑顔で迎えるシャルル。身長差も加わり、多少上目遣い気味になるそれは破壊力抜群で……、同室が女の子なんだなつて強く認識させられてしまうのだった。

「ねえ、英治。遅くなっちゃたけど……あの時は助けてくれてありがとう」

あの時？ つて、ああ。ペアのことか。

「いや、気にしなくていいよ。事情を知つてるのは俺と一夏だけだから。それに友達だからね。助けるのには理由は必要ないよ」

「アハハ、友達か……」

何故か微妙そうな顔のシャルル。何でだろ？ そう思つたけど、そんなに気にすることじやないかな、と俺は思つたのだった。

「でもさ、友達だから。やうじやなくともきっと英治は誰にだつて手を伸ばすと思つよ。それは、きっと英治が優しいからだよ」

「やうなのかな？」

「もうだよ。だからね、英治、色々とありがとね」

そう言われて俺は何か、照れくさかった。でも、誰かからこう感謝されるのは嫌いじゃなかつた。

（嫌いじゃないわ！ 嫌いじゃないわ！）

あれ、今オーナーと知らない黄色い怪人が思い浮かんだけど、気のせいだよね。

「といひでさ、シャルル。俺と一夏の前だつたら男口調にしなくてもいいんじやないかな。どこかで本当の自分でいられるのは大事だと思つしね」

「う、うん。僕も直した方がいいかなとは思つたんだけどね、徹底的に仕草とか口調とか覚えさせられたからすぐには直らないかも。で、でも……これじや女の子っぽくないのかな？」

「い、いや。そんなことはないと思つよ。シャルルは可愛いと思つし」

「か、可愛い……？ ほ、僕が？ ほ、本当に？ ウソついてない？」

身を乗り出しながら聞いてくるシャルルに驚いたけど、ホントのことだつたからすぐに頷いた。俺の反応を見ると、「そうかあ、僕可愛いのかあ、えへへ」と繰り返してたのは怖かつたけど……

「ま、まあ、そろそろ着替えないかな？ どつちもいつまでも制服のままつてわけにはいかないでしょ？ じゃあ俺は外にいるから着

替え終わつたら言つてね

「うつ言つて部屋から出ようとしたら、「待つてー」と服の裾を掴まれた。え、何?

「い、いいよ。そんなの。英治に悪いし。そ、それに……ほらー、男同士なのに部屋の外に出てたら変だつて思われちゃうよ」

そう言われればそうだな。だからつて男と女の子が同じ場所で着替えるのは……?

「ほ、僕は気にしないから。ね、英治も普段通りでいいよ」

何でか一生懸命になるシャルル。うつ言つシャルルの気持ちを無駄にしないために断ることはできなかつた。

「じゃ、じゃあ、俺も着替える」と云ふよ

「うふ、そうして

にこつと笑うシャルル。その頬は少し赤い気がしたけど、着替えるんだつたらわざと着替えてしまおつ。そつ思つたからあんまり気にしないことした。

じー。

上着を脱いだとき、なぜか後ろから感じる視線。誰がつていつのは考へるまでもないけど……。

「ねえ、シャルル?」

「ふえ！？ な、何かな？」

動搖した声をあげるシャルル。その反応には「ひちもひつくりで  
びうずをかけたらしいのかわからなかつた。

「と、とつあえず」つち見てないかな？」

「え、え、え、え、そそそ、そんなんことないよ

「そ、そう？」

とつても拳動不審なシャルル。まあ、本人が違うつて言つんだからこれ以上、聞くのもよくないよな。そう思つて着替えようとする。

じー。

それでも、感じる視線。えーと、シャルルさん。どうしたのでしょうか？

「えつと、覗きはよくないよ」

「にゃ！？ ぼ、僕はそんなこと……きゃん！」

再び動搖したシャルル。そんな彼女の方から、どたつ、そういう音と悲鳴が聞こえた。

「ちょ、大丈夫？ ……あ

「いたた、足がひつかかちやつた……え？」

不意に振り向くとシャルルと田があつ。とこりひとは、彼女の状態も見えてしまつわけで……。俺の視界に[写]つたのは脱ぎかけのズボンに足をひっかけて転んだシャルル。どうひとは、その……下着が見えてしまつたわけで……

「「」「メンー」

瞬時に後ろを向く。色はピンクで……つて、違う違う。落ち着け、落ち着け。

「……見たよね、英治？」

「「」めんなさい」

慌てよつが、落ち着こつが、俺には謝るしかなかつた。

「ちや、ちやんと言つてくれれば僕は、その……」

「ん？ 何か言つた？」

「い、いや、何でもないよ。何でもないからー」

「あ、うん。わかったから、落ちつこー」

「あ、う……／／／

シャルルは顔を赤くして黙り込んだ。えつと、これって俺が悪いの？

その夜。英治が眠りに着いた後もシャルルは起きていた。いや、眠れなかつた。その表現の方が正しいのかもしれない。さつきのハブニングを思い出しては顔を赤くして、悶える。それの繰り返しだつた。そういうえば、シャルルはふと思った。自分の下着を見たとき、英治はどう思ったのか、と。自分は男としてI.S学園に来るために、仕草や言葉遣いを教え込まれた。そして先日までは男として接してきた。英治は可愛いと言つてくれたが、それでも不安なことはあつた。自分を異性として意識しているのがどうか。そして今日、自分の下着を見られた。それで意識してくれれば……

「な、何考えてんだろ？　僕は……」

その咳きに答えるものは誰もいない。少しの静寂の後、頭が冷えたシャルルは眠ろうと目蓋を閉じる。想い浮かぶのは英治の顔。

（ああ、もう一つ、でも――）

すぐさま顔を赤くする。英治を異性として意識したあの日。母がいなくなつてから、シャルル自身と向き合つてくれた少年。半分やけだつた自分にやりたいことを考えさせてくれた。

気が付けばシャルルは自分の布団を出て、英治の寝顔を覗いていた。心地よさそうな顔の英治。彼はどんな夢を見ているのだろう？そんな英治を優しい表情で見つめていたシャルルは、静かに彼の額にキスをしたのだった。

「おやすみ、英治」

彼女の眠れない夜は続く。

6月の最後の週。この日から学年別トーナメントは始まる。IS学園にはそのトーナメントを見るための来賓が来るため、1回戦がむづじき始まるといつに忙しかった。

「で、調子はどう、一夏？」

「おう、バッヂリだ」

男子があてがわれた更衣室。そこにいるのは俺と一夏、シャルル。それから俺のペアの簪だった。着替えも終わつたし、作戦会議的な名目で彼女もここにいた。最初は簪はその内気の性格のためか、一夏とあまり話さなかつたが、一夏の性格のおかげか、彼女も人並みには一夏と話すよつになつていたんだ。

「しかし、すごいな、こりや……」

モニターから見えるアリーナの観客席。そこには政府のお偉いさん、技術者等々すごい顔ぶれが集つていた。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には関係はないみたいだけど、上位に入ればチェックが入るかもね」

「……それだけじゃない……多分、織斑君と、英治にも視察が来てる……」

「ふーん、」苦労なことだ」

シャルルと簪の説明にも興味がなさそうな一夏。どうやら一夏が気になるのは……

「一夏はボーデヴィッシュさんとの戦いだけが気になってるからね」

「まあ、な」

やつぱりね。最初の出会いからして良くなかったし、この前の敗北。男としては同じ相手に2回も負けたくないからね。その勝負的な問題では俺もボーデヴィッシュさんの標的らしいけど

「一夏、あんまり感情的にならないでね。彼女、ISの操縦技術ではこの学年1番だと思うから」

シャルルの言つたことは俺も思つたはある。この前の戦いは彼女のISとラトラーターが相性がよかつたからで、操縦技術では足元にも及んでないはず。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

シャルルは呟く。今回のトーナメントは2人ペアで行う、今まで

のとは違う形式。だからかな、対戦表を作るためのシステムが上手く作動できなかつたみたいで、今朝から手作りのくじでトーナメント表が作られていたんだ。

数分後、発表されるトーナメント表。それには驚きの組み合わせがついていた。

Aプロツク1回戦：火野英治 更識簫▽セシリア・オルコット  
鳳鈴音 同じく2回戦：織斑一夏 シャルル・デュノア▽ラウラ・ボーデヴィッヒ 篠ノ之簫

「…………」

ラウラと簫がいる更衣室の一角は沈黙に包まれていた。周囲の興味がなく、特定の誰かと組む気がなかつたラウラと特定の誰かを誘えず終いの簫。ペアが見つからず抽選で組まれたのは彼女達だけだつた。望んで組んだわけでもないし、性格的な問題からか、彼女達は全くそりがあわなかつた。連携のれの字もないくらいに。

（初戦が一夏、これに勝つても次は火野達かセシリア達のどちらか、だが私は負けるわけにはいかないのだ！）

そんな具合に気合を入れる筈とは反対にラウラはその口を釣り上げた。まずは自分の敬愛する教官に泥を塗つた一夏を倒せて、次に自分に屈辱を与えた英治を倒せる。彼女にとつては都合のいい組み合わせだった。ラウラの2人を倒すという想いは狂気に変わり、彼女の中にあつた。それが火種になることは誰も知らない。

## ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（後書き）

やつとで次回からトーナメントに入ります。我ながら展開が遅い  
と思っていましたので、次の巻からは適度なペースでやりたいな、  
と。

それでは意見、感想等お待ちしております。

## 競争の仕事で使われるコードネームリスト開始（前書き）

Count the medals  
オースが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## 繋り合ふこと叶つたことトーナメント開始

「わいと、お手柔らかにね、セシリ亞、鈴」

「勝負とこ'づからには全力でいきますわ」

「そうよ。あんたらに勝つてあたしと組まなかつた一夏にお仕置きするんだからー。」

「……話に入れない……」

アリーナに浮かぶ4機のT-U。トーナメント1回戦である俺、簪ペア対セシリ亞、鈴のペア。この2人は自分に一夏が自分と組まなかつたことに立腹で、その怒りの矛先が俺にもむいているような……

「そ、それにわたくしは優勝しなきやいけないんですのー。」

「セシリ亞ー！ あんたも、例の件を……ー！」

それに一夏の件もあつてか、やる氣はMAXだらうな……。それでも、俺は簡単に負ける気はしないけどね。こつちだつて練習してきたんだから。

『それでは、両チーム規定の位置へ』

試合開始を促すアナウンス。それに従つて、セシリ亞達と距離を取る。

『5、4、3、2、1』

「簪、援護お願い！」

「……任せて」

試合開始とともに俺は加速する。接近戦向けの俺と、射撃武器がある簪。どっちが前衛をやるか、なんて簡単な話だった。というか、俺が後衛に向かないだけなんだけどね……

「来なさい、英治！」

激突するオーブカリバーと双天牙月。やはり相手の前衛は鈴であり、つばぜり合いとなる。金属音が鳴り響く中、俺は押されていた。パワー型の甲龍相手ではタトバコンボではパワーに向かないからだろつ。

「くつ！」

思つた通りに弾かれたのは俺だつた。パワーにはパワーを。

『タカ！ ゴリラ バッタ！』

「メダルを変えたつて！」

鈴がそう叫ぶなり、吹き飛ばされる俺。殴り飛ばされたような衝撃の中、俺は弾道、銃口の見えない衝撃砲への対応方法を考えていた。

「 もあ、 おゆきなやー。」

「 当たらなかつたら、 どひつひと、 なー。」

一方の簪は、 後衛同士、 セシリ亞との打ち合いになつてゐた。 セシリ亞の操作するビットを縦横無尽に飛びながらかわす簪。 ビットの隙を狙つて本体を狙うが、 その行動を読まれていたのか簡単によけられる。

「 ..... こいつも、 連続だと .....」

ビームの雨の中、 簪は呟いた。 簪が苦戦しているのは、 セシリ亞の成長が原因だった。 俺や一夏と戦つた時の欠点、 ビットの操作中、 本体は何もできない、 を少しづつ克服してからだ。 一度に5つのレーザー。 俺だったら、 手も足も出ないかもしねない。

「 こいつなつたら .....」

何かを思いついた簪は地面に向かう。 空中では360度警戒しなければいけないが、 地面にいれば180度の警戒で済む。 それに、 簪には他にも手があつた。 田には田を。 誘導兵器には誘導兵器を。

「 ..... CLAWS、 起動」

瞬間、翼等の装備が外れ、1つの形を作っていく。完成したそれはサソリのような外見。CLAWS・サソリ。CLAWSとは、 Barnesの装備「Cannon-Leg-Arm-Wing-System」の略称で、ブレストキヤノン、キャタピラレッグ、ドリルアーム、クレーンアーム、ショベルアーム、カッターウィングが含まれている。その各装備が合体したものがCLAWS・サソリ。本来のベースではセルメダルを多量に消費するから、多様はできないんだけど、ISで再現されたそれにはデメリットが少ない。強いて上げるのなら、翼もベースの1部となっているため、飛行速度が落ちることであるくらい、かな。ちなみに動かし方はセシリアのビットと同じように操作するが、あらかじめ組まれたプログラムに従うかの2つ。

「な、なんですか、それは！？」

簪が展開したCLAWS・サソリに田を丸くするセシリア。いや、セシリアでなくとも初見の者ならそれに驚くと思つよ。

「……お願い」

簪の指示でセシリアに向かつていくCLAWS。さすがに飛行能力はないのか、右腕をワイヤーで飛ばす。

「そんなもの、あたりませんわっ！」

横に逃げるセシリア。けど、CLAWSもその方向に回転することで、追撃する。今度は上によける。そこに飛んでくるのは、左腕。2本の腕の攻撃をかわしながら、セシリアは距離を取つた。相手の攻撃はワイヤー。その長さがどの程度のものかは知らないけど、距離を取れば届かないと思つたんだね。

「」の距離なら……ッ！」

CLAWsの射程外に来れたセシリアめがけて飛んでくる弾丸。セシリアがその方を向くと、銃を構えた簪がいたのだった。

「ビットは、壊した。後は、貴方だけ……」

やられた。セシリアが思ったのはそつだつた。CLAWsにて自分に隙ができた。簪はそのタイミングを見逃さず、着々と一つ、二つとビットを落としていった。

「くつ、まだわたくしは負けてないですわ！」

セシリアもレーザーライフルを構える。お互いの銃口が狙いをつける。

ドガアアンッ！

壁に叩きつけられる音が響く。衝撃砲の直撃をまた受けた俺だけ、ただでは転ぶ気はしなかつた俺は腕甲がないゴリラアームを見た。俺がぶつかった場所とは逆方向、そっちにも土煙は上がつた。

「やつてくれたわね……」

鈴もすぐさま浮上して、こっちに向き直す。カウンターとばかりに放ったバゴーンフレッシュナーは彼女に直撃して、ダメージを負わせるのに成功したのだった。でも、シールドエネルギーの残量はこっちが負けている。

簪の方は順調にセシリアを追い詰めていた。とりあえず、女の子に活躍を取られるのは格好悪いかな、そう思った俺は気合を入れ直した。さあて、どうやって攻める？ 衝撃砲の回避は鈴の視線から予測するしかないとして、どうやって有効打を与えるか……、最初の切り結びでパワーではこっちの分が悪いことはわかつてゐる。なら、スピードしかないよな。

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

「ツ！」

鈴が反応するが、襲い。両腕の刃でダメージを与える。厄介な衝撃砲への対抗策としてはいちかばちかだけど、インファイトっていう手段もあるんだ。

「ちょこまかと！ あたりなさい！」

ガキン！

連結した双天牙月を交差した両腕で止める。力押しされているけど、こうこう時のためのクワガタだから！

「しびれるけど、ゴメン！」

「へ？ もやああああああああああああああ

怪しい煙をあげ、バランスを崩す甲龍。絶対防御が発動したのか、鈴のシールドエネルギーはかなり減っていた。ここしかチャンスはないよね。

『スキャニングチャージ！！』

加速しながら、電撃を纏つたすれ違いざまに両刃で切り裂く。鈴のシールドエネルギーはゼロになっていた。鈴に勝てたことにより、俺は着実にレベルアップしているのを実感していた。

激しい銃撃戦の中、簪とセシリ亞、両者のシールドエネルギーは減っていた。簪はCLAWSを解除して、カッターウィングを展開していた。空中での銃撃戦。弾丸、レーザー、ミサイルが入り乱れる戦い。

「……そこー！」

「もやあー！ まだまだですわー！」

「ー！」

ブルー・ティアーズから放たれたミサイル。執念から撃たれたそ

れを簪はかわしきる」とはできなくて、煙があがる。

「やりましたの……？」

ライフルを構えたままセシリアは呟く。そして、氣づく。煙の中、立っている影に。だが、簪のエスは試合開始当初と様子が大きく違っていた。両腕、胸部、足。それぞれに装備があつた。ベース・ディ。CLAWSフル装備のそれは、簪が好きなアニメの表現で言えば、フルアーマーかな？

「これが、とつておれ……」

クレーンアームの先端に接続されたドリルアームを飛ばして攻撃する。対応が遅れたセシリアはその攻撃にあたり、ワイヤーに巻き付かれる。

「くへ、やつてしまいましたわ……」

後悔をするセシリア。それとは反対に簪はセシリアをロックしたまま、ブレストキャノンのチャージを始める。

「ブレストキャノン、ショート」

セシリアが光の波に飲まれると共に試合終了のブザーが鳴る。俺は簪のどこに行く。

「おつかれ、簪」

「…………」

自分のISで勝ったことが嬉しかった簪は嬉しそうに頷く。次は一夏の試合だな。

「お疲れ、英治、簪」

「ああ、ありがと」

ピットに戻つてみると、一夏とシャルルがいて、スポーツドリンクをくれた。早速一口つと。

「一夏、調子はどう?」

「ああ、バツチリだぜ。ラウラの方が実力は上かもしれないけど、やれるだけのことはやつてくれるさ」

「いや、そこは絶対勝つ、とか言おうよ」

「僕もやつと思つよ」

「……同感」

3人に言われて、頭をかく一夏。すぐさま、「わかったよ」と言う。

「絶対、勝つてくれるぜー。」

「……今更、言つても……」

「うそうそ

「アハハハ、じゃあ英治、行つてくれるよ

「ああ、頑張つて」

「ふん、逃げずに来たとはな。まあ、いい。貴様はこじりで……」

「やれるのならせりつてみろよ。」の前とは違つからな

試合開始前から繰り広げられる舌戦。この決着がつかないまま、試合開始のカウントダウンが始まると

「「叩きのめすー。」」

ブザーと一緒に2人の言葉は重なった。

「おおおーー。」

瞬時加速をしながら雄叫びをあげる一夏。でも、それと一緒に嫌な予感が俺にはしたんだ……

## 繋がり合ふことやつれることトーナメント開始（後書き）

やつとで始まつたトーナメント。この調子で行けば夏休み、その後はいつになるのか（汗）これじゃ夏休みの風都編が……ゲフンゲフン、今のはなかつたことに。

今回の執筆にあたつて、亞種コンボの必殺技を確認（wikiで）したところ、こんな感じに……

頭…属性強化（水、光等）または視力等の強化。ただしサイは不明  
腕…武器の強化。クジャクはギガスキン。

脚…バツタはジャンプ。チーターは加速。タコは脚の固定。後は？  
という具合になりました。劇中ではタカキリバ、ラキリバ、タカキリーター、タカジャバ、シャゴリタしか使ってないので、推測多  
いですけどね。

## チームワークとラカハの欲望とその代償（前書き）

予約投降する口にいちを間違えて10／9にしていました。すみませんでした。以後気を付けます。

Count the medals  
オーズが使えるメダルは……

タカ  
クワガタ  
カマキリ  
バッタ  
ライオン  
トラ  
チーター  
ゴリラ

## チームワークとラウカの欲望とその代償

「おおおつー

「ふん……」

試合開始と共に瞬時加速する一夏。ボーデヴィッシュさんは動搖もなく右腕を突き出す。トーナメントの何日か前、ボーデヴィッシュさんの慣性停止能力『AIC』に対抗するための策が一夏にあることを話したのを思い出す。AICもエネルギー波なら零落百夜で切り避けることを。

「くつ……ー

だが、対策があるからってどうにかなるわけじゃなく、AICに止められる一夏。一夏がAICに対抗できるのはエネルギー波が雪片式型に当たつたときだけ。おまけに一夏の動きは読まれやすいらしい。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな

「……そりゃどうせ。以心伝心で何よりだ

「ならば私がどうするかわかるだろ?」

ボーデヴィッシュさんはレールガンの照準を一夏にあわせる。だが、一夏には焦りの表情はなかった。だって……

「それないよ

ボーデヴィイッヒさんの後ろからシャルルはアサルトカノン ガルム の引き金を引く。一夏のA.I.Cを解除して間合いを取るボーデヴィイッヒだ。

「逃がさないよ

ボーデヴィイッヒさんと向き合ったシャルルは瞬時にアサルトライフルを展開する。戦場のリアルタイムに合わせた武器を瞬時に展開できるシャルルの特技、『ラピッド・スイッチ 高速切替』は遺憾なく発揮されていた。

「私を忘れてもらつては困る」

シャルルの追撃を阻むように立ちふさがる篠ノ之さん。専用機持ちではない彼女は打鉄を纏っていた。打鉄は防御に優れている。それの照明のように盾で銃弾を弾きながら剣を振るう。

「それじゃ、俺も忘れないよ!」

今度は一夏が割り込み、篠ノ之さんと切り結ぶ。何回か剣がぶつかっていくけど、その度に篠ノ之さんは後ろに押されていく。白式と打鉄の性能差が大きくてた瞬間だった。

「くつ、こー!」

自分が不利なのに焦つたのか大振りになる篠ノ之さん。もちろんこのチャンスを見逃すはずはなく……

「シャルル!」

「うん！」

雪片で攻撃を受け止めた一夏が叫ぶ。それに呼応するようにシャルルはアサルトライフルを構えたまま篠ノ之さんの背後にまわる。

「はつ……！」

顔を青ざめるけど、もつ遅い。シャルルは引き金を引こうとしていたから。

「！？」

突然、宙を舞う篠ノ之さん。どう見ても不可思議な軌道で篠ノ之さんはアリーナの端へ飛んでつたけど、大丈夫なのか？

「邪魔だ」

篠ノ之さんを投げた張本人、ボーデヴィッヒさんは呟く。彼女のワイヤーブレードが篠ノ之さんを放り投げたのみたい。

「なつ、何をする！」

投げ飛ばされた篠ノ之さんは抗議をするけど、聞く耳を持たれず。ボーデヴィッヒさんは一夏をプラズマ手刀で追い詰めていく。その正確無比な攻撃に一夏は攻撃を凌ぐだけで精一杯つて感じだつた。シャルルはすかさず一夏の援護にまわるうとするけど、ワイヤーブレードに行く手を阻まれて、その回避ばかりになつていた。だけど、何回かその応酬が繰り返されると、シャルルは急に向きを変える。その視線の先にいるのは、篠ノ之さん。どうやら、一夏

がボーテヴィッシュさんの足止めをしている間にシャルルが篠ノ之さんを撃墜する。やうすれば安心して2対1でボーテヴィッシュさんと戦える。

「一夏が相手じゃなく『メンね』

「なつ……！？ バカにするなつ！」

激昂した篠ノ之さんの一撃を右手に展開した近接ブレード ブレード・スライサー で受け止めたまま、左手のアサルトライフルの照準をあわせる。

「くつ……」

口クな回避行動を取ることもできなくて、篠ノ之さんのシールドエネルギーは減つていぐ。

「先に片方を潰す戦法か。いい戦法だな、だが無意味だ」

追い詰められている篠ノ之さんに興味を示さず、一夏への攻撃を続けていく。自分の武器がブレードだけ、離されたら一気に決められることがわかっているから、一夏は必死で食らいついていた。

「つまおおおおー！」

自分に気合を入れて、高速近接戦闘を続けていく一夏。お互いの武器が交差する金属音が一定のリズムでフィールドに響いていく。

「……そろそろ終わらせるか

その言葉と共に一夏の動きは止まる。一夏は動こうと足搔くが、体は少しも動かすことはできない。一夏はマズイなつて顔だけど、アリーナ全体を見ることができる俺は戦いはまだまだ続くことがわかつていた。

「ドンッ！」

「がつ……！」

響きわたる銃声。ボーデヴィッヒさんがダメージを受けると同時に一夏は動けるようになる。そして一顆の隣に降り立つ影。

「お待たせ、一夏！」

「サンキュー、助かったよ」

篠ノえさんを下したシャルルが合流してから、一夏の反撃は始まる。一夏の突撃をサポートするシャルル。ワイヤーブレードを撃ち落とすなどで、道を作っていく。

「一夏！」

「おひー！」

加速する一夏。零落百夜が当たるとヤバいことはわかっているボーデヴィッヒさんは右手を突き出し、AICOを発動する。度重なる零落百夜の使用、試合初期のダメージと重なつて白式のシールドエネルギーは残り少ない。後1発くらえば、撃墜だろ？ それを理解しているボーデヴィッヒさんは口元に冷笑を浮かべる。

「これで終わりだ」

「ははっ、大事なことを忘れているぜ。これは2人組なんだぜ」

「なつ！」

「これでつ！」

シャルルは右腕のシールドをボーデヴィイッヒさんに押し当てる。シャルルのEISが何なのか、それに気づいたボーデヴィイッヒさんは焦りの表情を見せる。瞬間、縦の装甲がはじけ飛び、リボルバーと杭がついた装備が現れる。ノットパニッシュ…『盾殺し シールド・ピアース』。受業で習った第2世代最大の攻撃力を誇る武器。

ズガンッ！ ズガンッ！ ズガンッ！

「がつ……ぐつ……」

盾殺しの連射にシールドエネルギーがこつそり減っていく。誰が見ても、シャルル達の勝利だった。でも、何だろ、この近づいてくる嫌な予感は……

（私はここで負けるのか……？ 織斑一夏、そして火野英治を倒すこともなく？）

自分の敬愛する教官に泥を塗ったアイツを。教官 織斑千冬は最初に自分を認めてくれた存在だった。そしてそんな存在だから、憧れ、近づく、いや、彼女になりたいと願う。一度、千冬に強さの理由を聞いてみた。同じことをすれば彼女に近づけると思って。だが、千冬の特別は弟だった。弟 織斑一夏だけが千冬に特別な表情をさせる。それが許せなくて完膚なきまでに叩き潰すことを決めた。それなのに、火野英治に負けた。自分の強さを見せれば自分の敬愛した教官が帰ってくると思ったから。

（お前、力が欲しいンだよなア。だつたら望め。そうすりや手に入るぜエ）

頭に響く声。力が欲しいラウラは迷うまでもなく、力を望む。それが、人に許されることのない力とは思わず。

「ああああああああああ！」

突然、身が叫んばかりに叫びだすボーデヴィッヒさん。その体からは、銀色のメダルが流れ出す。

「織斑先生！ アリーナの遮断シールドの解除を！ 早く！」

『わかつた、後で説明してもらつぞ』

すぐさま、アリーナに降りる。ビービーの世界にヤミーが！？

「英治、アレは一体なんなんだよ？ ラウラから突然メダルが……」

「一夏は下がつていて、ここからは俺のやることだから」

ヤミーの足元に倒れるボーデヴィッシュを見つめる。彼女は自分の過ちに気づいたのだろうか、その体は震えていた。次にヤミーに手をやる。ワニのようなヤミー。ワニが5体のグリードのどれにも該当しないことに疑問を感じたけど、今はそれどころじゃないから！

「どこに行つても、人の欲望は消えないし、利用するやつはいるのか。変身！！」

『タカ！ トラン！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！  
！』

トランクローで切りかかる。が、しかし、ワニヤミーには大したダメージは与えられないみたいで、相手が軽くよろめいただけだった。何てパワーだ、こいつは……

「織斑一夏を……火野英治を……倒すつ……」

ワニヤミーは叫ぶ。俺と一夏を倒すつて。つまりボーデヴィッシュさんの欲望はそうだつたつてこと。俺が狙われるのはラトランターでボーデヴィッシュさんに勝つたからだろ。一夏が狙われるのは……事情はわからないけど、ボーデヴィッシュさんが因縁みたいなことを言つていた。それで、一夏を消そうと……

そんなことはさせない！ そう思つて格闘、つまりパンチやキックの応酬で立ち向かうけど、相手には大したダメージを「えれてる気がしない……。元々ワニって動物はイメージに似合わず、足が速いし、そのアゴの噛み付きはあがいても逃げることはできない。その能力はヤミーになつても充分に発揮されるから、かなりの強敵だ。おまけにアリーナはシェルターこそかかっているが、コイツが暴れると他の皆が危ない。アリーナの外に行けばコイツに対抗できる手段があるのに」。

「はあ……」

右ストレートを打ち込む。だが、その拳は簡単に止められて首を絞め上げられる。

「あ、ぐつ……！」

片手で持ち上げられる。地面に足がつかず、首も絞められていて力が入らない。おまけに右腕は掴まれている。どうする？

「英治……」

刹那、シャルルがヤミーの背中にアサルトライフルを撃ち込んだ。やはりダメージは「えれていなければ、今のショックで首絞めから脱出はできた……

「英治、大丈夫？」

「ああ、ありがとう、シャルル。助かつたよ」

ヤミーと距離を取つたところで近くに来るシャルル。このアリー

ナにいるのは、俺、シャルル、一夏、ボーデヴィイッヒさん、篠ノ之さんだけど、シャルル以外の3人は試合でEISのシールドエネルギーへは死きてる。早く退避してもらわないと。

「一夏！ 篠ノ之さんとボーデヴィッシュさんを連れてアリーナから出て！ シヤルルはその援護を！」

「……ああ、わかった。筈、ラウラ、行くぞ」

自分が何もできないことに悔しそうな一夏。でも、自分ができることはそれくらいだと分かっているからこそ、すぐに行動にする。シャルルに目をやる。シャルルは頷いて、一夏達の近くに行く。これで、安心してコイツと戦えるな。ガタキリバで一気に行くか？それともラトラーターで？ 考えながらも格闘戦を続ける。拳やクロ一がぶつかり合い、火花が散り、倒れ、転がる体。とりあえず一夏達が早く避難してくれれば……

そんなどきだつた、一夏達の方に空から飛来してくる何かが来たのは。

赤く、肩に扇の様に広がる翼。鳥のような顔。飛来したのはクジヤクのエイギ。ソイツが来た場所は運悪く、一夏達が出ようとした出口の前だった。

無言で手を突き出すクジヤクIG。その手から放たれてのは火炎弾。生身の人間が当たつたら冗談じやないことになる威力のはず。

「皆、危ない！」

それにいち早く対応したシャルルはラファールの盾を構え、一夏達の前に立つ。だが、ジリジリとシャルルが駆るラファールは後退していく。

「うわああああああ

火炎弾は防げはしたもののシャルルまでがエスを解除されてしまふ。……このままじゃマズイ。焦る俺の心情は関係なし、クジャクエGは一夏達に近づき、その爪を降り下ろしそうとする。

「せせてたまるか————！」

『タカ！　トーラー！　チーター！』

タカトーラーターとなつて、一夏達とエGの間にに入る。そして、すぐさま降りおろされ爪。

「がつ……」

切り裂かれた俺は、転がり、そして倒れる。メダルは飛ばされてなくて、変身は解かれてないけど、この体力じゃコンボはできなさそうだな。

「ぐう……ハア……ハア……まだだ」

誰の目から見てもボロボロ。一夏は「俺達に構わず逃げろー」「って叫んでる。結構キツいなあ……。目がくらんできた。それでも、俺は立ち上がる。後悔だけはしたくない。手が届くなら伸ばす。届かなかつたら誰かの手を掴んで、届く距離を伸ばす。そんな譲れなもの、守りたいものがあるから、まだ立てるんだ。

フラン。立ち上がるナビ、よろめく。でも、構えを取る。来るなら、来い。俺はそう簡単には負けないから。

2体の怪人は駆け出して来る。そんな時だった。空に道ができるいたのは……。そして響くのはバイクのエンジン音。

「伊達明、参上！」

現れたのはタコカンの道を使い、ライドベンダーで現れた、伊達さん、いや、バースだった。

## チーモワークとラカワの欲望とその代償（後書き）

次回、皆大好きあのマシンが登場！

ところで、本小説で出したオリジナルの爬虫類グリード、ワース。彼のコアメダル、コブラ、カメ、ワニについてですが、そのメダルは他のタカやバッタと亞種形態になっていいでしょうか？ オーズ本編ではそんな描寫は無かつたですし、一般には爬虫類メダルは亞種ができないって見解が大多数です。もしかしたら、自分が気づいてないだけで、公式でできないって断言してくるかもしれません。そういうわけで、爬虫類メダルはブラカワニ専用か、亞種可能にしていいか、意見を貰えると嬉しいです。他にも感想等お待ちしております。それでは、また次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3977v/>

---

欲望の王と無限の空

2011年10月8日13時00分発行